奈良国立文化財研究所年報

2000-Ⅲ

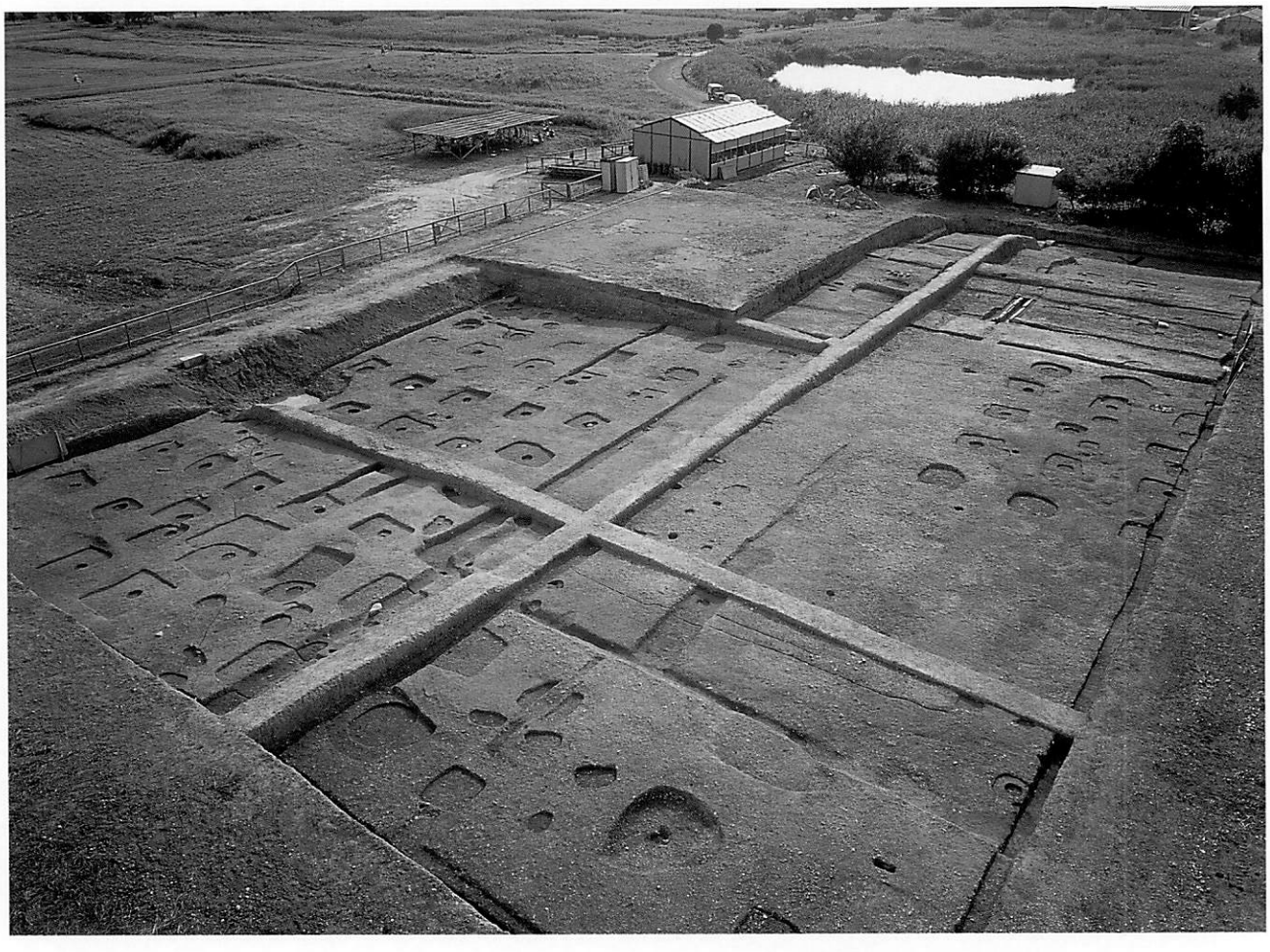
ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 2000-Ⅲ

奈良国立文化財研究所

1999年度の平城宮と平城京の調査

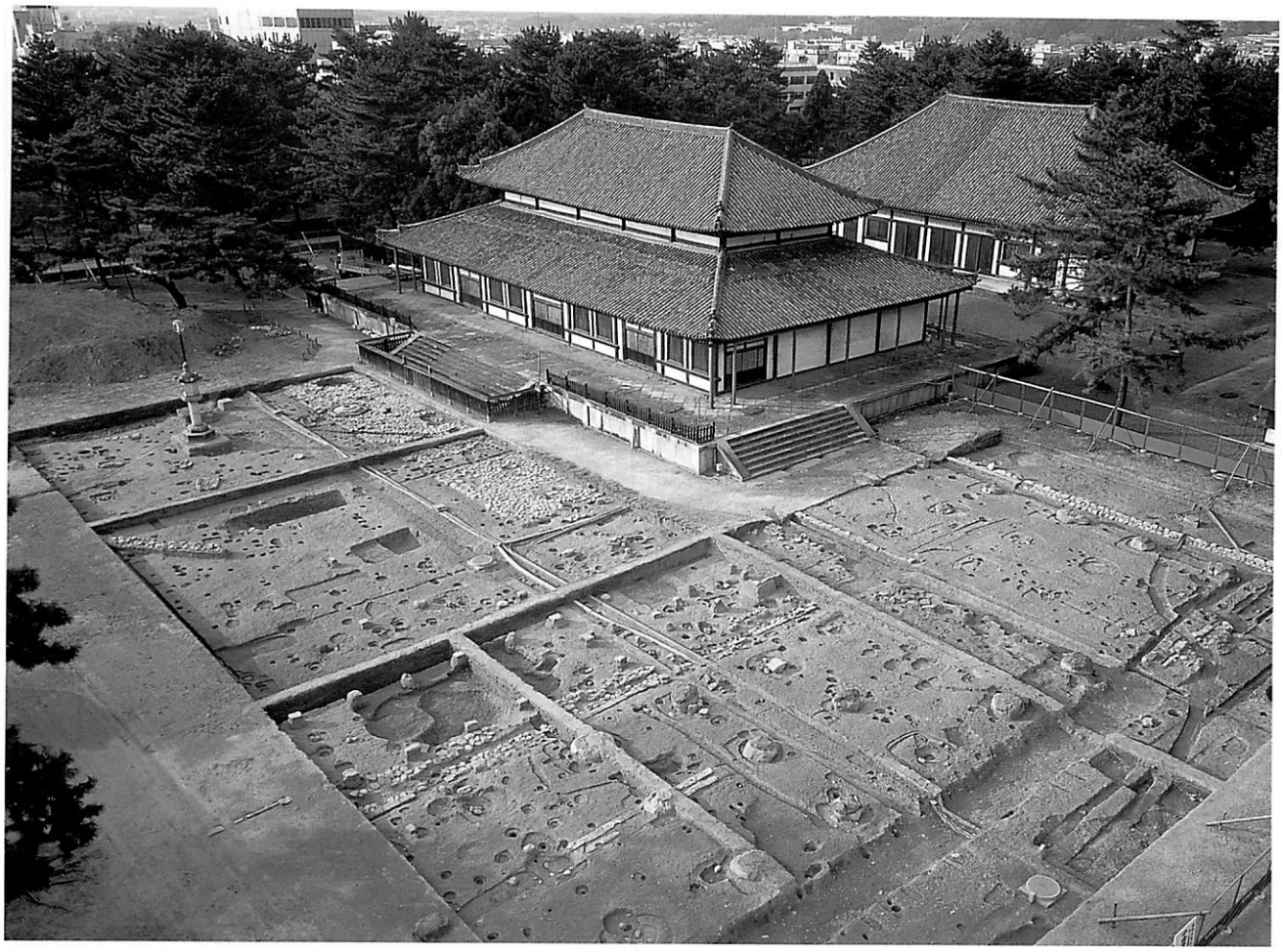
東院南門前の調査（第301次調査区全景・南西から）
二条条間路北側溝SD5200Bbが築地塀と平行して調査区を横断しており、護岸の石とその抜き取り痕跡がよくわかる。復元された門SB16000Cの前面には敷石と橋脚も検出している。築地塀内側の奥は復元整備された東院庭園、画面左上にみえるのは宇奈多理坐高御魂神社の杜。
本文４頁参照（撮影／中村 一郎）

平城宮東院庭園の蛇行溝（第302次調査・南から）
曲水宴に用いたと推定できる細かく蛇行する溝。東院庭園で２例目の発見。東院庭園の中央建物西側を南流し池に注ぐ。底石が良く残り、上手には玉石敷きの小池が２基ある。溝の両側は石敷広場で儀式用空閑地。広場の西は掘立柱塀で目隠ししている。本文11頁参照（撮影／中村 一郎）



第一次大極殿院（第305次調査・北西から）
上の写真は調査区を大極殿側から俯瞰。調査区内遠方が大極殿院の西を限る西面築地回廊。奈良時代前半は、手前からそこまでが塼積壇の上となり、建物は一切ない。柱穴群は奈良時代後半の西宮と、平安時代初頭の平城上皇の宮殿に伴う掘立柱建物遺構。調査区南東部の塼積擁壁を埋めた整地土のラインが斜めに延びる。本文14頁参照（撮影／中村 一郎）

塼積擁壁（第305次調査・東から）
出隅部分の様子。コーナーを挟んで塼の積み方に精粗がみられる。背後はすべて盛土で、裏込めの粘土を詰めながら塼を積み上げている。塼前面の角度はコーナーの東側 で70度、西側で65度である。
本文16頁参照（撮影／中村 一郎）



興福寺中金堂院回廊（第308次調査・南東から）
「境内整備構想」にもとづく第２年度の調査で、中金堂院を囲む複廊の北東隅を中心に発掘した。調査前から地上に露出していた礎石は、ほぼ創建当初から使われてきたことが判明し、一部で平安期の雨落溝もきれいに残る。また、回廊造営以前の平行する２条の東西溝を発見した。
本文32頁参照（撮影／中村一郎）

西隆寺出土遺物（第306・309次調査）
西隆寺の調査では、石製六角小塔の屋蓋と基座、小型海獣葡萄鏡、経軸頭金具などの特殊遺物が出土した。石製六角小塔の基座は、正倉院三彩塔の基座と同形同大であることが注目される。
本文53頁参照（撮影／牛嶋 茂）

興福寺中金堂院出土遺物（第308次調査）
緑釉水波文塼（手前）は、半肉彫りで水波文を律動的に表現する。創建時の中金堂の荘厳を偲ばせる。鼻の高いユーモラスな鬼面文軒丸瓦（中）は他に類例が乏しい。金箔を施した桐文軒丸瓦（奥）は桃山期のもので、大和での出土は初例。本文37頁参照（撮影／牛嶋 茂）

法華寺阿弥陀浄土院出土の金銅製垂木先金具
薄い銅板を切り抜いて作ったもので、おもて面のごく一部に鍍金が残る。文様は花文と対葉形、蕨手形を対称的に配置したもので、流麗な構成をみせる。様式年代的には奈良時代前半のものともみられるが、庭園の造営年代にもかかわることであり、なお、検討の必要がある。
本文59頁参照（撮影／中村 一郎）

法華寺阿弥陀浄土院の園池SG7700（第312次調査・北から）
従来より存在が想定されてきた園池をはじめて確認し、浄土庭園の先駆けと呼ぶにふさわしい内容を持つことを明らかにした。天平人が思い描いた阿弥陀浄土世界とは、このような姿だったのだろうか。
本文56頁参照（撮影／中村 一郎）

大乗院庭園西小池（江戸時代）の護岸
（第310次調査・北から）
大乗院の中心建物群に隣接する西小池は庭園の破棄後埋め立てられ、一部が遺存するのみであった。地形測量や文献、絵画史料等を用いた森蘊氏の復元をはじめ多くの研究成果が蓄積される中、発掘調査による庭園の実態の把握が必要であった。今回の調査で、江戸時代に構築された池の東岸を検出したことにより、池の正確な位置や護岸の方法がわかり庭園の復元に有効な情報を得た。
本文42頁参照（撮影／中村 一郎）

目　次

Ⅰ 平城宮の調査

東院地区の調査　第301次・第302次　4
第一次大極殿院地区の調査　第305次・第311次・次数なし　14
朱雀門地区の調査　第307次　30

Ⅱ 平城京等の調査

興福寺中金堂院の調査　第308次　32
興福寺園地・宝掌院の調査　第303－2次・第303－10次　40
旧大乗院庭園の調査　第310次　42
西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査　第306次・第309次　48
法華寺阿弥陀浄土院の調査　第312次　56
左京三条二坊二坪(長屋王邸)の調査　第303－8次　62
左京三条一坊十坪の調査　第304次　64
左京三条一坊七坪の調査　第303－4次　68
左京三条一坊九坪の調査　第303－5次　72
その他の調査　72

凡　例

1 本書は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1999年度に実施した平城宮跡、平城京内遺跡等の発掘調査の概要報告である。各調査報告の執筆は、各調査の発掘担当者が主におこなった。

2 発掘遺構図に付した座標値は、いずれも国土方眼第Ⅵ座標系による。また、高さは全て海抜高で示す。

3 遺構には一連の番号をつけている。番号の前には、SA（築地・塀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝・濠）、SE（井戸）、SG（庭園）、SF（道路）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）などの記号を付した。

4 平城宮出土軒瓦・土器の編年は以下のようにあらわす。（かっこ内は西暦による略年代）。平城京内等についても、この編年に準拠している。

軒瓦：平城宮・京出土軒瓦編年第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）

土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（725）、Ⅲ（750）、Ⅳ（765）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

5 本文未収録の調査については、巻末の「その他の調査」を参照されたい。

6 年報Ⅰの編集は舘野和己・村上　隆、年報Ⅱは松村恵司、年報Ⅲは内田和伸が担当した。

奈良国立文化財研究所年報 2000－Ⅲ

発行日――2000年9月27日
発行――奈良国立文化財研究所
編集――奈良国立文化財研究所　平城宮跡発掘調査部
〒630-8577　奈良市二条町2-9-1　TEL 0742-34-3931
印刷――岡村印刷工業株式会社

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
2000-III

CONTENTS

I Excavations at the Nara Palace Site

- Excavatons in the East Palace sector (Nos. 301, 302) 4
- Excavations in the Former Imperial Audience Hall Compound sector (Nos. 305, 311, and one unnumbered excavation) 14
- Excavation in the Suzaku Gate sector (No. 307) 30

II Excavations at the Nara Capital Site

- Excavation of the Central Image Hall of Kofukuji Temple (No. 308) 32
- Excavations of Hoshoin, and on the grounds of Kofukuji Temple (Nos. 303-2, 303-10) 40
- Excavation of the garden of the former Daijoin (No. 310) 42
- Excavation of the former precinct of Sairyuji Temple, and in West Second Ward on First Street, (Nos. 306, 309) 48
- Excavation at Amida Jodoin, Hokkeji Temple (No. 312) 56
- Excavation in Block 2, East Second Ward on Third Street (Prince Nagaya's Mansion) (No. 303-8) 62
- Excavation in Block 10, East First Ward on Third Street (No. 304) 64
- Excavation in Block 7, East First Ward on Third Street (No. 303-4) 68
- Excavation in Block 9, East First Ward on Third Street (No. 303-5) 72
- Other Excavations 72

表1 1999年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査一覧

調査次数	調査地区	遺跡	調査期間	面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
301次	6ALF-A, 6ALS-C	東院地区	1999.4.1～8.17	700m²	奈良市法華寺町	石橋茂登	学術調査	4～10
302次	6ALF-B	東院地区	1999.6.8～7.30	235m²	奈良市法華寺町	岩永省三	学術調査	11～13
303-1次	6AAA-D	宮内・佐紀町吉井宅	1999.4.5～4.9	20m²	奈良市佐紀町	西山和宏	住宅建設	72
303-2次	6AED-B	興福寺園地	1999.4.19～7	73m²	奈良市小西町	岩永省三	住宅建設	40
303-3次	6BYS-E	薬師寺東門推定地	1999.7.1	2m²	奈良市西ノ京町	箱崎和久	電線埋設	72
303-4次	6AFJ-O	左京三条一坊七坪	1999.7.12～8.13	432m²	奈良市二条大路南	次山淳	住宅建設	68～71
303-5次	6AFJ-H	左京三条一坊九坪	1999.8.18	18m²	奈良市二条大路南	山崎信二	住宅建設	72
303-6次	6ACN-R	宮北面大垣	1999.9.22～9.24	8m²	奈良市佐紀町	吉川聡	住宅建設	72
303-7次	6AFJ-O, P	左京三条一坊二坪	1999.10.18～10.20	18m²	奈良市二条大路南	玉田芳英	住宅建設	72
303-8次	6AFI-O	左京三条二坊二坪（長屋王邸）	1999.12.8～12.27	140m²	奈良市二条大路南	山下信一郎	建物建設	62～63
303-9次	6BYS-J, K	薬師寺境内	2000.2.7～2.14	10m²	奈良市西ノ京町	清野孝之	史跡整備	72
303-10次	6BFK-Q	興福寺宝掌院	2000.2.14～2.24	29m²	奈良市登大路町	渡邉晃宏	住宅建設	41
303-11次	6AAN-C	宮内・内裏北方	2000.3.9～3.10	10m²	奈良市佐紀町	井上和人	住宅建設	72
303-12次	6ADC-R	宮内・西面北門北東部	2000.3.22～3.24	8m²	奈良市法華寺町	中島義晴	住宅建設	72
304次	6AFJ-F	左京三条一坊十坪	1999.4.27～7.9	900m²	奈良市二条大路南	西山和宏	建物建設	64～67
305次	6ABP-I, 6ABQ-H	第一次大極殿院西面築地回廊	1999.6.28～10.22	1,542m²	奈良市佐紀町	高橋克壽	学術調査	14～23
306次	6BSR-O, P	西隆寺旧境内	1999.7.1～9.30	650m²	奈良市西大寺東町	蓮沼麻衣子	道路建設	48～55
307次	6ABY-K	朱雀門南東部壇地	1999.9.13～9.22	54m²	奈良市佐紀町	山崎信二	学術調査	30
308次	6BFK-K, L	興福寺東面回廊	1999.10.4～2000.2.15	1,480m²	奈良市登大路町	箱崎和久	史跡整備	32～39
309次	6BSR-N, O	西隆寺旧境内	1999.10.20～12.28	406m²	奈良市西大寺東町	千田剛道	道路建設	48～55
310次	6BGN-B, C	大乗院庭園	2000.1.7～3.24	600m²	奈良市高畑町	金田明大	庭園整備	42～47
311次	6ABP-I	第一次大極殿	2000.2.1～3.15	327m²	奈良市佐紀町	中島義晴	学術調査	24～28
次数なし	6ABO-H	第一次大極殿院北面築地回廊	1999.10.12～10.14	16m²	奈良市佐紀町	高瀬要一	学術調査	29
312次	6BFK-F	法華寺阿弥陀浄土院	2000.2.28～4.25	355m²	奈良市法華寺町	清野孝之	住宅建設	56～61

I 平城宮の調査

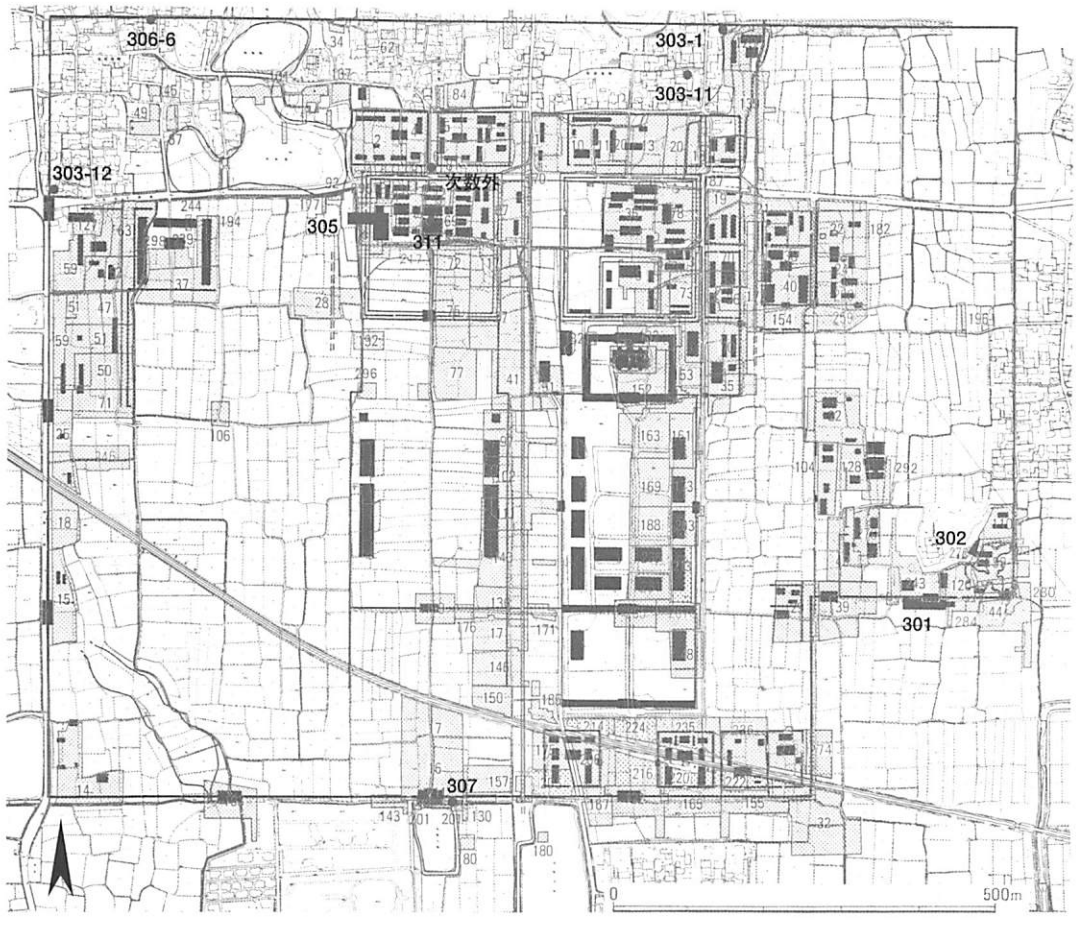


図1　1999年度　平城宮内発掘調査位置図　1：10000

◆東院の調査
――第301次・第302次

1．第301次調査

はじめに

平城宮には東に張り出した部分がある。奈良国立文化財研究所はここを東院地区と称し継続的な発掘調査と整備・復原を行ってきた。文献に見える「東院」「東宮」「東院玉殿」「楊梅宮」といった施設は東院地区の南半分、現在の宇奈多理神社周辺に位置していたと考えられる。

これまでの東院地区における調査では、東南隅に位置する大規模な園池とそれに伴う建物を検出したのをはじめ、東院地区の南西から西側部分でも多数の建物群を確認している。また南面大垣と門の変遷、壛地に建物が密集する状況なども明らかになっている。

第301次調査は東院地区の整備・復元に先立つ調査で、主目的は二条条間路北側溝SD5200とその北側の壛地の様相を解明することである。近隣地におけるおもな調査成果は以下の通りである。第120次調査では二条条間路北側溝には2時期あり、奈良時代後半に素掘りのSD5200Aから自然石の護岸をもつSD5200Bに改修されることが判明した。第120次調査のさらに東を調査した第284次調査では、SD5200AとBがそれぞれ2時期に分かれ、計4時期の変遷をたどることを確認した。また両調査とも壛地における建物群の変遷を明らかにした。第243・245－1次調査（以下、第245－1次調査と略記する）では東院南門SB16000を検出し、2度の建て替えを確認した。南面大垣も掘立柱塀から築地にかわることがわかっている。なおこの東院南門と大垣はすでに復元されている。

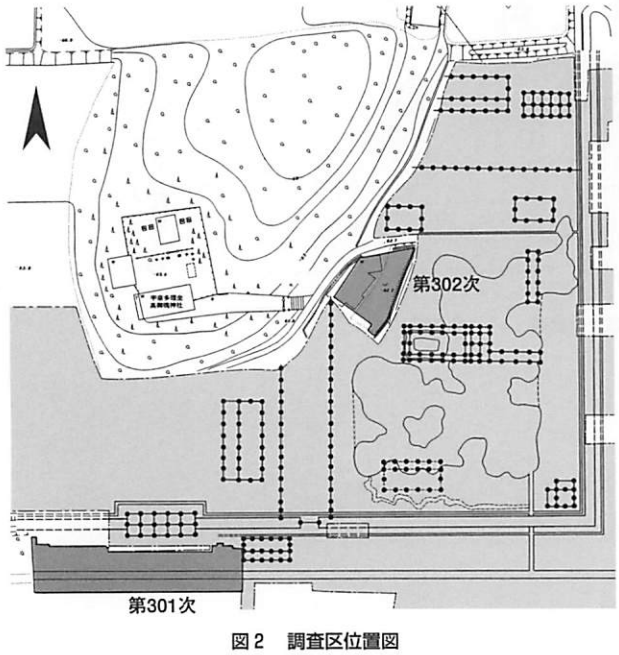


図2　調査区位置図

調査区は東西56m、南北11～15mの長方形の設定とした。面積は約650m²である。調査区の東端は第120次調査と、東北端は第245－1次調査と一部重複している。調査期間は1999年4月1日から8月17日までである。

基本層序と時期区分

調査地の基本層序は上層から整備盛土、旧耕作土、褐色砂礫土（瓦礫を多く含む中世以後の整地土）、褐色砂質土・暗黒褐粘質土（部分的に残る古代の整地土）、褐色粗砂・明黄灰シルト・明灰砂・灰緑粘土・黒色土・灰白粗砂（地山）などがある。また調査区西側の南端では古墳時代の流路とみられる黒褐粘質土の堆積を確認した。調査区は第245－1次調査区の南側部分と同様に後世の削平をうけており、地山面で遺構を検出した部分が多い。

遺構は切り合い関係などから6時期に分けられ、さらに4期はaとbに細分される。

検出した主な遺構

1期の遺構

東院地区の南面を区画する施設が造られる以前の段階。

SD5200Aa　二条条間路北側溝。全体に残りが悪く、南岸が失われているため正確な幅は不明だが、幅1.5m以上、深さは東側で0.2m程度と浅い。2期にも存続する。

SD16040A　SD5200Aaに北側からつながる幅0.7m以上、深さ0.3mの素掘りの南北溝。第245－1次調査で検出

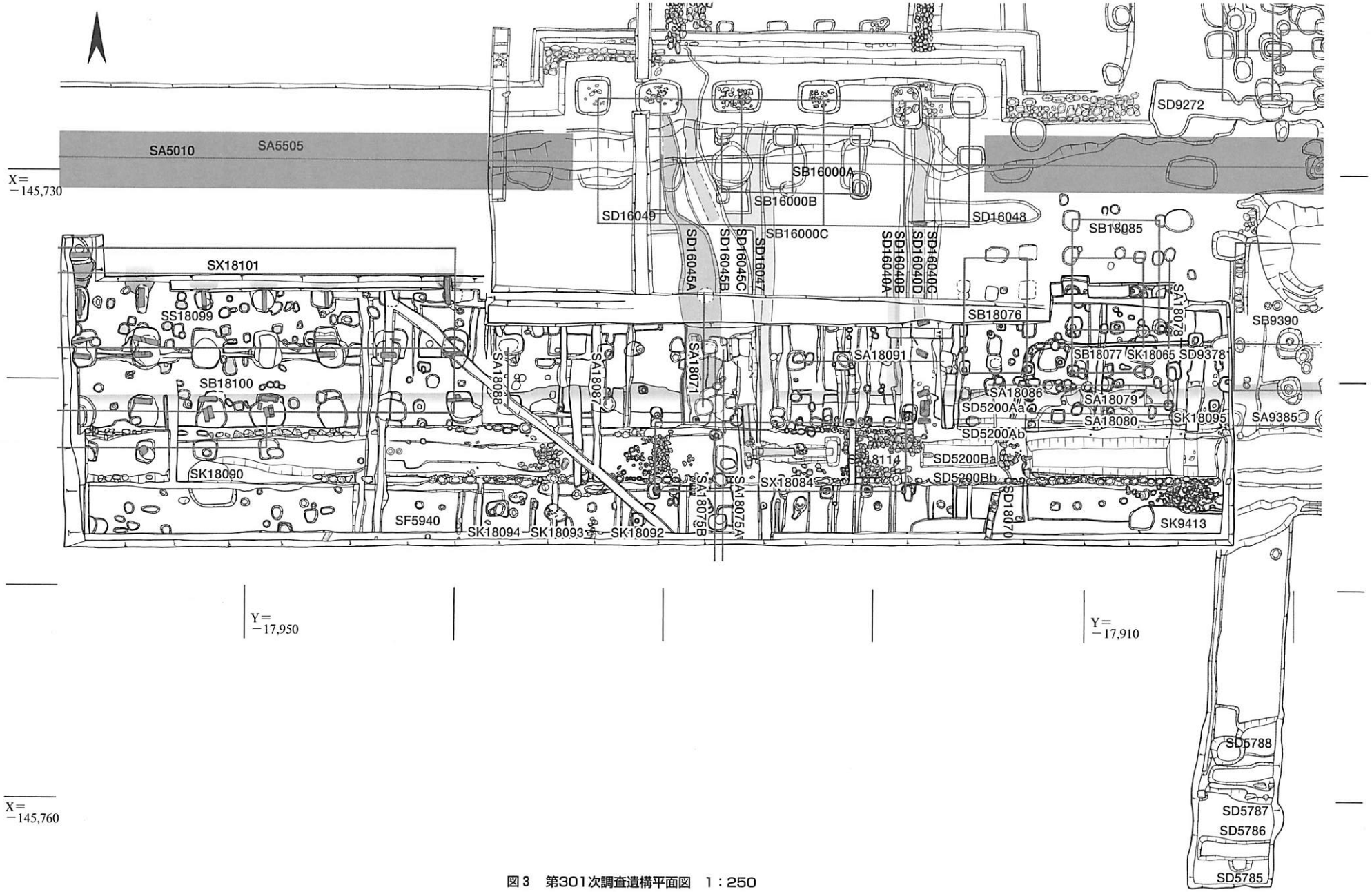


図3　第301次調査遺構平面図　1：250

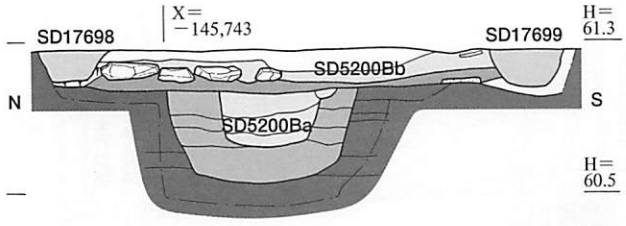


図4　SD5200B 断面図　(Y=−17,921.6)　1：40

しており、その続きを本調査区でも検出した。

SD16047　SD16040Aとおなじく第245−1次調査で検出している幅0.9m以上、深さ0.4mの素掘りの南北溝。なおSD16040・SD16047は東二坊坊間西小路の東西両側溝とほぼ位置が揃い、宮造営に先立ち設けられた道路側溝の可能性もある。また本調査区内ではこれらの溝と重複して2期以降の南北溝や塀を何度も掘り直すため、各期ともこの部分に位置する南北溝の残存状況はよくない。

2期の遺構

東院地区の南面を区画する施設として掘立柱塀SA5010と1間の門SB16000Aが造られる。

SD16040B　SD16040Aの0.5mほど東に掘り直した南北溝。幅0.5m、深さ0.3mが残る。3期まで存続する。

SD16045A　SD16047を3mほど西に付け替えた南北溝。第245-1次調査の所見によると、SD16045Aは東院地区南面の東西塀SA5010の柱穴掘形を切り、抜取穴に切られるので、SA5010と並存したとみなされる。

3期の遺構

SA5010、SB16000Aを築地大垣SA5505と梁間1間、桁行2間の掘立柱の門SB16000Bに建て替える。

SD5200Ab　SD5200Aaを改修して、北岸で1.2mほど南にずらしたもの。幅1.5m以上、深さ30cmほど。調査区東端では溝底で護岸の杭列を検出した。

SD16045B　SD16045Aを掘り直し、側板で護岸した南北溝。新たに設けた塀SA18071を避けて曲流させる。SD16045Bは幅1.1m、深さ0.8mでSD5200Abより深く、他の時期と異なりSF5940上に延びている。したがって、基本的に築地北側からの排水は南へ一直線に排出し、SD5200Abの排水路としての機能はあまり重要ではなかったと考えられる。

SA18071　SD16045Bの6尺西に設けられた南北2間、柱間寸法9尺の掘立柱塀。

SD18070・SD9378　SD18070は瓦組暗渠。丸瓦2つを合わせ目が垂直方向になるように設置し、それを連結して土管状にする。さらに平瓦を被せて蓋にする。ただしSD5200Ab北岸に接続する部分だけは瓦を用いず、板を置いている。SD9378は第120次調査区でも検出している東西方向の素掘りの溝。西端はSD18070に接続し、調査区東端から東へは約20m続く。排水はSD9378からSD18070を通ってSD5200Abに流入するが、SD5200Abより南側のSD18070には南に下がる勾配がついている。

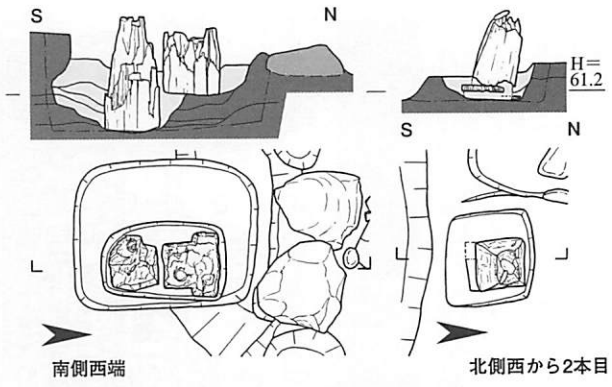


図5　SX18084柱穴 平面図・断面図　1：30

4a期の遺構

SD5200Ba　SD5200Abの2mほど南へ掘り直したもの。調査区東側ではSD5200Bbの下層で幅1m、深さ50cmほどの掘形と幅50cm、深さ30cmほどの木樋抜取溝を確認した（図4）。また木樋の台とみられる凝灰岩や塼をSD5200Baの底面で検出した。SD16045Cとの接続部は木樋を固定するために20〜30cm大の自然石・凝灰岩切石・塼を用いてL字形に堅固に構築する。SD5200Baの木樋抜取溝はここより西には続かず、SD16045Bの側板も西側だけ壊されずに残っている。したがって2本の南北溝による築地北側からの排水はSD5200Baを通して東へ流したと考えられる。一方、調査区西側のSD5200BaはSD5200Bbの下で深さ10〜20cmの痕跡程度を確認したにとどまり、SD16045Cとの接続部の西がどのような状況だったか明確ではない。しかし底面のレベルは西に向かって緩く下がっており、水は西に流れたであろう。これらの点からSD16045C周辺を境に水を東西に振り分ける構造だったと考えられる。

SD16040C　SD16040Bを掘り直したもので、側板で護岸する幅1.1m、深さ40cmほどの南北溝。側板の南端はSD5200Baの肩で止まり、端には瓦片をおいていた。

SD16045C　SD16045Bを改修した南北溝で、幅70cmほどの掘形に幅30cmほどの木樋を据えていたとみられる。SD16045CはSD5200Baに接続して止まり、南には延びない。排水はSD5200Baの木樋を通して東へ流す。

SA18075A　SA18071をSD16045の改修にあわせて建てなおし、南に延長したもの。壍地からSD5200をこえてSF5940へ続いており、南北3間以上である。柱間寸法は9尺等間。柱穴は比較的大型で掘形が一辺1〜1.5mの方形、深さはSF5940上の柱穴で1.1mが残存する。

SB18076　調査区東側で検出した桁行3間×梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行6尺、梁間5尺。SB18077と妻柱筋を揃え、建物同士の間隔は7尺である。

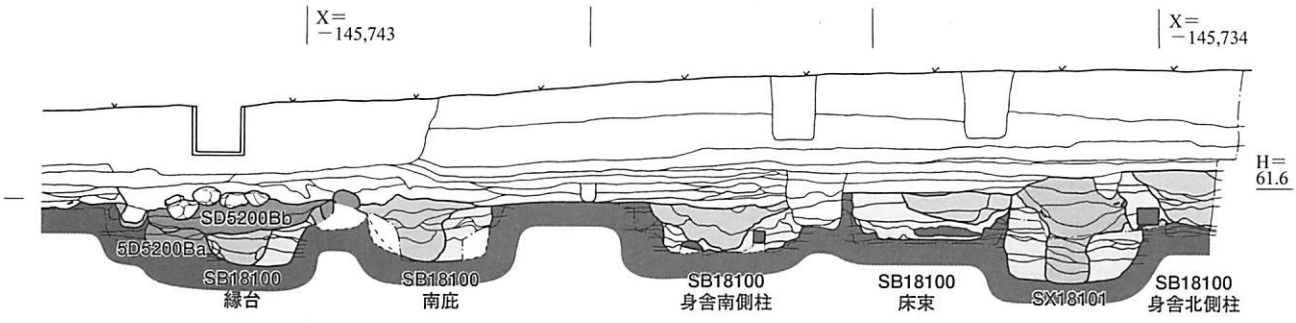


図6　調査区西壁 柱穴断面図　1：80

SB18077　SB18076の東に隣接する桁行3間×梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行6尺、梁間5.5尺。

SA18078　南北4間の掘立柱塀。柱間寸法は6尺等間。SB18077との間隔は5尺である。SA18079に接続する。

SA18079　東西2間の掘立柱塀。柱間寸法は7尺等間。SB18077との間隔は6尺である。

SA9385　第120次調査で検出していた柱間寸法7尺の掘立柱塀。本調査により東西9間であることが確定した。

SK18095　調査区東端で検出した直径0.8mほどの土坑。埋土中に木簡の削り屑を大量に含んでいた。詳細な時期は不明だが、SD5200Ab埋土を掘りこんでいるとみられるので、この時期に想定しておく。

4b期の遺構

SD5200Ba、SD16045C、SB18076、SB18077、SA18078は存続する。4a期との時間差はあまりない。

SD16040D　位置を変えずにSD16040Cを改修した南北溝。幅70cm、深さ35cm以上の掘形に転用材を設置して台とし、木樋を据えていたとみられる。木樋の台は径30cmほどの丸太材を半裁したものが4本と、平面75cm×45cmで厚さ10cmの板状木材1つを検出した。

SA18075B　SA18075Aをわずかに西へずらして建て替えた掘立柱塀。南北4間以上、柱間寸法は7尺。SF5940上へ続く点は同じだが、柱穴はSA18075Aより小さい。

SA18080　東西3間の掘立柱塀で、柱間寸法は6尺。

5期の遺構

SD5200Ba、SD16045CとSD16040Dは存続するが、壍地の様相は大きく変わる。

SB18085　調査区東側で検出した、桁行3間×梁間2間の南北棟掘立柱建物。柱間寸法は桁行6尺、梁間7尺。SA18086と9尺離れる。

SA18086　東西3間の掘立柱塀で、柱間寸法は9尺。

SB9390　第120次調査で検出している東西棟掘立柱建物。桁行5間×梁間2間の身舎に南庇がつく。今回は西端の柱穴2つを部分的に検出したが、第120次調査で報告されている庇の改修を確認するには至らなかった。

SB18100　桁行7間以上×梁間2間の身舎に南庇がつく、大型の東西棟掘立柱建物。身舎は床束をもち、SD5200Ba上には東西4間以上の縁台がつく。柱間寸法は桁行が10尺、身舎梁間8尺、庇の出が10尺である。身舎側柱の各柱穴は掘形が1.8×1.2m、深さ80cmほどで、柱穴内には桁行方向に置かれた2～3本の木材が残っていた。抜き取られたものを合わせると3～4本の木材を礎板や根固めの材として用いていたと考えられる。床束の柱穴は1×1m、深さ50cmほどで、礎板1本のみを梁間方向に埋設する。なお東妻柱の柱穴には他の床束と同じ向きに根固めの材を置くが、掘形が大きく、構造も側柱と同様に複数の木材で根固めするとみられる。この点から調査区西端にある棟通りの柱は床束であって、妻柱ではない。よって建物の東西は7間以上となる。庇の柱穴は掘形が1.8×1.5m、深さが1m程度と大型である。いずれも根固めの材が残存し、2つの柱穴では礎板も残っていた。庇の柱穴は掘形・抜取穴ともSD5200Bbの側石据付に切られている。縁台の柱穴はSD5200Baの底で検出した。掘形は1m四方で、深さ50cmほどが溝底に残存する。東から3つ目の柱穴に礎石転用の礎盤を置く。

SS18099　SB18100の足場穴。0.5mほどの方形のものが多いが、形も配置もあまり整然とはしていない。

SK18090　東西2.2m×南北2.4mの土坑。SD5200Bb側石据付に切られる。埋土にはSB18100のものを投棄したとおもわれる檜皮と瓦片を大量に含む。

SX18101　調査区北西隅とSB18100床束の柱穴壁面で検出した掘立柱列。SB18100の北側柱と床束との中間にある。柱位置もSB18100とそろい、柱間寸法は10尺等間である。柱穴の深さは1.2m以上あってSB18100の柱穴よりも深く、底は地盤の粘土層を掘りぬいて湧水が激しく崩れやすい砂層にまで達している（図6）。この点からSB18100はこの柱列を側柱として造りはじめたものの、崩れやすく不安定なために放棄し、位置をずらしてより浅い柱穴を掘り直したと考えられる。

6期の遺構

第245−1次調査の所見ではSD16040DとSD16045Cは礎石建の門SB16000Cの基壇造成に伴い埋められる。

SD5200Bb　SD5200Baの位置を変えずに大幅に改修したもの。両岸に30～50cm大の自然石を立てて護岸とし、

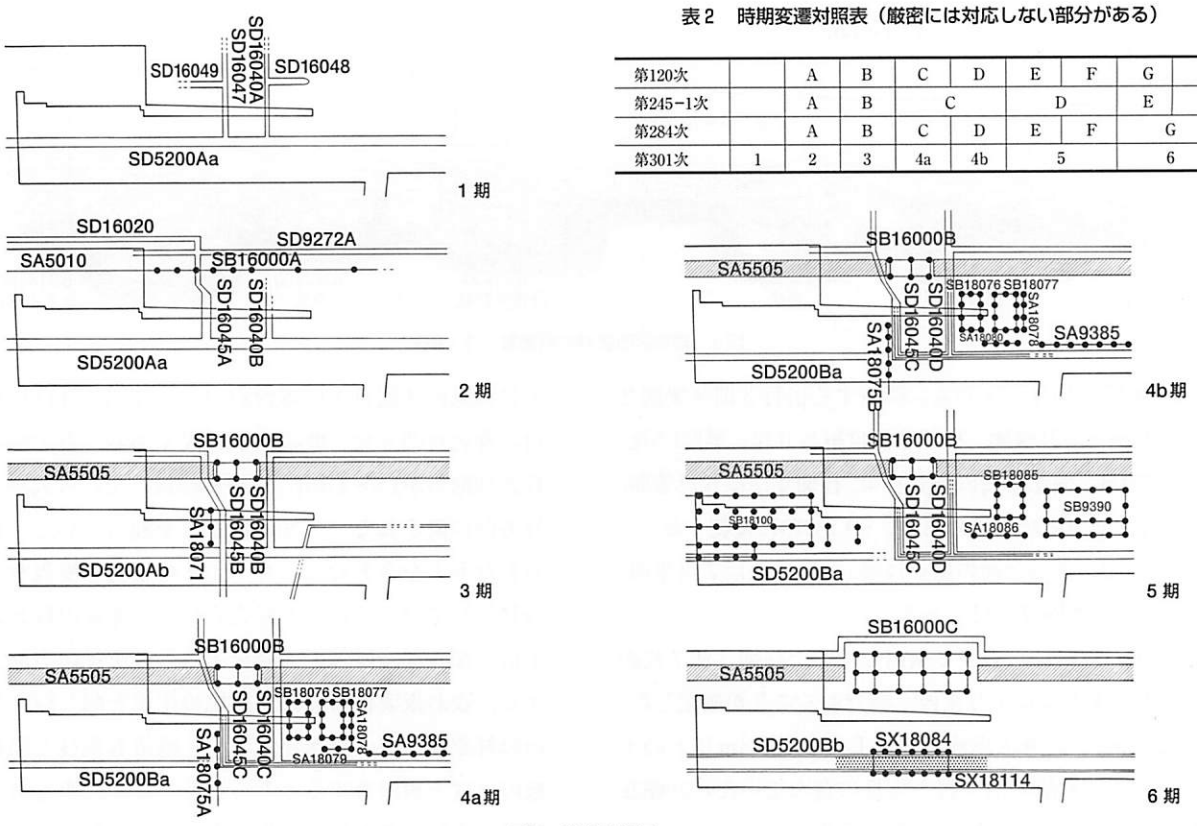


図7　遺構変遷図

表2　時期変遷対照表（厳密には対応しない部分がある）

第120次		A	B	C	D	E	F	G	H
第245−1次		A	B	C		D		E	F
第284次		A	B	C	D	E	F	G	
第301次	1	2	3	4a	4b	5		6	

幅は側石の心心で8尺に拡張する。SB16000Cの前面部分に橋SX18084を架け、溝底に敷石SX18114を施す。敷石部分では溝の深さが残存する側石上面から10cm程度しかないため、SD5200Bbの排水路としての機能は重視されていなかったと考えられる。

SX18114　SB16000C前面にあたるSD5200Bbの底面に施された敷石。20〜30cm大の自然石を用いて、上面が平坦に揃うように敷き並べる。SB16000Cの中軸線を中心にして東西24mの範囲に敷石が遺存していた。敷石上面は東へ緩く下がり、東端が西端より15cmほど低い。

SX18084　SD5200Bbに架けられた桁行6間×梁間1間の橋。柱間寸法は桁行の両端間が6尺でその他が7尺等間、梁間は11尺である。橋の東西端をSB16000Cの中央3間と揃える。橋脚はすべて掘立柱で、一辺20cmの方柱を用いる（図5）。深さは検出面から10〜20cm程度と浅いが、柱根の下には礎盤として小石や薄板を置く。四隅の親柱は南東隅以外の3本が遺存していた。親柱は橋脚が当る面を平らにした多角形で、検出面から40cmほどの深さまで柱が達している。またSD5200Bbの側石は橋の柱筋にあたる部分が他より低く、ここに桁が納まるとすれば橋はさほど高くなかったと考えられる。

その他の遺構

SF5940上にある瓦を投棄した土坑SK9413、古墳時代の土坑、時期不詳の柱穴、中世以降とみられるSD5200Bb側石の抜取溝SD17698・SD17699などがある。

遺構変遷

1期　東院地区の南面を区画する施設がまだない段階。二条条間路北側溝は素掘りのSD5200Aaで、北からSD16047とSD16040Aが流入する。建物は認められない。平城宮造営当初にあたる。

2期　SD5200Aaは存続する。東院地区の南面を区画する掘立柱塀SA5010と1間の門SB16000Aが建つ。それに伴い南北溝もSD16045AとSD16040Bに掘り直す。壍地にはまだ建物がない。奈良時代前半。

3期　二条条間路北側溝の位置を南に1.2mほどずらし、SD5200Abとする。南面の区画施設は築地大垣SA5505と2間の掘立柱門SB16000Bに造り替える。門の西側前面には南北塀SA18071を設ける。それに伴いSD16045AもSD16045Bに改修し、塀を避けて東に曲流させる。側板の護岸をもつSD16045BはSD5200Abより深く、SF5940上に続いて排水を南に流す。斜行する瓦組みの暗渠SD18070も造られる。奈良時代前半。

4a期　二条条間路北側溝はさらに2mほど南へ掘り直してSD5200Baとし、少なくとも門前面部分には木樋を埋設する。それに伴ってSD16040BとSD16045Bも、側板をもつSD16040Cと木樋を用いるSD16045Cとにかえる。門前面の通路部分には木樋を埋設して通行を妨げないようにしたのであろう。SA5505とSB16000Bは存続するが、壍地のSA18071はSF5940上に延びるSA18075に造り替える。また壍地には妻柱筋をそろえるSB18076とSB18077、

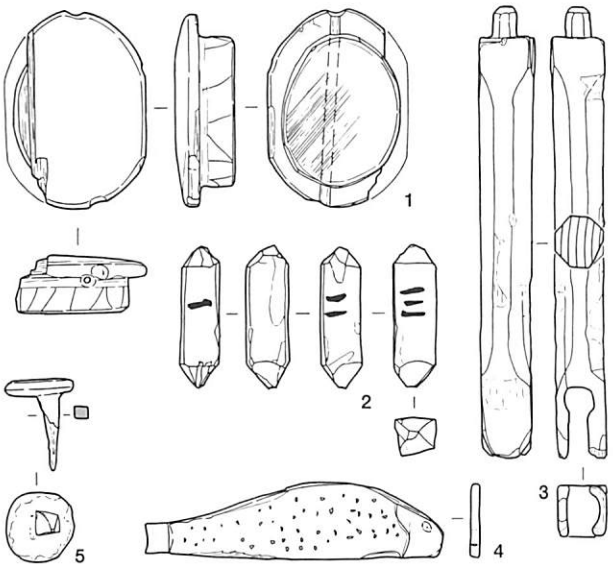


図８　第301次調査出土木製品・金属品実測図
（１～４は１：３、５は１：１）

その２棟を囲むSA18078とSA18079が建つ。奈良時代後半、還都後とする。

４ｂ期　SD5200Ba、SA5505、SB16000Bは存続する。壙地のSA18075AはSA18075Bに建て直すが、路面まで塀がのびる状況は同様である。SD18040Cは木材を溝底に並べて木樋を使用したとみられるSD16040Dに改修する。壙地ではSA18079をSA18080にする。

５期　SD5200Ba、SA5505、SB16000Bは存続する。壙地の建物群は建て替えを行い、東側にはSB18085とSA18086、さらにSA18086と建物南端をそろえたSB9390を建てる。一方で西側には大型の掘立柱建物SB18100を建てる。奈良時代後半と考えられる。

６期　５期とはまったく異なる様相に一新する。門を礎石建のSB16000Cに建て替え、その基壇造成時に南北溝SD16045CとSD16040Dを埋める。壙地の建物はすべて撤去する。二条条間路北側溝は位置を踏襲しつつ幅を広げ、深さも浅いSD5200Bbに改修する。この溝は自然石を立て並べて護岸し、SB16000Cの前面には自然石を用いた敷石SX18114と、桁行６間の橋SX18084を設ける。奈良時代末、楊梅宮の時期と考えられる。

出土遺物

木製品・金属製品　主なものの実測図を上に掲げる（図８）。１は平面卵型の木栓。長軸方向に径５㎜の孔が貫通する。ヒノキ。SK18090出土。２は賽子または算木。３面に「一」「二」「三」を墨書し、残りの１面には何も記さない。長さ56㎜。ヒノキ。SD5200Bb出土。３は不明部材。一端にほぞを作り出し、他端を鰐口状の切り込みに加工する。用途などは不明。ヒノキ。SD5200Bb出土。４は魚形木製品。魚の側面観をかたどった板で、目・鱗などを両面に、口と鼻孔を小口面に線刻で表現する。用途不明。ヒノキ。SD5200Ab出土。５は全長12.5㎜の青銅製鋲。径９㎜の円形の頭部に、根元で一辺2.5㎜の断面方形の脚部がつく。0.92ｇ。褐色砂礫土出土。

表３　第301次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦 型式	種	点数	型式	種	点数	軒平瓦 型式	種	点数
6131	A	1	6655	A	2	6721	C	4
6133	D	2	6663	A	6		D	2
	S	1		B	2		F	1
6135	?	1		?	2		G	13
6225	L	1	6664	A	1		H	1
6282	B	6		C	4		?	8
	G	4		D	19	6726	E	1
	Ha	1		F	10	6732	C	2
	Ia	1		H	3		?	1
	?	3		K	3	6760	B	2
6284	E	3		?	3	6763	A	1
6291	C	1	6666	A	1	型式不明		31
6301	?	1	6667	A	2			
6308	A	3	6681	E	1			
	B	6		?	1			
	D	1	6682	A	2			
	?	1	6685	A	2			
6311	A	11		B	3			
	Ba	7		C	2			
	?	2	6689	A	3			
6313	Aa	4	6691	A	1			
	H	3	6695	A	1			
型式不明		56	6704	A	3			
鎌倉		1	6721	A	1			

軒丸瓦計	121	軒平瓦計	145

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他			
重量	729.9kg	1,919.9kg	104.9kg	50.2kg	文様塼	1	刻印丸瓦	1
点数	6,864	30,895	113	56	面戸瓦	4	刻印平「修」	3
					隅切平	5	刻印平「理」	1
					刻印丸「修」	1	刻印平瓦	2

土器　土器類は整理箱65箱ほどが出土した。土師器、須恵器のほかに、埴輪、緑釉陶器、灰釉陶器、中世の土器類などがみられる。SD5200Bb埋土からは灰釉陶器、緑釉陶器などの破片が出土し、平安時代初期までSD5200Bbが存続したものと考えられる。（石橋茂登）

瓦塼類　本調査区出土の軒瓦の様相を平城宮軒瓦編年の時期別に見よう。なお時期区分は瓦の製作年代であり、瓦を出土した遺構の上限年代しか示さない。

Ⅰ期（和銅元年～養老５年頃）6274Ａ、6664Ｃ・Ｋ・Ｈ、6655Ａなどがあるが量は少ない。南面・西面大垣には藤原宮式を葺いたことが判明しているが、当地では6274Ａ１点のみで、還都当初には区画施設が無いという所見と合致する。6664ＫはSD5200Aaから、6664Ｃ・ＨはSD16045Ａからまとまって出土した。

Ⅱ期前半（養老５年頃～天平初年）出土量が激増する。ほとんどが6311Ａ・Ｂ－6664Ｄ・Ｆ、6313Ａ・Ｈ－6685Ａ・Ｂ・Ｃのセットであり、6667Ａ・6689Ａが少量加わる。6311－6664、6313－6685はSK9413・SK18090、条間路北側溝、SD16040Ｄ上層、SD16045Ａに多いのに加えて、壙地部分から満遍無く出土しており、築地大垣SA5505と門SB16000Ｂ所用の瓦の可能性が強い。

Ⅱ期後半（天平初年～天平17年）6308Ａ・Ｂ－6663Ａ・Ｂがまとまり、6135、6225Ｌ、6666Ａ、6681Ｂ・Ｅ、6682Ａ、6291Ｃが少量ある。6308－6663はSK9413・SK18090とSD16040Ｄ上層、SD16045Ｃ・Ｄに集中する。

第三〇一次調査出土木簡

○SD五二〇〇Aa
①・□陸国那□［常カ］
・□小牧　(48)・16・2　081

②伊与国湯□□□□□□□［味酒里カ］　201・27・6　032

○SD五二〇〇Ab
③「讃岐国」三木郡山下里□赤万［次カ］　□部□　二人俵□　(185)・30・4　033

○SD五二〇〇Bb
④□□［国カ］　遠敷郡車持□［郷カ］　(98)・(12)・6　039

⑤私門常食給受申　当月十二日　122・29・4　011

○SD一六〇四〇B
○SX一八〇八四柱穴
⑥天平宝字［二年カ］□□六月廿一日□　(82)・20・3　019

○SB一八一〇〇柱穴
⑦・○牒　大蔵省送［長カ］□□□□□□
・○　□　□　□　□　(321)・35・3　019

⑧・浅緑□一丈　右随□［日カ］
□□　十二月廿□□
・「□□」（削り残り）　(193)・(35)・4　081

⑨［丹　国　郡カ］
□□□□□□　191・26・5　033

⑩・美作国英多郡英多郷「白米五斗」
・「□□」（削り残り）　173・28・5　032

Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）Ⅱ期前半とほぼ同じく出土量が多い。ほとんどが6282－6721のセットで、SK9413・SK18090、条間路北側溝、SD16040D上層、SD16045C・Dに多いのに加えて、SB18100付近に集中する。Ⅱ期の6311－6664を除けばSB18100付近に軒瓦は希薄であるので、6282－6721がSB18100所用の可能性が強い。なお6282－6721の製作年代はⅣ期前半にも及ぶ。

Ⅳ期（天平宝字元年～神護景雲３年）天平宝字年間の6732A・Cもあるが少なく、6133D－6704A、6732A・C、6760B、6761A、6763Aは神護景雲年間に下る。門SB16000C所用と判明している6133D－6704Aと、刻印「修」「理」をもつ平瓦は、門の南側に限られる。6760B、6761A、6763Aは調査区西端部に限られる。

Ⅴ期（宝亀元年～延暦３年）6726Eが１点ある。

なお、条間路路面から北側溝底に及ぶSK18090には、Ⅱ期の6311B・6308D・6664Dなどが多いが、6721A・Hを含むからⅡ期末を上限とする。条間路路面上のSK9413にも、Ⅱ期の6311B、6664D・F、6308Bが多いが、6732CがありⅣ期以降である。（岩永省三）

木簡　SD5200の木簡とSK18095の削り屑を中心に、合計295点が出土した。そのうち主なものの釈文を上に掲げる。③は国名が郡名以下と異筆で、きわめて大きな文字で書かれる。また下端は二次的に削り尖らせてある。④は若狭国。⑤「私門」は初出の門号である可能性が強い。⑧の右行三文字目は人偏に「堅」のように書くが、糸偏と判断すべきであろう。（舘野和己）

まとめ

今回の調査でもSD5200が大きく改修されている状況を確認した。その改修は東院地区全体の変遷とも密接な関係があると考えられる。SD5200とそれに接続する南北溝が何度も付け替えられるのは、東院地区の排水系統全体の変化と対応するのであろう。

壇地から路面上まで続くSA18075はその性格、恒久的なものか一時的なものかなど不明な点も多いが、ある時期二条条間路が塞がれていた可能性が高いといえる。これは東院南門から西における二条条間路の特殊な性格をしめすものか。東院地区の東南隅を調査した第280次調査では、東二坊坊間路の拡幅後に道を閉鎖する形で掘立柱東西塀が設けられていたことが判明している。東院内での重要な行事などの際に、東院地区周辺の道路が一時通行を規制されていた可能性も考えられるだろう。

奈良時代後半において東院南門SB16000Bの南西に隣接する大型建物SB18100の存在が明らかとなった。SB18100の性格を考える上での参考例として、春日大社着到殿があげられる。着到殿は二の鳥居から南門にいたる参道北側にあり、南に広い庇がつく柱配置もSB18100と類似する。現存の建物は応永二十年（1413）の建築だが、創建は延喜十六年（916）と伝えられ、さらに以前から着到殿にあたる建物があったとする説もある。着到殿は春日大社に到着した勅使一行がまずこの建物に入って休息するための建物である。東院南門に隣接するSB18100も、同様の建物であった可能性もあろうか。

奈良時代末に礎石建の門SB16000Cに建て替えるのにあわせてSD5200Bbに石の護岸を施し、門前面に敷石と大型の橋を設けることが判明した。これらは楊梅宮のある東院地区の前面にふさわしい造りだといえる。また楊梅宮造営に際して全体を一新する状況が鮮明になった。

以上のように今回の調査では壇地と二条条間路北側溝を中心として多くの知見を得た。しかし解明すべき課題も多い。今後の周辺地域の調査が期待される。（石橋）

2．第302次調査

はじめに

東院庭園復原にともなう調査で、調査地は宇奈多理神社の東に位置し、第99・110・276次調査区に囲まれる。調査地は長らく民有地であったため、1998年から公開した庭園整備地の外となっていたが、1998年末にようやく国有地となり、整備地に組み込む必要が生じた。庭園に関わる遺構を解明し、調査終了後におこなう整備の基礎資料を得ることを目的とした。

基本層序

基本層序は上から耕土、床土、上層バラス敷SX17560B、間層、下層バラス敷SX17560A、2枚の整地土、地山である。SX17560A・Bは第276次調査で検出した続きで、その上面で遺構を検出した。下層検出面の標高は北端と西南端が61.95m、東南端が61.70mである。

検出した主な遺構

今回の調査地は、池の西岸、復原した東院中央建物SB8480の西北側である。検出した主要遺構は、蛇行溝1条、玉石敷小池2基、直行暗渠1条、掘立柱塀4条、柱穴2基などである。直行暗渠のみSX17560B上面、他はSX17560A上面で検出した。

SD18120　調査区の北東端から南南西に流れる蛇行溝で、途中、玉石敷小池SX18130・18125を経由する。池も含めて27m分を検出した。蛇のように細かく蛇行し、90°近い大きな屈曲点が7個所ある。調査区南半部では底石が良好な状態で残るが側石は抜かれている。底石は径20～40cmの平たい石を3～4列、幅0.7～0.8mに、両側が高く中央が低くなるように敷いたものである。側石を含めた幅は1.1～1.5m、深さ10～15cmほどに復原できる。調査区北半部では、底石すらほとんど抜かれ2個しか残らぬが、抜き取り穴は良く残る。側石の状況は、第44・120次調査で検出した池南岸の蛇行溝SD5850を参考にすれば、小振りの石を縦長に用いて1段ないし階段状に2段立てたと復原できる。調査区南端近くで急になるが、それ以北の平均勾配は1.3%である。調査区南端では野井戸や土坑で破壊され、まったく残らない。

SX18125　南北3m、東西1.5mの小判形の玉石敷小池。幅20～30cmの額縁状に巡る範囲に側石を据え付け、その内部に一段低く径10cm程の玉石を敷き詰めて底とする。側石はすべて抜かれるが、据え付け掘形底に5cm大の石を根石として詰めている。蛇行溝SD18120は北側から流れ込み、東辺南端から流れ出る。SD18120は底石の面を揃えて平らに仕上げるが、SX18125の底は玉石が凹凸を形成し、その間を水が流れ抜ける間に葉やゴミなどを引っかけて除去する施設であろう。

SX18130　SX18125の東北にある玉石敷小池。径20～30cmほどの底石抜き取り穴が直径約3mの円形の範囲に密集する。胃袋を横から見たようにSD18120が北から流れ込み西南隅から流れ出す。底石抜き取り穴に平たい石を据えても、底面がSX18125より1段高くなる。中央部に小穴がやや疎であるから、逆C字形に強く蛇行する溝の可能性もあるが、円形小池と考えておく。新羅の慶州雁鴨池や酒船石遺跡では導水路の途中にレベル差がある石製槽や小池を幾つか設け、水を段々と流し落とす工夫をしている。それに類するものであろう。

SD8472　北から南南東に流れる直行暗渠。SD18120より新しい。幅0.6mで、13.5m分を検出した。幅50cm、深さ25cmの掘形に径5～10cmの礫を詰め込む。掘形は北ほど浅くなり、北端は礫の詰まった新しい土坑に切られ消滅している。南は第99・276次調査でも検出し、後期東院中央建物SB8480の南西隅の縁束掘形を切って池に注ぐ。

SA18122・18123・9061・18124　調査区西端で検出し、いずれも北で東に振れる斜行掘立柱塀。互いに切り合いがあり、SA18122→18123→9061の順で新しくなる。SA18122は45°振れる。6間分検出した。一辺約1mの四角い柱穴で、4間分検出した。柱間2.4m（8尺）等間。SA18123は44°振れる。長径1.5m、短径1mほどの小判形の柱穴で、柱間3m（10尺）等間。SA9061は第110次調査で12間分検出した塀の南延長部で41°振れる。4間分検出した。長辺1.5mほどの四角い柱穴で、柱間2.9m（10尺弱）等間。柱を南東方向に抜き取るのが特徴で、抜き取り穴に凝灰岩切石が入るものがある。SA18124は45°40′振れる。3間分検出した。径40cmほどの柱穴で、柱間は南から2.5m、3.8m、2.5m。SA18122の柱掘形と重複しほぼ並行する。

SA18122・18123・9061は調査区外に伸びると推定できる。それぞれを等間で延長し過去の調査で検出した遺構

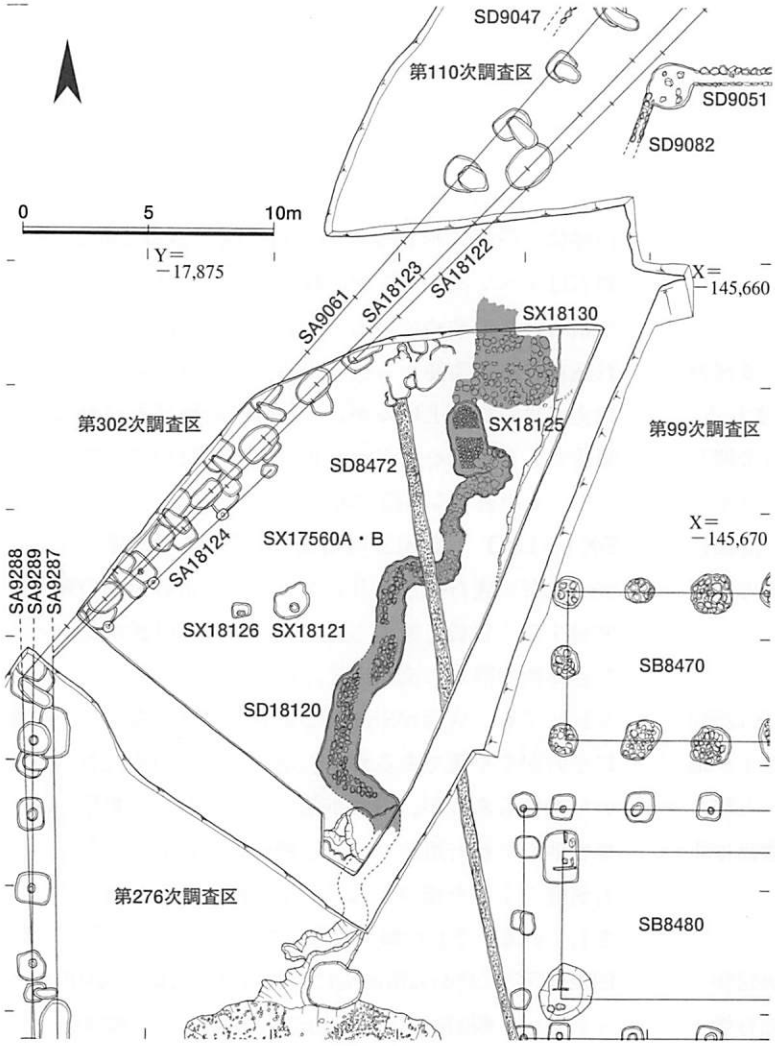


図9　第302次調査遺構平面図　1：300

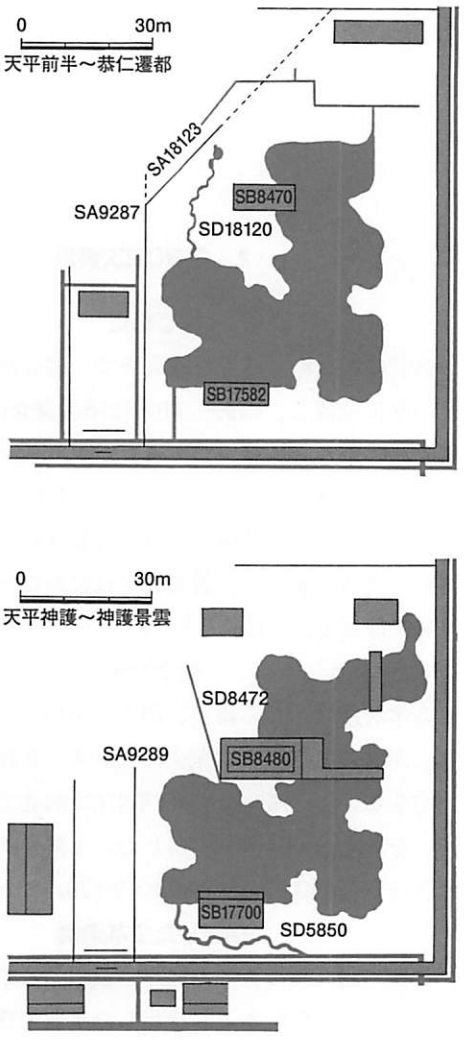


図10　遺構変遷図

との関係を調べた。南方では、SA18122・18123は第120・276次調査区のSA9287に取り付くが、第110次調査区では柱穴1ないし2基を検出したに留まり、他は検出できていない可能性がある。SA9061は南でSA9288に、北は第110次調査区内で東西塀SA9060に取り付く。

SX17560A　前述の塀の東側の空閑地に施した細かいバラス敷。儀式用の広場として用いたと考える。

SX18121　径1.5m、深さ1mの不整形な柱穴を礫敷広場で検出。単独柱で深いことから旗竿柱穴と推定する。径30cmの柱抜き取り痕跡がある。

出土遺物

瓦塼　奈良時代の遺構に伴うものは少ない。SD18120抜き取りから6132AとⅣ期以降の軒平瓦、SX17560Bから6132A・6663が出土したにとどまる。

まとめ

遺構の時期　蛇行溝SD18120は開削の時期を直接示す手がかりがない。廃絶時期については、埋土から出土した少量の瓦の中に軒平瓦の顎部があり、天平宝字年間以降に見られる縄叩き手法を用いているから、廃絶は宝字年間以後である。その一方、調査区西端の斜行塀3条が、蛇行溝と密接な関係を持つものと仮定すれば、斜方向塀の存続年代が蛇行溝の時期の参考となるだろう。

斜方向塀は、いずれも西端が、東院庭園の西を区画する掘立柱南北塀に取り付く。第120次調査の所見では、この南北塀には3時期ある。SA18122・18123が取り付くSA9287は天平前半〜恭仁遷都まで（729〜740年）、SA9061が取り付くSA9288は平城還都〜天平宝字年間（745〜765年）に存続した。したがって、蛇行溝も天平前半〜天平宝字年間まで、比較的長い間、池への給水路として機能したと考える。下限は少し下るかもしれない。

直行暗渠SD8472は蛇行溝の撤去後、天平神護年間以後（765〜）と考える。

なお、現在復原している庭園は奈良時代後半でも末に近い状況であるから、本調査区の蛇行溝や斜行塀がすでに無くなった後の、直行暗渠の時期の姿と言えよう。

蛇行溝の行方　蛇行溝SD18120はどこから来てどこへ流れるのか。当調査区北側の第110次調査区南端部では、西から東へ流れる池への導水路を数条検出しているが、その西端部は枝分かれして南西方向へも流れ出ることが判明している。SD9047とSD9082であり、その延長部が当調

査区方向に向かっていることから、これらの導水路がSD18120とつながる可能性が高い。ただし当調査区と第110次調査区との間には未調査地があり、つながりを確定するのが今後の課題である。

一方、本調査地の南側の第99・276次調査区では、蛇行溝の延長部が近代の野井戸や水路でひどく破壊され検出できていないが、後期東院中央建物SB8480の西側で池に注ぎ込むことは間違いない。

蛇行溝発見の意義　①、今回検出したような細かく蛇行する溝の類例は、同じ東院庭園の池の南西隅からの排水路SD5850に次いで2例目であるが、きわめて珍しいものである。庭園の池に付属する蛇行した溝は、奈良県・古宮遺跡（小墾田宮推定地、7世紀初頭～中頃）、奈良県・島庄遺跡（7世紀後半）、京都市・大沢池（嵯峨院・大覚寺、9世紀前半～14世紀前半）、京都府・鳥羽離宮跡（11世紀末）、岩手県・毛越寺跡（12世紀）、岩手県・観自在王院跡（12世紀）などにもあるが、いずれも、もっとゆるやかなカーヴを描くもので、趣が異なる。

蛇行の有無に関わらず、庭園に設けた流れを分類すると（牛川喜幸氏による）、幅が一定の人工的な「流杯溝型」と、幅が不定で自然の流れを模した「遣水型」がある。現状では、「流杯溝型」は7世紀に多く東院庭園の蛇行溝が最後である。東院庭園、とくに後期庭園は日本庭園の原型と評価されているが、蛇行溝はそこに残った古い要素と言えよう。

「遣水型」のうち景石を据える本格的なものは平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園・奈良時代後半）が古く、8世紀末の京都市・神泉苑跡や9世紀前半の京都市・大沢池（嵯峨院）などから一般化する。8世紀後半が「流杯溝型」から「遣水型」への交替期であるが、宮跡庭園の例は「遣水型」とは言いながら幅が狭い流れ状ではなく、幅がやや広い池状を呈するから、のちの遣水とは趣が異なる。いかにして典型的な遣水が成立するのかが、庭園史研究上の重要な課題であるが、8世紀後半代の事例の増加を期待したい。

②、今回検出した蛇行溝は、園池への給水路である。従来、奈良時代前半の給水路としては、池の北側を西から東へ流れる石組溝が南へ折れて池の東北隅に北から流れ込むことが知られていた。奈良時代後半には、池の東北拡張部の北に設けた給水池に西方の石組溝から給水したことが知られていた。しかし、給水が池の東北隅からのものだけとすると難点があった。つまり、逆L字形の池の西半分には新鮮な水が流れ込まず淀んでしまうので、維持管理上、何かと不都合が起こったはずである。今回、そこへの給水路を発見したことは、まことに理にかなっている。しかも、蛇行溝が無くなった後も直行暗渠が機能を果たしているから、奈良時代を通じて池の西半部への給水は確保されていたのである。今回の発見は、東院池の給排水体系を復原する上で、ひいては、庭園の池の給排水の在り方を含んだ古代造園技術を考える上で、見逃せない成果である。

なお、奈良時代を通じて、園池への給水には、池の北側を西から東に流れる給水路を用いたのだが、では、それら給水路のさらに上手の水源はどこだったのだろうか。一つの可能性として、平城宮東張り出し部の真北にある水上池（P.71平城専欄参照）からと考えたい。

③、庭園の池に付属する流れは、単に給水や排水に用いるだけでなく、「曲水宴」などの宴会に用いた場合があった。東院庭園の蛇行溝は、1967年の第44次調査で池の南岸のSD5850が発見されて以来、曲水として著名であったが、池の北側にもあったことが判明した。今回発見のSD18120は、両側に5～10m幅の空間があり、ゆったりした配置である。いっぽうSD5850は、南面大垣と東西棟建物の間の狭い場所にあり、溝の両側には2～3m幅の空間しかない。この違いは、曲水宴の際に、SD18120は溝の側に人が出て集うことを主とし、SD5850は北側の建物から眺めることを主とする、といった用い方の差かも知れない。SD18120の場合は、どちらかと言うと西側が広々としているが、中国の古典にのっとって（『後漢書』礼儀志上に、三月上巳、「官民皆な東流の水の上（ほとり）に契し、洗濯祓除と曰う」とある）、東の方の川に向かって西から行事を行なったのかも知れない。今調査区の西端の斜方向塀は、その際の目隠しとして必要だったのだろう。

奈良時代の貴族・皇族にとって、庭園は、彼らが憧れた小宇宙としての神仙世界を表現したものであって、庭園で行う宴会は、酒を飲み、琴を弾きつつ詩を詠んで、中国貴族にならいつつ神仙の境地に浸るという意味があったという。今回の曲水の発見は、東院庭園におけるそうした行事の姿をさらに彷彿とさせるものとして、意義が大きい。

（岩永省三）

◆第一次大極殿院地区の調査
―第305次・第311次・次数なし

1．第305次発掘調査

はじめに

和銅３（710）年に遷都した平城宮当初の大極殿を中心に回廊によって画された第一次大極殿院地区の調査は、1970年以来数次にわたっておこなってきた。それらは主に大極殿院の東半に対して実施してきたものであったが、当地区の復元整備計画との兼ね合いもあって、西半に対しても一部調査を実施して、正確なデータを得る必要が生じてきた。そこで、昨年度は第295次調査を大極殿西端から西面回廊にかけての地区で実施し、さらに大極殿院南西隅の地区でも第296次調査を行った。これらにより大極殿基壇の地覆抜取がはじめて認識されるなど、大極殿復元に直接関わる重要なデータが得られ、また回廊部分に対しても相応の成果を上げることができた。ところが、大極殿院の地盤や回廊の振れの問題などが提起され、さらに大極殿前面の塼積壇についてのデータが整備には欠くことができないということもあって、今次の調査が計画されたのであった。

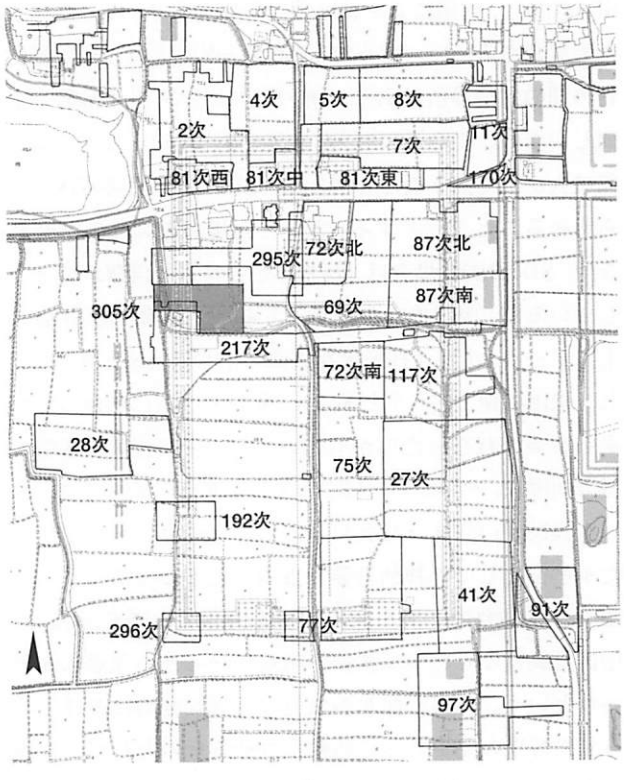


図11　調査区位置図　1：5000

調査面積は約1,542m²、1999年６月28日より重機による表土剥ぎを開始し、７月13日より手掘り。検出遺構の保存処理、および型取り作業を残して10月22日に発掘調査を終了した。

なお、以下の記述に際して、各期の遺構の変遷を『平城報告』ＸＩの時期区分に準拠して大別３期にわけて説明する。すなわち、Ⅰ期は大極殿が当地に置かれた時期【和銅３（710）年】で、その後半に恭仁京遷都【天平12（740）年】から平城京還都【天平17（745）年】までの時期を含んでいる。Ⅱ期は第一次大極殿院の南面・北面回廊を内側に寄せ、一方、塼積壇を南方に拡幅し、乱石積の擁壁を設け、壇の上に掘立柱建物群を林立させた時期【天平勝宝５（753）年～】、そしてⅢ期は平城上皇が居所を構える時期【大同４（809）年～】にあてる。

調査区の設定と現況

第305次調査は、第295次調査区と第217次調査区に挟まれた範囲で、大極殿前方を東西に走る塼積擁壁が南西に折れ始めるところを東端とし、そこから大極殿院西面回廊にかけて逆Ｌ字形に調査区を設定した（図11）。

当地は回廊位置のすぐ西側が大きく下がっており、そこからさらに西にかけてなだらかに下がっている。この急な落ちに沿って現代まで機能していた石組みの水路が残っていた。この水路に関しては調査に先立ち完全に撤去した。一方、調査区の南部も、かつて水路が東西に走っていたが、今は盛土表現したⅡ期の壇の中にボックスカルバート（暗渠）を納めている。さらに、調査区南辺には暗渠に平行する高電圧線が走っており、安全を考えて掘り下げを断念したところがある。

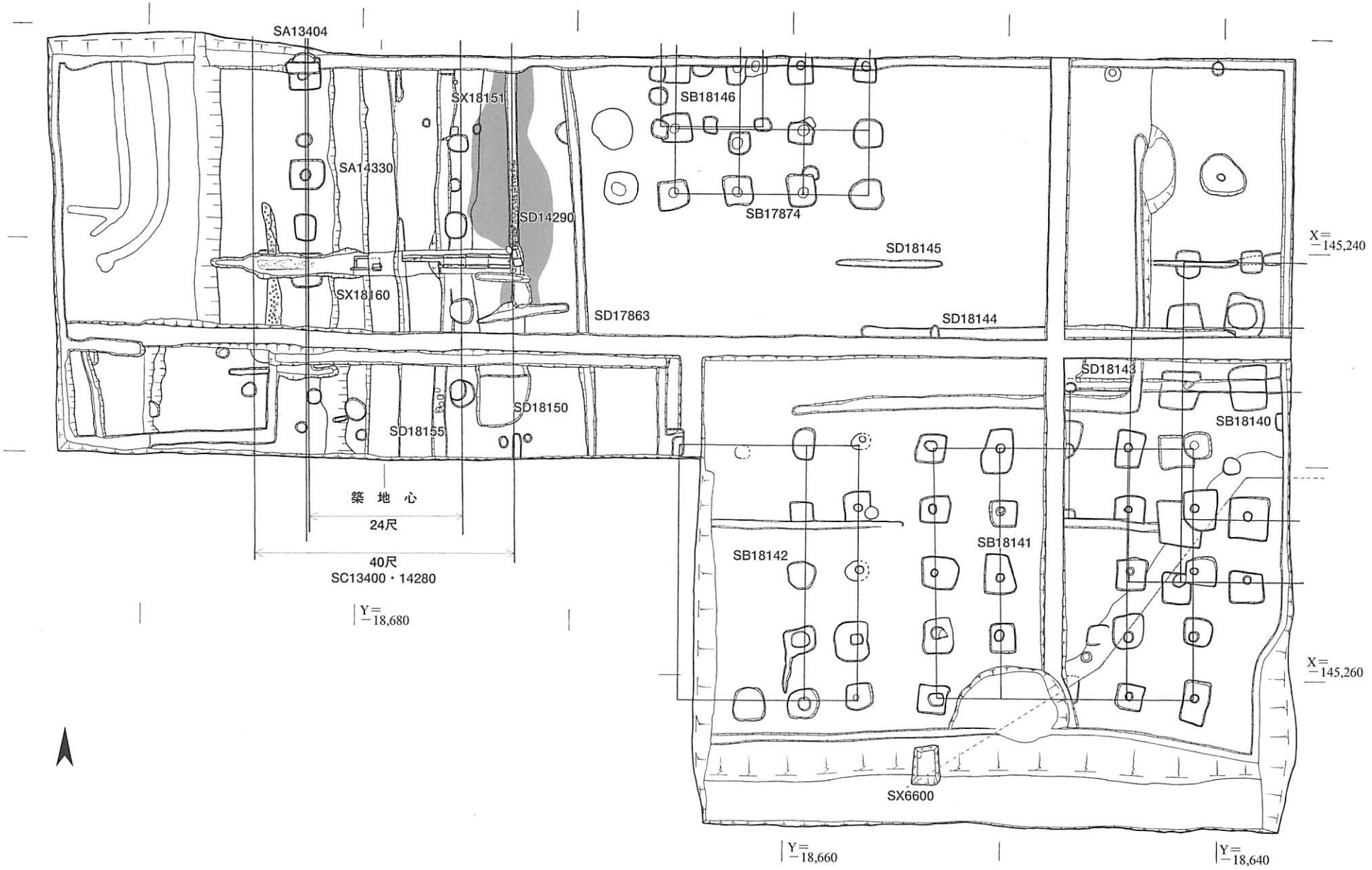


図12　第305次調査遺構平面図　1：250

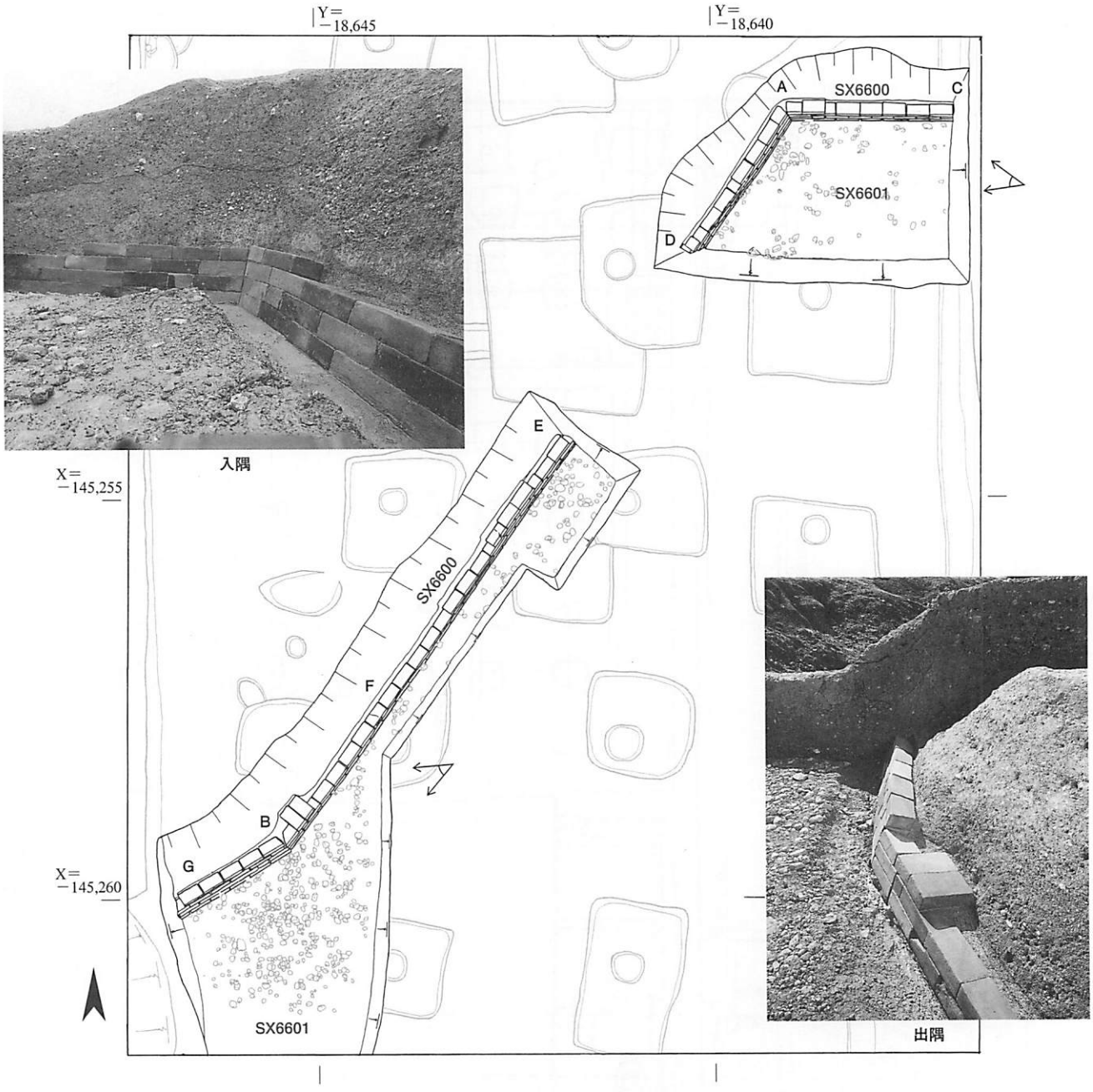


図13　塼積擁壁(黒色)と上層遺構　1：80

このように本調査地は西と南を中心に大幅な地形改変がなされている。調査の結果、遺構面は現況とは大きく異なり、南に行くほど大きく削られ、残存遺構面は南と北では２ｍ近い高低差があることがわかった。ただし、西面回廊や調査区北東では耕土直下で遺構面に達するところもあった。

当地は調査区東端で確認された包含層から、平城宮が廃絶したのちにも、中世に一度生活の場となったことがわかったが、その時期の明確な遺構は検出しえなかった。

検出した主な遺構

Ⅰ期の遺構

第一次大極殿と後殿を載せた塼積壇があり、その前に広がる石敷広場を取巻くように築地回廊がめぐる。しかし、その後半には恭仁京遷都にともない、築地回廊を撤去し、掘立柱塀をめぐらす。

ところで、塼積擁壁を含む第一次大極殿院地区の地盤造成については、調査区中央で東西畦に沿って実施した断割り調査によって一定の知見を得ることができた。すなわち、調査区東端Ｙ＝−18,639付近から西に向かって大きく地山が下がっていくが、この地山の上に厚さ0.4〜0.5mほどの表土を押し流したような暗褐色の荒い造成土がまず載り、その上に礫の多く混ざった土と粘土とを使い分けて水平に何層も積み上げた整地が見られることがわかった。こうした地盤整備は西へ行くほど大規模になっており、西面築地回廊の通るところでは築地削り出し面から1.4m下にある厚さ0.3mほどの土層にも造成時の混

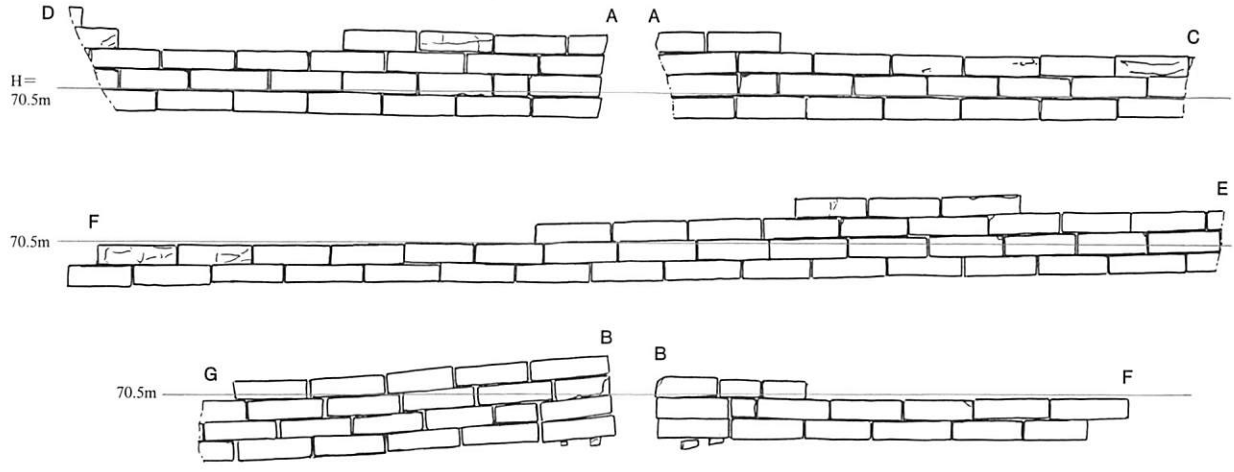


図14　塼積擁壁立面図　1：30

入と思われる埴輪が含まれている。その下にさらに数層を経てようやく分厚い軟弱な粘質土層に達する。この粘質土層も造成土の可能性が残るが、かりにそれを当時の地山とみた場合でも、回廊部分で2.3mほどの盛土を施していたことになる。

SX6600　第一次大極殿にともなう塼積擁壁を、東側の調査結果と対称的な位置で検出した。SX6600の南側はⅡ期の掘立柱建物群を築くために新たな盛土によって埋め立ててあるが、限られた範囲でそれを取り除いて調査を行なった。遺存状況は塼一段分しか遺存していなかった東側に比べてかなりよい。ただし、調査区南北畔より西側では新しい時期の水路にともなう撹乱によって基礎の部分もろとも破壊されている。

検出範囲は大極殿前方を東西約100mにわたって直線的に伸びてきた塼積擁壁が、南西に約55度の角度で振れ、11mほど延びた後に、再び西南西に約22度向きを変える、入隅と出隅の2箇所の屈曲点（A・B）を含む部分である。以下、詳しくその構造的特徴について解説することにしたい（図14）。

まず、今回検出した塼積擁壁東半部分では地山を大きくカットして塼を平積みしている。これに対し、西半検出範囲では塼の裏側はすべて盛土であった。これは先に述べたように地山がちょうど屈曲点Aあたりから西に下がっているためである。塼を積むにあたっては背面の地山や盛土とのあいだに厚さ2～3㎝の白褐色粘質土の裏込めをかませつつ前面をそろえるように積み上げており、塼を重ねる際にも同質の土を入れている。塼の縦方向の目地は基本的に一段置きに通るように意識されているが、そうなるように、下から2段目でA・Bともに屈曲点から2つめの塼を約半分の大きさに打ち欠いてある。なお、第一段目の塼は地山があるところでは地山直上に積み上げているが、背後が盛土のB付近では塼の破片をかませるなどして高さ調節をおこなっている。

これ以外に注目される点としては、A・B各屈曲点で各辺両端の塼を突き合わせる際に、隙間が生じないようその場で個々の塼を斜めに打ち欠いて並べていることや、B付近では2個が小口積みになっていることなどがあげられる。

これらの塼積は良く残っているところで下から5段分まで残存していた。前面の傾斜は、Bより東側では約70度。これに対して、B－G間では65度と明らかに緩くなっている。塼の積み方もBの東西で大きく異なっており、A－B間では実際に約11mで塼1段分の高さしか傾斜しておらず、水平と言って語弊がないくらいだが、Bの西では約1.5mで磚1個分の傾斜がついている。また、磚相互の間隔もB－G間では広いところが目立ち、粗雑な観がある。

なお、使用されている塼の法量は平均長さ29.0㎝×幅15.0～15.5㎝×厚さ8.5㎝で、とくに幅にはばらつきがあり、それを裏込め土で調節している。因みにA－Bの屈曲点の間では一段あたり38個の塼を用いていると試算できる。色調も灰白色のものから暗灰色のものまであり、それらが無秩序に配列されている。表面には色彩などを施した痕跡はない。

以上の残存部から塼積擁壁を復元するならば、壇上面を72.6mとした場合、25～26段の塼積が必要となる。その上面の仕上げが問題となるが、残存塼積擁壁の姿からすると西屈曲点B以東は塼自体は水平に積まれていたことは確かであるから、第295次調査で想定された位置に段差があったとするならば、塼積擁壁上端にもそ

れに応じた段差を、段数を変える形で付けていたと考えるのが妥当である。とはいえ、全体としてみた場合、後述するように段差自身の存否を考え直す必要がある。Bの東と西で見られた対照的な状況は上辺の傾斜や仕上げがそこを境に異なっていたことを窺わせる。なお、入隅部分については型取りして原寸大模型を作成した。

SX6601　塼積擁壁SX6600の前面から南面回廊までの礫敷広場。基本的に塼積擁壁際では拳大の礫を厚く敷き、それより南に離れるにつれ、そうした大振りの石は少なくなり、クラッシャー状の小石による舗装へと変わる。石敷の厚み自体南へ行くほど薄くなり、塼積検出範囲の北端では一段目の塼は完全に埋まっているが、同南端では一段分の厚みに満たない。なお、北端の石敷面の高さは東側対称地での既往の調査結果とまったく変わることがなく、標高70.55mである。

SC13400　第一次大極殿院の西側を限る西面築地回廊。東面築地回廊SC5500に対応する。この回廊は重複してⅡ期に築地回廊が築かれ、またⅢ期には築地塀が造られるため、Ⅰ期当初の姿はほとんど留めない。ただし、Ⅲ期の築地塀SA14330はこのⅠ期以来の整地ないし版築土を基底部ではそのまま利用しているように観察される。なお、ここでは掘り込み地業は行っていない。

このSC13400に本来ともなっていたであろう雨落溝は第295次調査において東側について検出している。拳大の側石を一列設け、その内側に一段低い溝底のバラスを敷き詰めるものだが、本調査地内ではすでに失われている。これは第295次調査範囲の南半と同様、後述のSD18150によって破壊されたためである。なお、還都後の築地回廊については知見が得られなかった。

SA13404　SC13400の西側柱と重なるように南北に走る恭仁京遷都時の掘立柱塀。Ⅱ期の築地回廊暗渠SX18160によって切られている。既往の調査成果に合致し柱間は15尺である。柱穴を断ち割ったところ、柱抜取りの底では塼と瓦を礎板として用いていることが確かめられた。柱穴掘形の残存深度は約1.4mである。

SD18150　Ⅱ期西面回廊東雨落溝SD14290の下に位置する幅の広い溝状遺構で、第295次調査区途中からはじまり、今調査区を経て、第217次調査区に入ったところで完結する。北端は第295次調査でSD17860の南半拡張部分として、南端は第217次調査のSK14322として理解された遺構である。すなわちSD18150はⅠ期当初の東雨落溝を部分的に壊して掘り込まれた土坑的性格の強いものと考える。幅約2.5m、深さ0.7mを計る。

SD17863　SD18150の東側約2.5mのところを北で西に振れた形で南北に走っている溝。周辺の検出面はⅠ期当初の整地土であり、一部それとほぼ似た粘質土が内部を充填していた。中からは多量の瓦が出土している。溝の方向の振れや埋土の特徴から、Ⅰ期回廊や南北塀と併存した可能性もあるが、回廊完成前にすでにできていたことも考えられる。その場合、第一次大極殿院建設作業中の排水用の溝として理解することも可能であろう。

Ⅱ期の遺構

南北それぞれ狭められた回廊内にあって、拡幅された壇上に、掘立柱建物が林立する。それらの建物は中軸線上に3棟の建物を南北に連ねた建物群を置き、両側に複数の脇殿を配した姿が基本構成となっている。なお、塼積壇を廃し高台を南へ拡張した際に埋めた土の中に版築土の塊を多数検出したが、これは後殿の基壇土の可能性がある。

SB18140　東側の調査で検出しているSB6660に対応する西脇殿で、西端1間分を検出した。身舎は桁行7間、梁間2間と考えられるが、南北に庇をもち、北にはさらに孫庇を設ける。孫庇はSD18145に切られる。柱間は庇部分とも10尺、SB6660と同様、西側に桟敷を設け、さらに階段を付けていたと復元できる。しかし、それらにともなう柱穴の多くはⅢ期のSB18141の柱穴によって消されている。身舎、庇の柱穴掘形は1辺が2mを超える大きなもので、柱穴の深さも1.9mを計り、SX6601の石敷面に到達するものもあった。なお、柱抜取穴からは鉄釘が7点出土している。

SB18142　東側対称地のSB8302に対応する南北棟。SB8302は正確な桁行の間数が後世の削平のため不明であったが、本調査区では南北4間であることが確かめられた。また、東側では庇はないことになっているが、SB18141では東側に庇が付くことがわかった。柱間は身舎で10尺等間、庇の部分は8尺である。

SB17874　東側第87次調査でみつけていたSB8245と対応する建物だが、第295次調査では梁間2間分しか柱穴がみつからなかったため、梁間2間の南北建物と考えた建物である。本調査で、建物南端の2間分が梁間3

間の総柱のかたちで検出されたため、やはり本建物は基本的に梁間３間の建物と認識すべきことがわかった。ただし、西から２筋目の柱穴が周囲とはずれ、深さも浅いことからこの筋が床束になる可能性もある。

SC14280　SC13400の基底部をそのまま利用した築地回廊。築地部分の両側に礎石据付掘形が残っており、一部礎石を安定させるための石が検出された。柱間は13尺、東西側柱の心々距離は24尺、基壇幅40尺に復元できる（図15）。築地心は検出範囲の中心付近でX＝−145,239.3　Y＝−18,679.0を通る。

SD14290　SD18150を炭や土器片の混じった土で埋め戻した後、掘削した築地回廊東雨落溝で、暗渠SX18160の取水口に取り付く。その延長は第217次調査でも検出している。現状では暗渠取水口から北側4.5mの範囲でしか溝の中に石が詰められていないが、第217次調査でも同様な石詰めが確認されており、本来このSD14290は石を敷き詰めた溝であったと考えられる。溝の埋土からは瓦や土器類が多く出土している。幅は0.4〜0.5mを計る。

SX18160　SD14290を流れてきた水を回廊の下を抜いて西へ排水するための暗渠（図16）。長さ105㎝、幅50㎝、厚さ15〜20㎝ほどの長方形の凝灰岩切石を４枚箱型に組み合わせたものを継いで排水暗渠としたもの。築地下部では蓋石まで残っていたが、築地東側は蓋石のみ撤去、築地西側では蓋石とともに側石、底石ともすべて抜き取られていた。それでも約7.5mも石組の暗渠が残存していた遺構は宮内でもたいへん珍しい。この暗渠は築地基底部を掘り込んで作っている。石材を抜き取ったあとには、軒瓦や土器などが人頭大の石などとともに放り込まれていた。

暗渠は蓋石の載せ方にばらつきが見られ、側石上面内側を一段下げ、そこに蓋石を落として固定するもの、側石上面に木桟をかける抉りを各４個ずつ入れ、おそらくそれに木蓋などを架けたことが想像できるものなどがある。一方、底石への側石の載せ方は、基本的に側石下面内側を刳り、底石に架けるように固定する方法をとるが、残存石組西端では底石も側石の載る部分を刳っているのが観察される。各構成部材の組み合わさり方から、東側取水口から設置していったことがわかる。暗渠内法は一辺約30㎝。築地西側では抜取下面に凝灰岩の剥離

図15　築地回廊と暗渠（東から）

した痕跡があり、本来は11m近くあったことがわかる。すなわち、西にあと３組ないし４組分伸びていたと考えられる。その先は暗渠を埋設するに足る幅を持たない素掘り溝となってそのまま西側の崖面に開口しているが、おそらく当時も西側斜面を下って基幹排水路へ水を流していたものと思われる。暗渠石材表面の加工はあまり丁寧ではなく、表面に手斧よる削り痕が無数に残っている。何かの転用であろう。

この暗渠がいつの時期のものであるかは、その上限がSD18150に投棄されていた遺物の年代によって押さえられ、下限は蓋石や側石の抜取り後に捨てられた土器などによって押さえられる。また、東側の状況からは少なくともそこではⅢ期の築地基底部に埋もれる部分については石を掘り上げず、上面に出て邪魔になる蓋石だけを取り除いたと見られる。

なお、調査後、薬品による強化処理を施した。

Ⅲ期の遺構

回廊をもたない築地がⅡ期回廊と同一箇所をめぐり、築地内を多くの塀が仕切る中、正殿を中心に掘立柱建物が並ぶようになる。

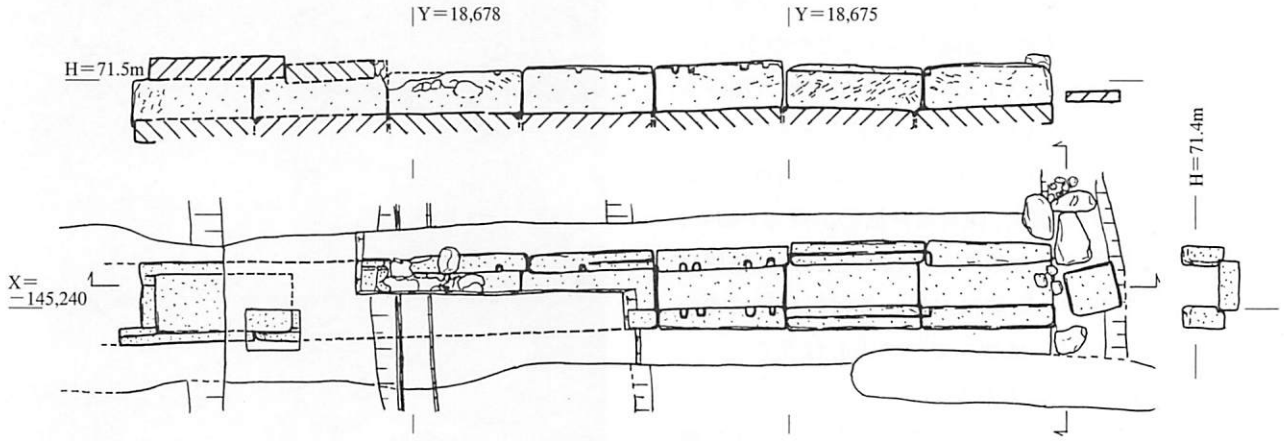


図16　暗渠SX18160　1：60

SB18141　東側対称位置で検出されているSB8300に対応する南北棟で東西に庇をつけた桁行４間、梁間２間、10尺等間の掘立柱建物。Ⅱ期の建物にくらべて柱穴は浅い。

SB18146　東側対称位置のSB8305に対応。Ⅱ期のSB17874に重複して建てられた小規模建物。梁間２間、桁行は２間以上。柱間は８尺等間となっている。仮設建物の類であろう。

SD18143　幅0.6m、深さ0.1mの東西溝で、約10mにわたって検出。Ⅱ期西脇殿ＳＢ18140の北身舎柱列を切って作られ、土器を多く含む土で埋められていた。

SD18144　調査区東西畔に沿って浅い素掘りの溝を長さにして約18m検出した。出土遺物は少ないがⅡ期のSB18140を切ることから、Ⅲ期の溝と考えることができる。この溝の埋土からも土器が少量出土している。

SD18145　幅0.3m、深さ0.1mの東西溝で痕跡的に検出している。第87次調査で検出しているⅢ期の東西方向石組溝SD6607の対称位置にあるが、SD6607のように石を敷いていた痕跡はない。ただし、その西側延長部には凝灰岩切石暗渠SX18160があり、かなりの落差を設ければその取水口付近に水を落として合流させていたことも想定できる。とはいえ、そうすると、この溝をⅡ期の中で理解しなくてはならなくなり、SB18140の孫庇との切り合い関係と矛盾するなど問題も少なくない。上記のような状況から判断すればSD6607に対応する溝とはみなしがたい。

SA14330　Ⅰ期、Ⅱ期の築地回廊基底部を利用して築かれた西面築地塀。第217次、第295次に違わず、築地本体の基底での幅は５尺。残存築地最上層には瓦が多く含まれる土層が観察され、この部分から上が新たな積み直しをおこなったものと思われる。また、築地本体基底部東裾には一部浅い溝状に掘り上がる部分があり、地覆などの施設があった可能性がある。

SD18155　築地心から東約2.4mのところで検出した段のようにも見える浅い溝。深さは0.1mにも満たないが、築地基壇の端を限る溝と見られる。そこから築地SA14330の基底部幅を求めると16尺となる。築地心を挟んだ反対側の想定位置では後世の削平がちょうどその位置まで及んでいる。

この溝からは第217次調査区内で、凝灰岩の切石破片が数個検出されていて、地覆などの部材が破棄されたものかと思われる。このほか、本調査区内では平安時代の土師器がまとまって溝の埋土から出土した。築地廃絶時期を示す遺物と見られる。

SX18151　SD18155の東側に広がるバラス敷。Ⅱ期築地回廊東雨落溝SD14290を覆い隠すようにⅠ期以来の整地土に直接載っているもので、奈良時代の土器を包含する。わずかに中世の土器が混入するが、その位置からⅢ期築地SA14330内側に敷かれたバラスの残存と考えられる。

出土遺物

本調査で出土した主な遺物には、土器土製品類、瓦塼類、金属・石製品類がある。以下、古代の遺構に関係するものを中心に説明する（図17・18）。

土器・土製品

奈良時代の土師器、須恵器、緑釉陶器（細片）、平安

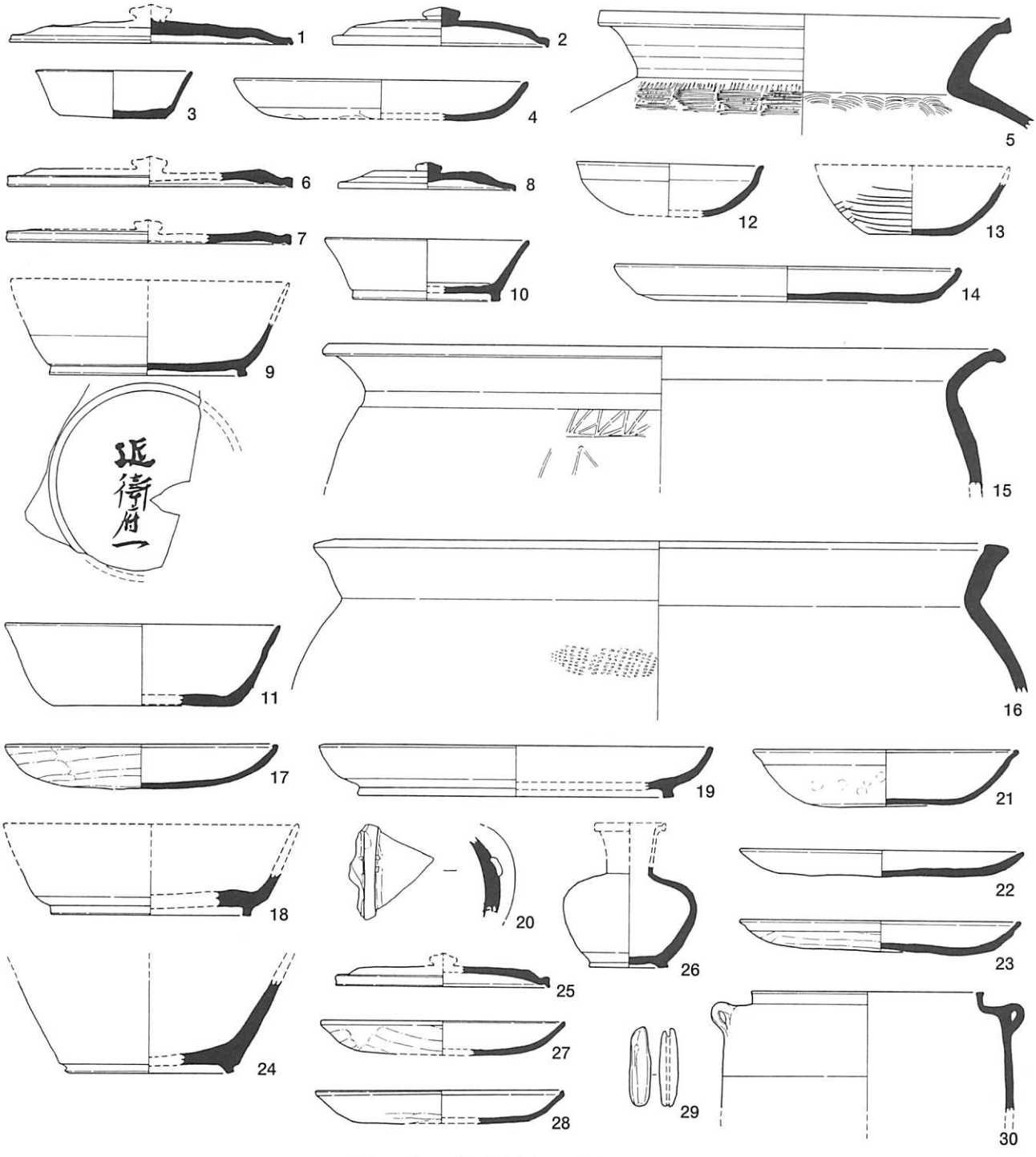


図17　第305次調査出土土器・土製品　1：4

時代の土師器のほかに古墳時代の埴輪、古代または中世の土錘、中世の土師器、瓦器などが出土している。

1～4はⅡ期西面回廊の東雨落溝SD14290の設置前に埋め立てられたSD18150に多量の炭とともに包含されていた土器。1・2は須恵器杯B蓋。3は完形の須恵器杯A。4は土師器ⅢA、内外面ナデ調整で底部に指頭圧痕を認める。これらの形態や調整などの特徴から平城Ⅲないし Ⅳに比定でき、SD14290をともなう築地回廊SC14280が還都後の造営であることが証せられる。ただし、Ⅱ期開始当初のものかどうかはこれら断片的な土器からでは断言できない。一方、SD18150は恭仁京遷都時に形成された可能性が高い。5は須恵器甕で塼積擁壁前方

Ⅱ期造成土から出土。

6～18は暗渠SX18160の凝灰岩抜取り跡から出土した土器群。須恵器には杯B蓋（6～8）、同身（9･10）、杯A（11）、甕A（15）、甕C（16）などがあり、土師器には椀A（13）、椀C（12）、ⅢA（14）がある。図示していないが緑釉陶器の破片も出土している。供膳形態のほかに貯蔵形態の大型品の破片が含まれ、須恵器の比率が高い。須恵器杯B蓋（6・7）は端部よりのところが肥厚し、（7・8）は端部の屈曲が弱い。

杯B（9）は底部外面に「近衛府一」の墨書がある。近衛府とは近衛と呼ばれる武官を率いて、禁中の警備を担当した役所のことである。これが出土した当地区が奈良時代後半に称徳天皇の宮であったと推定されていることを考えると、天皇に近侍して警備する近衛府の墨書が見られることは興味深い。なお、近衛府の名称は765年から807年までに限って使われたものであり、年代的にも齟齬しない。

土師器椀A（13）は復元口径10.0㎝、外面には手持ちヘラミガキが施されている。土師器ⅢA（14）は底部のヘラケズリ痕がナデによって消されている。これらの土器は上述した特徴などからほぼ平城Ⅴに位置づけることができよう。これはⅡ期西面築地回廊の廃絶が長岡遷都と関係することを物語るものである。

Ⅱ期建物SB18140の柱穴抜取りから出土した土器に土師器椀D（17）と須恵器杯B（18）がある。このうち後者は美濃産の特徴をもっている。

東雨落溝出土土器（19・20）も少なくなく、このうち20は愛知県猿投産の双耳瓶の破片。外面に自然釉が厚く付着している。それらの年代もSX18160廃絶の時期と大きく変わらないものと思われる。

21～23はⅢ期築地基壇東裾を画する浅い溝SD18155から出土した一群の土器。図示した3点はほぼ完形で出土。21は椀A、22・23はⅢA。21は外面に不明瞭ながらケズリが認められる。口縁を横ナデし、端部は少し内側に肥厚する。22は摩滅のため調整等については不明だが、23は外面にヘラケズリ痕を残し、口縁の横ナデが顕著である。これらの特徴から平城Ⅶに比定される。Ⅲ期の遺構の終末を示している。

24はSD18144から、25・26はバラス敷きSX18151から、そして27・28はSD18143からそれぞれ出土した。いずれも奈良時代末から平安時代にかけてのものであろう。

その他、Ⅲ期築地崩壊土中より29の土錘や30の須恵器が出土している。後者は円環状の把手をおそらく一対つけたものと想定され、奈良、平安時代にはあまり例のない製品である。

瓦塼類

今回の調査で出土した瓦は比較的量が少なく、軒丸瓦17点、軒平瓦17点であり、丸瓦破片約4000点、平瓦破片約2500点である（表4）。

まず、第一次大極殿地区第Ⅰ期の組み合わせである6284C－6664Cは、6284型式1点、6664Cが2点出土したにすぎない。次に、第Ⅱ期殿舎地区の軒瓦の組み合わせである6133－6732は、6133Aaが2点、6133Dbが1点、6133が1点で、6732Cが4点の出土である。後四者はいずれも築地回廊暗渠SX18160抜取りから出土している。

次に、第295次調査でもっとも多く出土した軒平瓦である6718A（100点）は、今回の調査では6点出土しているが、それと組み合うと考えられる軒平瓦6130Bは1点も出土していない。6718Aの出土は第295次調査区に近い調査区北東に集中している。

塼はSX6600に関連するものをはじめ、各所で多数出土している。（高橋克壽）

表4　第305次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6133	Aa	2	6663	A	1
	Db	1	6664	C	2
	?	1		?	1
6282	Bb	1	6710	C	1
	E	1	6718	A	6
	?	1	6732	C	4
6284	?	1	型式不明	?	2
6308	Aa	1			
6314	A	1			
7255	A	1			
型式不明		5			
近世		1			
軒丸瓦計		17	軒平瓦計		17

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	96.5kg	199.8kg	33.9kg	7.1kg	面戸瓦	1
点数	1,084	2,563	32	25	隅切平	1

金属・石製品

古代の金属製品としては、釘、鋲などの建築材料、飾金具などが出土した。鉄釘は、長さ20cm前後の方頭釘がⅡ期の掘立柱建物SB18140の柱穴から７点出土している。こうした大型の釘がⅡ期建物の柱穴に廃棄される例に第295次調査のSB17870がある。

特殊なものとして、半球形の唄（饅頭金物）を一体につくった飾釘が出土した（図18）。全長21.0cm、頭部は、径5.0cm、高さ2.2cmの銅製で、Ｘ線CT断層撮影によれば、１辺約2.4cmの正方形の頭をもつ鉄製の釘を芯として鋳造されたものである。調査区北東部の遺物包含層より出土した。

これと似た形制の金具に、法隆寺綱封蔵南倉板扉の唄金具が知られている。唄は饅頭型の青銅鋳物で、裏の中心に８㎜角の鋳鉄の足をつける。南倉の板扉は、扉の形式、金具の形状等が古式で、木割りおよび唄の配置がすべて高麗尺完数値であることから、創建当初あるいはそれ以前のものの転用品とされ、奈良時代の遺例と推定されている（『重要文化財法隆寺綱封蔵修理工事報告書』1966）。

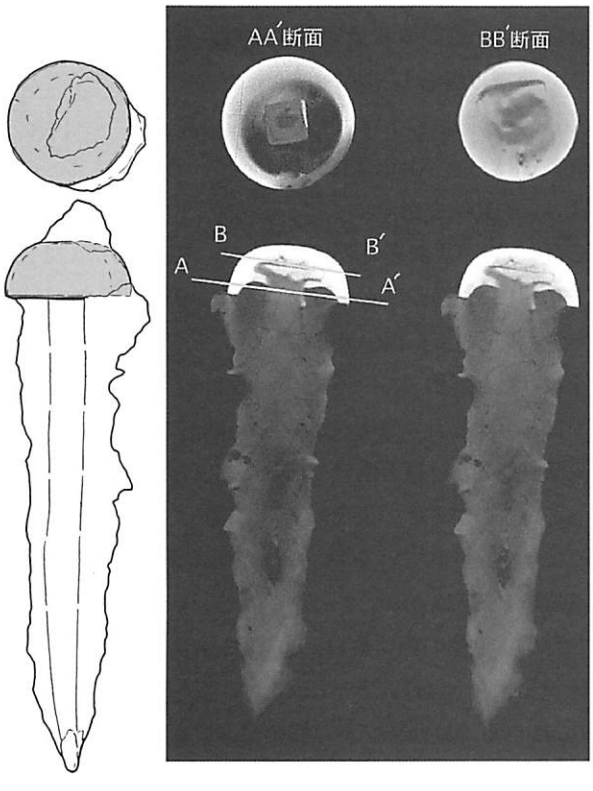


図18　第305次調査出土飾釘（１：３，右はＸ線CT断層撮影）

この他、銭貨として寛永通宝、石製品として砥石などが出土した。（次山　淳）

まとめ

本調査によって、大極殿院に関わる少なからぬ新たな知見が得られた。まず第一に、今回検出したSA13404やSC14280の側柱列が、217次及び295次の調査で検出した遺構を結ぶ直線上にほぼ載っており、このことから、西面回廊は斜路起点付近から北では、約１°27’北で西に振れることが判明した。

また、塼積擁壁の具体的な構造についてこれまでわからなかった多くの点が明らかになったことは特筆される。近年、この塼積基壇のモデルとして考えられる中国唐の含元殿龍尾壇の復元案が修正され、それに基づいた整備がすでに始まっている。今後工法的な側面からも比較を推し進めていくための材料が得られたといえよう。

さて、それではこの塼積基壇の上面、すなわち懸案の第一次大極殿院北部1/3の地盤面はどのようになっていたと考えるべきであろうか。本調査でまず明らかとなったことは出隅部分までの間については塼は基本的に水平に積むが、そこから西では積み方が変わることである。そして、先の第295次調査では少なくともⅡ期からⅢ期にかけてSB17870とSB17874の間に段差があったことが想定されていたが、その間にSD18144が落差も途切れることもなく続いていることから、少なくともⅢ期にはそこに段差があったことは想定しにくいことがわかった。

Ⅲ期の状況がⅠ期の姿をある程度留めていたとするならば、東半部の調査成果と照らし合わせた場合に生じる回廊部分での0.9mを超えるレベル差は、塼積出隅部分から回廊までの間で、段差ではなくスロープで解消していた可能性も考えられよう。

既に述べたように、西側回廊部分では２mをはるかに超える造成を当初から行なっている。このことから、回廊東西に見られる高低差を是正する意識は十分強かったことが読み取れる。しかし、上述の高低差が観察されることは、東側を逆に削り込むことの難しさも含め、当時の地盤造成労力の限界が示されていると見られよう。ただし、下層の軟弱粘質土が上面に対して後世に影響を与えた可能性も捨て切れない。（高橋）

2．第311次調査

はじめに

第一次大極殿の復原整備事業は、すでに実施設計の段階に入っているが、平面配置の正確な座標値については、依然検討の余地を残している。大極殿遺構の東側4分の3を発掘した第69次（1970年）・第72次北（1971年）調査の測量値と、西側３分の１を発掘した第295次（1998年）調査の測量値に、わずかながら誤差を認めうるからである。この問題は平城宮内の遺構すべてに関与するが、1988年に実施した平城方位から国土方位への転換に伴い、測量基準点の改測をおこない誤差値の補正に対処してきた。とはいうものの、大極殿遺構を復原的に解釈する場合、新旧の実測図を機械的に補正し合成するだけでは微妙な誤差を残す恐れがあるため、東側の旧調査区を部分的に再発掘し、座標値を再検証することとなった。

設定した発掘トレンチは以下の５ヶ所である（図19）。基壇北西隅の東西３m×南北４m（A区）、北面中央階段部を含む東西８m×南北７m（B区）、北面東階段部を含む東西８m×南北８m（C区）、基壇北東隅の東西5m×南北18m（D区）、南面階段部を含む東西14m×南北7.5m（E区）であり、発掘面積はあわせて327m²となる。なお、A区は第295次調査で発掘した部分であり、この地点の遺構を基準にして桁行方向および梁行方向の基壇寸法を実測した。調査期間は2000年２月１日～3月15日である。

新たに検出した遺構

第一次大極殿SB7200の基壇地覆石を据え付けるための溝状遺構を、これまでの調査で検出している。このうち西側の第295次調査では、地覆の据付掘形と抜取痕跡を鮮明に峻別して検出したが、東側の旧調査区では両者を一体の遺構とみなして完掘しており、それが基壇規模の復原に曖昧さをもたらしてきた。今回の調査では、D区とE区で基壇地覆関係の遺構を新たに発見した。

D区　基壇北東隅部分は第69次と第72次北調査区の接点にあたり、地覆関係の遺構をこれまで確認できていなかった。ところが両区の重複部分には、あきらかに南北方向の溝状遺構が残っている（図21）。この溝状遺構は幅1.2～1.6mで、X－145,210を南限として北へ約７mのび、東西方向の溝状遺構と連結する。溝周辺の遺構検出面は標高72.80～72.90mで南下がりとなり、X－145,210以南では溝状遺構を検出していない。東面階段北側の耳石推定位置も確認できなかった。

表５　座標の変位置

	311次		69次・72次北		変位量	
	X	Y	X	Y	X	Y
B区	-145205.00	-18588.00	-145205.01	-18587.73	0.01	-0.27
	-145205.00	-18591.00	-145205.02	-18590.70	0.02	-0.30
	-145203.00	-18588.00	-145203.01	-18587.72	0.01	-0.28
	-145203.00	-18591.00	-145203.01	-18590.71	0.01	-0.29
C区	-145203.00	-18573.00	-145203.05	-18572.63	0.05	-0.37
	-145203.00	-18576.00	-145203.02	-18575.69	0.02	-0.31
	-145200.00	-18573.00	-145200.09	-18572.67	0.09	-0.33
	-145200.00	-18576.00	-145200.02	-18575.70	0.02	-0.30
D区	-145218.00	-18561.00	-145218.02	-18560.66	0.02	-0.34
	-145215.00	-18561.00	-145215.04	-18560.71	0.04	-0.29
	-145212.00	-18561.00	-145212.05	-18560.73	0.05	-0.28
	-145209.00	-18561.00	-145209.02	-18560.70	0.02	-0.30
	-145205.00	-18561.00	-145205.07	-18560.75	0.07	-0.25
	-145203.00	-18561.00	-145203.05	-18560.74	0.05	-0.26
E区	-145236.00	-18585.00	-145236.02	-18584.71	0.02	-0.29
	-145236.00	-18588.00	-145236.00	-18587.71	0.00	-0.29
	-145236.00	-18591.00	-145236.02	-18590.69	0.02	-0.31
	-145236.00	-18594.00	-145236.01	-18593.69	0.01	-0.31
	-145233.00	-18585.00	-145233.02	-18584.70	0.02	-0.30
	-145233.00	-18588.00	-145233.04	-18587.71	0.04	-0.29
	-145233.00	-18591.00	-145233.04	-18590.74	0.04	-0.26
	-145233.00	-18594.00	-145233.04	-18593.70	0.04	-0.30
					平均	
					0.03	-0.30

溝状遺構の埋土は基本的に掘り上げられているが、湾曲する北東隅の内側に掘り残しがあり、奈良時代の瓦片が２点出土した。注目すべきは、北東隅の外側では二方向の溝が一体化しないことで、その部分は矩形状に切り欠かれている。しかも、溝状遺構は東西・南北方向とも基壇側でわずかに深く、外側は浅い皿状の断面を呈している。すなわち、基壇北東隅では、深い基壇側の部分だけが直交して繋がっており、外側の浅い部分は連結されていない。第295次調査区では溝状遺構の基壇側で地覆の抜取痕跡を検出したが、D区の出土状況も、深い基壇側の部分に地覆石を据えたことを示唆している。幸いにもD区では、この溝状遺構を含む東西方向の畦が残っており、基壇地覆石の据付掘形と抜取痕跡を識別できた（図20）。据付掘形の全幅は約160cmで、深さは５～10cm、抜取痕跡はあきらかに内側に偏向し、その幅は45～65cm、深さは約10cmを測る。

E区　第295次調査の所見によると、SB7200はA期［和銅三年～］に正面階段がまったくなく、B1期［神亀・天平初年～］になって南面中央に幅38尺、長さ14尺の大きな階段を設けたと解釈している（『年報1999－Ⅲ』）。他の階段部分では基壇地覆石の遺構が認められないのに対して、正面中央階段部分だけは西端側で部分的に基壇地覆石の遺構を残しているのが、その根拠の一つであった。この溝状遺構はやはり完掘されているが、今回の調査では、東側に連続する遺構を約120cm分だけ検出した（図22・23）。新たに発見した溝状遺構の幅は約140cm、深さは３cm前後である。遺構検出面は標高72.75～72.83mで東下がりとなり、Y－18,589以東では連続する遺構を検出できない。抜取痕跡はやはり基壇側に偏向し、幅は30～40cm、深さは最大で５cmを測る。断割調査を２ヶ所でおこなったところ、抜取痕跡

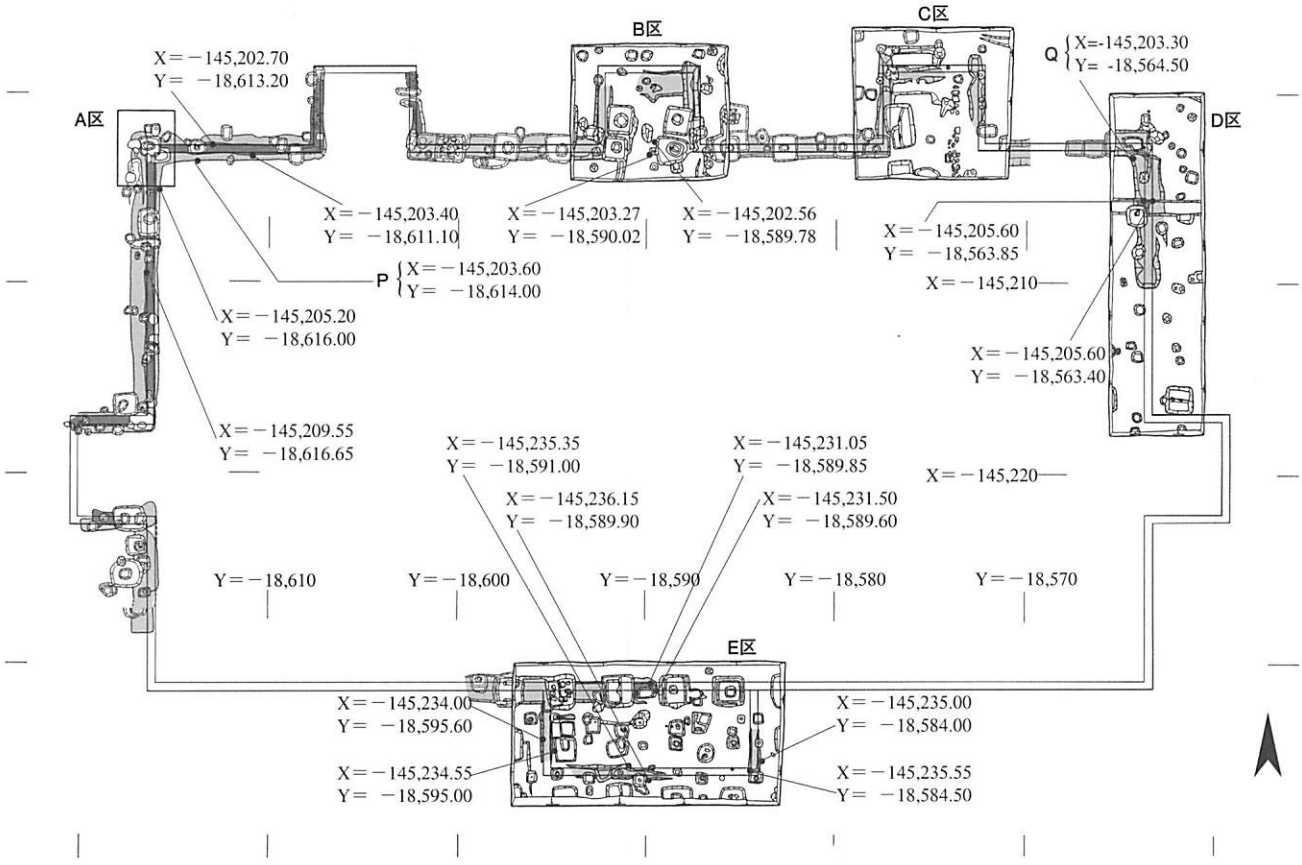


図19　第311次調査遺構平面図　1：400

から径18㎜前後の凝灰岩片が出土した。この凝灰岩片については、肥塚隆保氏が以下のように見解をまとめている。

第一次大極殿Ｅ区で出土した凝灰岩状の塊は劣化が著しく、岩石の組織を完全に残しているとは言えないが、実体顕微鏡下で観察したところ、高温型石英や黒雲母などが検出された。また、偏光顕微鏡下でその一部を観察したところ、火山ガラス片を検出した。以上から推定すると、流紋岩質凝灰岩である可能性がきわめて高く、奈良市東部の地獄谷に産出している流紋岩質溶結凝灰岩の風化の著しい試料と比較した結果、同様な特徴を有しており、奈良市東部に分布する流紋岩質溶結凝灰岩が石材として利用されたと推定される。

ここにいう「石材」が基壇化粧に用いられた可能性は、きわめて高いであろう。

座標と標高の変位量

平城宮内の発掘調査で用いている測量基準点は初め1963年に計測し、1988年に改測した。この改測によって、各基準点の座標値および標高が若干変化し、1989年度以降は改測後の新成果を用いている。このため、平城宮内におけるあらゆる測量データは、1988－89年度の前後で数値が変位している。この変位量は、理論的には1988年度以前の測量基準点の変位量とほぼ等しいはずであるが、今回の発掘調査では、厳密な復原設計に資するため、より正確な誤差値を抽出した。

ＸＹ座標の変位量　方法は以下のとおりである。①第69・72次北調査の遺構図を、平城座標系（国土方眼座標第Ⅵ系の北に対して0° 07′ 47″ 西偏）から国土方眼座標第Ⅵ系に変換する。②第311次調査の遺構図（Ｂ～Ｅ区）とそれに対応する第69・72次北調査の遺構図を３ｍ方眼の小地区ごとに図柄を重ね合わせて、小地区グリッド上南東隅の交点で座標値の変位量を読みとる。調査区全体で座標値変位量の平均をみると、第69・72次北調査の旧座標値に対して、北に３㎝、西に30㎝であった（表５）。なお、発掘区基準点の理論上の補正値は北に4.3㎝、西に29.7㎝であり、近似する値を示している。

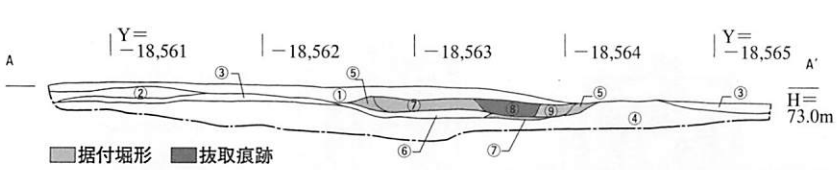
標高の変位量　標高値については、石など動きにくい出土物を重視し、遺構面計測地点の平均値を比較した。各区の変位量は、Ｂ区が－11㎝（石上9点の平均）、Ｃ区が－14㎝（石上14点の平均）、Ｄ区が－11㎝（遺構面62点の平均）、Ｅ区が第69次調査区で－13.7㎝（石上13点の平均）、第72次北調査区で－10.4㎝（石上3点の平均）である。いずれも、第69次・72次北調査で用いた平城宮基準点No.19の改測による変位量－10.7㎝に近い値を示している。

基壇復原の再検討

以上から、第一次大極殿基壇に係わる修正点を整理しておく。なお、座標読取り単位は５㎝とした。

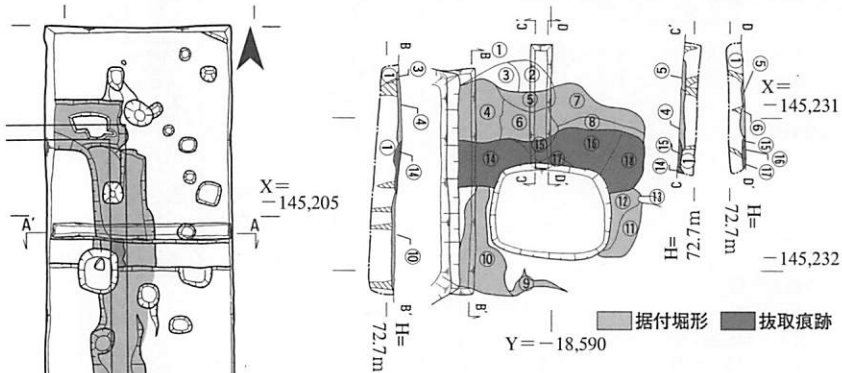
基壇規模と基準尺

基壇の振れ　基壇規模を正確に把握するためには、まず



① 旧耕土
② 小石混灰茶砂質土
③ 黒褐土小石混赤褐砂質土
④ 小石混橙灰砂質土
⑤ 少量の小石混灰茶褐粘質土
⑥ 灰白粘土混橙赤灰粘質土
⑦ 大粒小石多量に混黄茶褐粘質土
⑧ 大粒小石多量に混赤茶褐粘質土
⑨ 少量の小石混灰赤茶灰褐粘質土
(地覆石据付と思われるが抜取の可能性もあり)

図20　D区地覆石痕跡断面図
(X=−145,205.60) 1：50



① 褐色土混橙黄灰粘質土（地山）
② 小石混灰黄褐砂質土
③ 黄灰砂質土混褐黄灰粘質土
④ 褐茶灰土混黄灰砂質土
⑤ 褐橙土混黄灰粘質土
⑥ 多量の褐色土混黄茶灰褐砂質土
⑦ 多量の褐色土混橙灰黄色粘質土
⑧ ④+⑦
⑨ 橙褐土混黄灰砂質土（粒子粗い）
⑩ ①+⑨
⑪ ①+⑨（①の地山少なめ）
⑫ 淡黄灰褐砂質土+①
⑬ 灰黄砂質土（木の根か？）
⑭ 褐色土青灰土混淡黄灰砂質土
⑮ 黄灰砂質土混橙茶灰粘質土
⑯ ⑭の褐色土が増えた土
⑰ 褐色土混淡黄灰砂質土
⑱ ⑭に非常に似るが①混じる
斜線部　淡黄茶灰粘質土
(木の根か？)

図22　E区地覆石痕跡遺構平面図・断面図　1：50

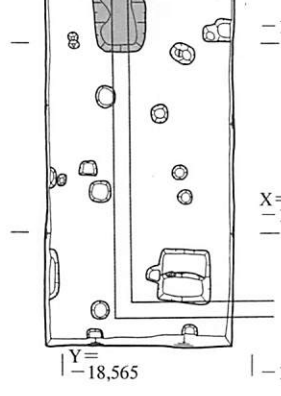


図21
D区（基壇北東隅）
遺構平面図
1：200

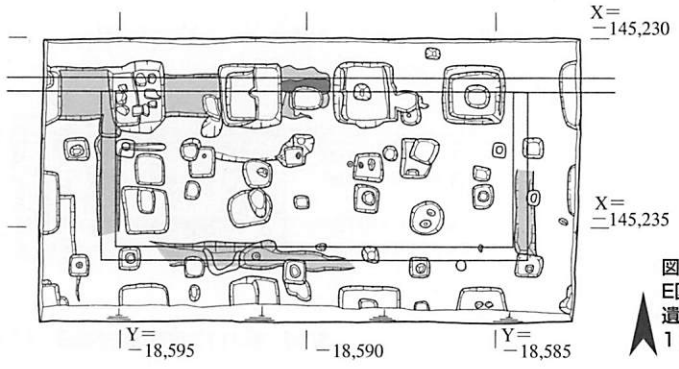


図23
E区（南面階段）
遺構平面図
1：200

基壇方位の振れを把握しておく必要がある。これについては二段掘りとする地覆据付掘形のうち、最も直線的なラインを検出している内側の肩を基準として復原してみたい。基壇北面の地覆石据付掘形遺構のうち、以下の2点をここでは採用する（図19）。

P点（北西隅の近く）X−145,203.60、Y−18,614.00

Q点（北東隅の近く）X−145,203.30、Y−18,564.50

PQ間では東西長49.5mの東端で北に0.30m振れており、角度では0° 20′ 50″ の振れとなる。以下の考察では、基壇北面の振れを東で北へ0° 20′ 50″ と仮定する。これが基壇全体の振れとして適応可能かどうかは、後で再検討することとして、とりあえず基壇全体が完全な長方形を呈するものと仮定し、以下の考察を進める。

基壇東西長と基準尺　基壇東面にかかる畦で検出した地覆石抜取痕跡のY座表値は、内側が−18,563.85、外側が−18,563.40（X−145,205.60）である（図20）。この遺構の対称位置に近い基壇西面では、最も外側となる抜取痕跡のY座標値は−18,616.65（X−145,209.55）、その近辺で最も内側となる抜取痕跡のY座標値は−18,616.00（X−145,205.20）である（図19）。したがって、東西長の最大値は53.25m、地覆抜取痕跡の内法距離は52.15mとなる。ここで、第295次調査の成果に従って地覆石の幅を1.3尺とし、基準尺をsmとおけば、以下の不等式が成り立つ（図26上）。

(52.15＋2.6s)m≦東西長≦53.25m

これに東西長＝179尺（179s）、180尺、181尺を代入すると、以下の不等式を得る。

①東西長179尺の場合　0.2956≦ s ≦0.2975

②東西長180尺の場合　0.2940≦ s ≦0.2958

③東西長181尺の場合　0.2923≦ s ≦0.2942

基壇南北長と基準尺　一方、南面階段の取り付き部分で今回検出した基壇地覆の抜取痕跡をみると、最も外側にふくらんでいる点のX座標値は、−145,231.50（Y−18,589.60）、最も内側となる点のX座標値は−145,231.05（Y−18,589.85）である（図19）。これと対称位置にある基壇北面では地覆の抜取痕跡を検出していないが、第295次調査で検出した抜取痕跡を前記の振れに従って延長し、仮の座標を想定し解決を試みる。まず、抜取痕跡のうち最も幅がひろがっている以下の2点を採用する。

北端（外側）：X−145,202.70（Y−18,613.20）

南端（内側）：X−145,203.40（Y−18,611.10）

これを基壇中央へ延長移動すると、以下の2点を得る。

北端（外側）：X−145,202.56（Y−18,589.78）

南端（内側）：X−145,203.27（Y−18,590.02）

したがって、この基壇中点近辺における南北長の最大値は28.95m、地覆抜取痕跡の内法距離は27.80mとなる。ここで再び地覆幅を1.3尺とし、基準尺をsmとおけば、以下の不等式が成り立つ。

(27.78＋2.6s)m≦南北長≦28.94m

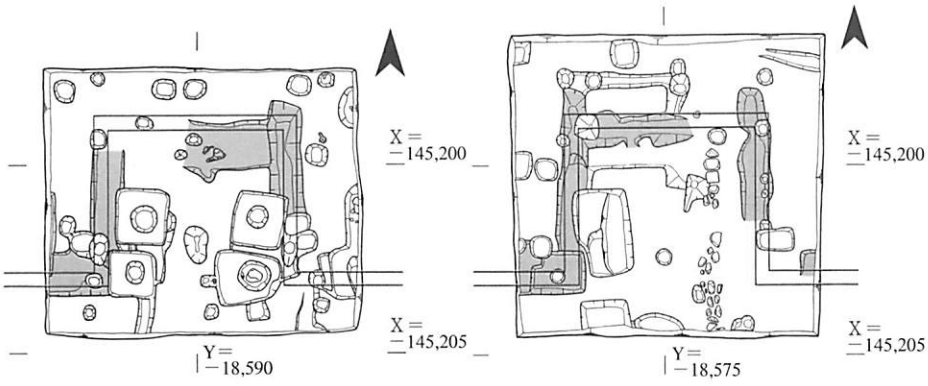


図24　B区（北面中央階段）遺構平面図　1:200　　図25　C区（北面東階段）遺構平面図　1：200　　図26　距離の最大値と最小値の算出方法

これに南北長＝96尺（96s）、97尺、98尺を代入すると、以下の不等式を得る。

④南北長96尺の場合　0.2974≦ s ≦0.3015

⑤南北長97尺の場合　0.2943≦ s ≦0.2984

⑥南北長98尺の場合　0.2912≦ s ≦0.2953

基壇の規模　平城宮での奈良時代前半の造営尺は0.295～0.296mと推定されており、上記6つの不等式のなかでは、②東西長180尺×⑤南北長97尺に最も高い妥当性をみとめうる。この規模は、従来採用してきた東西長181尺×南北長98尺の基壇を、東西・南北とも1尺ずつ減じた寸法であり、基壇の出が東西南北4面で均一になる。なお、数値上では①東西長179尺、⑥南北長98尺も採用不可能な値ではない。しかし、これらの寸法をとると、桁行方向と梁行方向で基壇の出が異なってしまう。また、①の東西長179尺を採用すると、「庇の出＋基壇の出」が30尺となって、第295次調査で検出した遺構との整合性に齟齬をきたす。以上から判断して、基壇規模は東西長180尺×南北長97尺に復原すべきと考える。この場合、基準尺は従来通り0.2954mとして問題ない。

階段の寸法

基壇と階段の関係　今回の再発掘調査により北面東、北面中央、南面の階段遺構を検出したが、東面階段の痕跡はまったく確認できなかった。したがって、東西両面の階段については、西面階段の成果に拠るほかない。北面については、東と中央の階段遺構が完掘されているが、地覆石の抜取痕跡を確認した北面西階段（幅17尺、出14尺、基準尺0.2954m）と同規模とみなせる。また、階段間の心心距離も34尺であり、「階段耳石の地覆心=柱心」という前提に従うならば、身舎の規模と柱位置はこれまでと変わらない。したがって、基壇規模の縮小は、基本的に「庇の出+基壇の出」の縮小を意味するものとなる。

南面階段の幅　一方、南面階段は幅38尺、出14尺と理解してきたが、幅・出とも修正する必要が生じている（図23）。南面階段の溝状遺構はすでに完掘されているが、基壇地覆石の据付掘形に比べればその幅は短く、これを階段地覆石抜取痕跡の最大幅とみなして、寸法を算出してみよう。なお、ここにいう階段の「幅」とは、両側の耳石直下に置いた地覆石間の心々距離をさす（図26下）。

南面階段西側の据付掘形は、最も外側となる西端のY座標が−18,595.60（X−145,234.00）、最も内側となる東端のY座標が−18,595.00（X−145,234.55）である（図19）。一方、東側の据付掘形は、最も内側となる西端のY座標が−18,584.50（X−145,235.55）、最も外側となる東端のY座標が−18,584.00（X−145,235.00）である。ここで、地覆石の幅を1.3尺として、基準尺をsmとおけば、以下の不等式が成立する（図26下）。

（10.50＋1.3s）m≦南面階段の幅≦（11.60−1.3s）m

これに階段幅＝36尺（36s）、37尺、38尺を代入する。

⑦階段幅36尺の場合　0.3025≦ s ≦0.3110

⑧階段幅37尺の場合　0.2941≦ s ≦0.3029

⑨階段幅38尺の場合　0.2861≦ s ≦0.2952

基壇規模の再検討によって採用された基準尺＝0.2954mと整合するのは、⑧階段幅37尺の場合である。

南面階段の出　基壇南面の地覆抜取痕跡が最も基壇側となる北端のX座標は−145,231.05（Y−18,589.85）、最も外側となる南端のX座標は−145,231.50（Y−18,589.60）である。一方、南面階段南端の地覆据付掘形が最も基壇側となる北端のX座標は−145,235.35（Y−18,591.00）、最も外側となる南端のX座標は−145,236.15（Y−18,589.90）である。ここで、地覆石の幅を1.3尺として基準尺をsmとおけば、以下の不等式が成立する。

（3.85＋1.3s）m≦階段の出≦（5.10−1.3s）m

これに階段の出＝15尺(15s)、16尺、17尺を代入する。

⑩階段の出15尺の場合　0.2810≦ s ≦0.3129

⑪階段の出16尺の場合　0.2619≦ s ≦0.2948

⑫階段の出17尺の場合　0.2452≦ s ≦0.2787

基準尺＝0.2954mと整合するのは、⑩階段の出15尺の場合である。以上みたように、南面階段は、幅が従来の38尺から37尺へ1尺縮まり、出が14尺から15尺へ1尺長くなった。他の階段と比べると、幅だけでなく、出も大きい。出の差異については、基壇周囲地表面との標高差として理解できるが、階段の勾配そのものが若干緩かっ

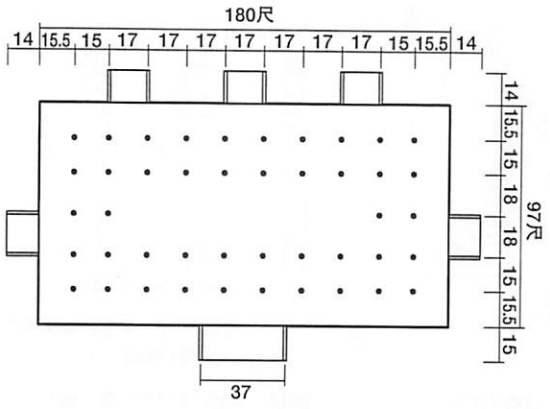


図27　柱配置案①

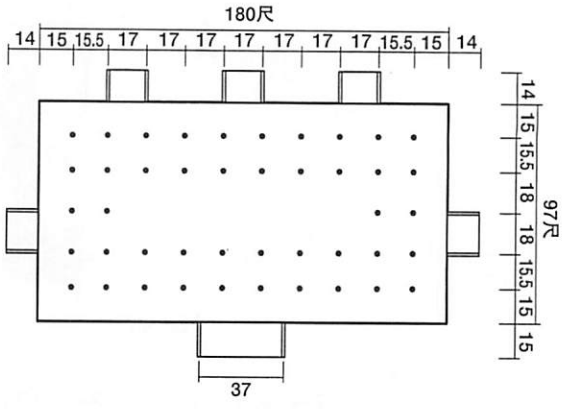


図28　柱配置案②

た可能性も考慮しておくべきだろう。

基壇四隅の座標と中軸線

以上の検討成果をまずは整理しておく。

(1) 基壇北面の遺構から判断すると、基壇の東西方位は東で北へ0° 20′ 50″ 前後の振れを示す。

(2) 基準尺は0.2954mを適用することに問題なく、その場合、基壇規模は東西180尺×南北97尺となる。

(3) 南面階段は幅37尺、出15尺となる。

(4) 北面階段はいずれも幅17尺、出14尺となる。

(5) 東面階段の遺構は西面階段と同規模で対称位置とみなさざるをえない。この場合、幅18尺、出14尺となる。

この成果をもとに、基壇が完全な長方形を呈するものとして、遺構図と復原平面図を重ね合わせると、振れは0° 20′ 50″ ではなく、0° 19′ 10″ から0° 19′ 30″ の間で遺構と復原基壇の整合をみる。この振れの原因については不明だが、基壇の東西長180尺が東端で北に1尺ずれていたとすれば、その振れは0° 19′ 24″ となって、0° 19′ 10″ ～0° 19′ 30″ におさまる。このデータを重視し、本稿では、基壇の振れを東で北に0° 19′ 24″ とみなしたい。この結果、基壇四隅の座標を以下のように決定した。

北西隅　X－145,202.90、Y－18,616.60

北東隅　X－145,202.60、Y－18,563.43

南西隅　X－145,231.55、Y－18,616.44

南東隅　X－145,231.25、Y－18,563.27

この場合、南北方向の中軸線は、

北面の中心点　X－145,202.75、Y－18,590.02

南面の中心点　X－145,231.40、Y－18,589.86

の2点をつなぐライン、東西方向の中軸線は、

西面の中心点　X－145,217.23、Y－18,616.52

東面の中心点　X－145,216.93、Y－18,563.35

の2点をつなぐラインとなる。

柱配置の再検討

すでに述べたように、基壇規模の縮小が影響するのは「庇の出+基壇の出」に限定される。これまでは第一次大極殿を移築したという記録の残る恭仁宮大極殿遺構の復原検討等により、庇の出15尺、基壇の出16尺という寸法を採用してきた。この場合、「庇の出+基壇の出」の総長は31尺となる。しかし、基壇規模は東西、南北とも1尺縮小した。したがって、大極殿の平面が対称性を有するならば、「庇の出+基壇の出」の総長は5寸短くなる。これについては、基壇の出を16尺から15.5尺に減じることによって、全体平面の修正が可能となる（図27）。

ただ、気になるのは15.5尺という寸法である。第一次大極殿院の築地回廊、あるいは第一次朝堂院地区の朝堂など平城宮造営当初の重要施設には、15.5尺という柱間寸法が多用されている。とすれば、第一次大極殿においても、15.5尺を庇の柱間寸法として採用した可能性を否定できない。この場合、庇の出が15.5尺、基壇の出が15尺となる（図28）。いずれにしても、基壇の出は従来の16尺より短くなり、三手先組物の軒下に納めることが可能となった。これまでは16尺という長さのために、基壇端が雨水に濡れやすいことを二重基壇説の拠り所の一つとしてきたが、二重基壇説そのものにも再考を促す検討成果がもたらされたといえるだろう。

基壇の周辺

ところで、2000年4月におこなった第313次調査では、第一次大極殿院閤門SB7801の基壇北西部分において、地覆石の外側に凝灰岩の敷石痕跡を検出した（時期は大極殿院創建時よりもわずかに遅れる）。この出土状況は、大極殿基壇の理解にヒントを与えてくれる。第一次大極殿の基壇地覆については、据付掘形が1.2～1.6mもの幅を有する二段掘りの溝状遺構であるにも拘わらず、地覆石は幅40cm程度の小振りなものであり、基壇側の深い掘込みに納まる。それでは、外側の浅い部分は何のために掘られたのだろうか。その意味を理解しかねていたのだが、SB7801の出土状況を参照し、外側の浅い掘込みを地覆の外側に並ぶ敷石（犬走り）のための地業と理解すれば、幅広で二段掘りとする溝状遺構を無理なく解釈できる。この問題については、来年度の年報において詳論する予定である。

（中島義晴・蓮沼麻衣子・浅川滋男）

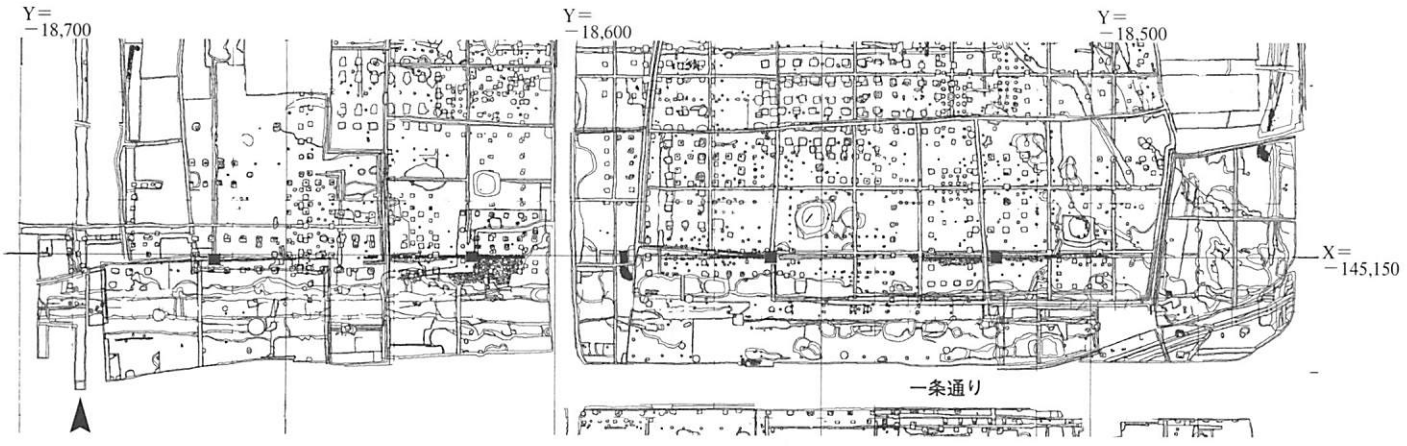


図29　第一次大極殿院北面築地回廊 再発掘調査区位置図

3．第一次大極殿院北面回廊再発掘

はじめに

平城宮第一次大極殿院地区を復原する基本構想に基づき、平城調査部ではその設計作業をすすめている。このためには復原する各遺構の正確な位置と規模を把握する必要があるが、1988年に宮内測量基準点の改測を行い、1989年度からは平城方位の使用を止め、国土方位へ転換したことにより、1988年以前と1989年以降の実測図を合成しようとすると、機械的に基準点の変位量分を修正しただけでは、そこに微妙なずれが発生する場合がある。そこで北面回廊について再発掘し、以前の実測図座標と現測量基準との関係を把握することとした。

変位量の確認方法

実測図上で位置を特定しやすい場所、ということで側石が残る回廊南雨落溝部分を１ヶ所につき２m角のトレンチとして４ヶ所設定した。西から１区（1959年の第２次）、２区(1974年の第81次中)、３区(1973年の第81次東)、４区（1961年の第7次調査区）とした。

変位量の確認方法であるが、１区と４区は当時の実測図が溝の側石のみを図化しており、溝内部の敷石や溝外側（大極殿院内部）の礫敷を省略していたので、この際改めて新しい水糸基準に従いレベルを含めて全体を実測し直した。この新規の実測図と古い実測図を重ね合わせて、双方の水糸の変位量を計測した。２区と３区については溝底石を含めて正確に図化されていたので、ここについては遺構面に新しい基準水糸を張り、この水糸位置を古い実測図に書き込み、水糸相互の変位量を測定した。レベルについても測り直し、新旧の差を確かめた。

結果

各地区について数カ所のX，Y，Hの座標値を測り、その平均値を求め、これから新旧座標値との差を算出した結果が表６のＡである。つぎに当時の発掘基準点を改正後の新成果に変換するとどうなるかであるが、この地区はいずれもNO.19基準点を基点とし、NO.20基準点を後視として、平城方位によるＢＭ（基準点）を発掘区近くに設け実測している。１区（第２次）と４区（第７次）、２区（第81次中）と３区（第81次東）はそれぞれ同じＢＭを使っている。この二つのＢＭ座標値を新しい基準点成果を用いて計算し直し、旧い基準点成果による座標値との差を求めた。その差は平城方位のふれが小さいこともあり、ふれの影響はなく、二つのＢＭ間で全く同じで、それはNO.19の新旧座標値差そのものであった。

さて、実測図上の変位量（表６のＡ）からＢＭ自体の変位量（表６のＢ）を引いた差が表６のＣである。１区のXとY、２区のYとHに問題があることがわかる。この４点についてはＢＭから遣方水糸を設営するまでの間の距離精度の問題、２区のHについてはなんらかの錯誤、などの原因が考えられる。その他の差は最大でも69㎜であり、測量誤差としてこの程度の差はやむを得ない。結局、問題があった４点については今回の確認に基づく修正を加え、その他についてはＢＭ自体の変位量を修正すればよい、ということが明らかになった。　（高瀬要一）

	１区（第２次）			２区（第81次中）			３区（第81次東）			４区（第７次）		
	X	Y	H	X	Y	H	X	Y	H	X	Y	H
A　変位置（旧座標値ー新座標値）	-0.21	+0.37	+0.11	-0.12	+0.06	+0.46	-0.16	+0.19	+0.11	-0.1	+0.29	+0.07
B　各調査BMの変位置	-0.091	+0.24	+0.107	-0.091	+0.24	+0.107	-0.091	+0.24	+0.107	-0.091	+0.24	+0.107
C　差（A－B）	-0.119	+0.13	+0.003	-0.029	-0.18	+0.353	-0.069	-0.05	+0.003	-0.009	+0.05	-0.037

表６　北面築地回廊座標値の新旧変位量

◆朱雀門隣接地の調査 ―第307次

はじめに　朱雀門地区案内所建設にかかわる発掘調査。トレンチの場所は、朱雀門にとりつく東側の南面大垣から２ｍ南の壇地で、朱雀門東端から15～25ｍ東の位置に、東西に長い10ｍ×６ｍの発掘区を設定した。

検出遺構　発掘区の東南部分は第130次南調査と重複した部分で、それはトレンチ全体の45％を占め、さらに発掘区中央にヒューム管が走り、それを残すように掘り下げたため、新たな調査部分の面積は約20m²となった。

検出した遺構は溝状遺構１条のみである。溝状遺構SD18170は東西方向にのびるもので、幅60㎝、深さ25㎝、東西３ｍ分を検出した。しかし、それは発掘区東半部には連続して続かない。溝内からは遺物が出土せず、時期は不明だが、溝自体は地山の灰色砂上で検出した。

これまでの平城宮南面大垣南の調査では、大垣本体の築地土部分のすぐ南に鋸歯状の掘込地業があり、大垣心から南12ｍで二条大路北側溝を検出するのが通例であり、その間に、建物の柱穴を検出することはほとんどない。今回の調査においても、柱穴は全く検出しなかった。また、南面大垣の犬走り部に接して雨落溝があるとしても、その想定位置はトレンチの北にあたり、今回検出した溝状遺構SD18170は、それに相当するものではない。

（山崎信二）

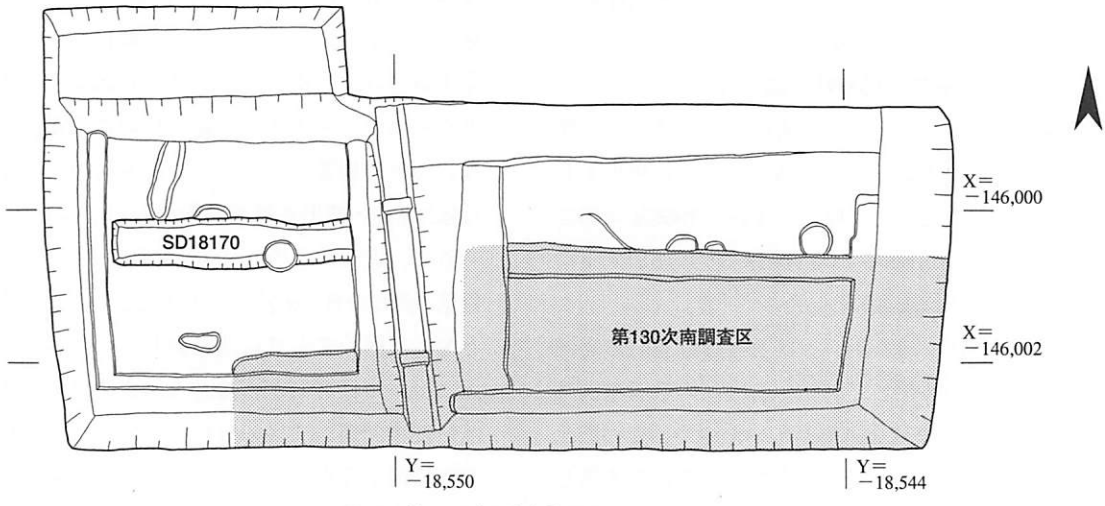


図30　第307次調査遺構平面図　1：80

表７　平城宮跡発掘調査部1999年度現場班編成表　（色文字は総担当者）

春		夏		秋		冬	
石橋　茂登	考古第１	次山　淳	考古第１	清水　重敦	遺　構	井上　和人	考古第１
川越　俊一	考古第２	高橋　克壽	考古第２	玉田　芳英	考古第２	金田　明大	考古第２
岩永　省三	考古第３	山崎　信二	考古第３	千田　剛道	考古第３	清野　孝之	考古第３
西山　和宏	遺　構	蓮沼麻衣子	遺　構	箱崎　和久	遺　構	浅川　滋男	遺　構
−	−	内田　和伸	計測修景	高瀬　要一	計測修景	中島　義晴	計測修景
舘野　和己	史　料	吉川　聡	史　料	山下信一郎	史　料	渡辺　晃宏	史　料

Ⅱ 平城京等の調査

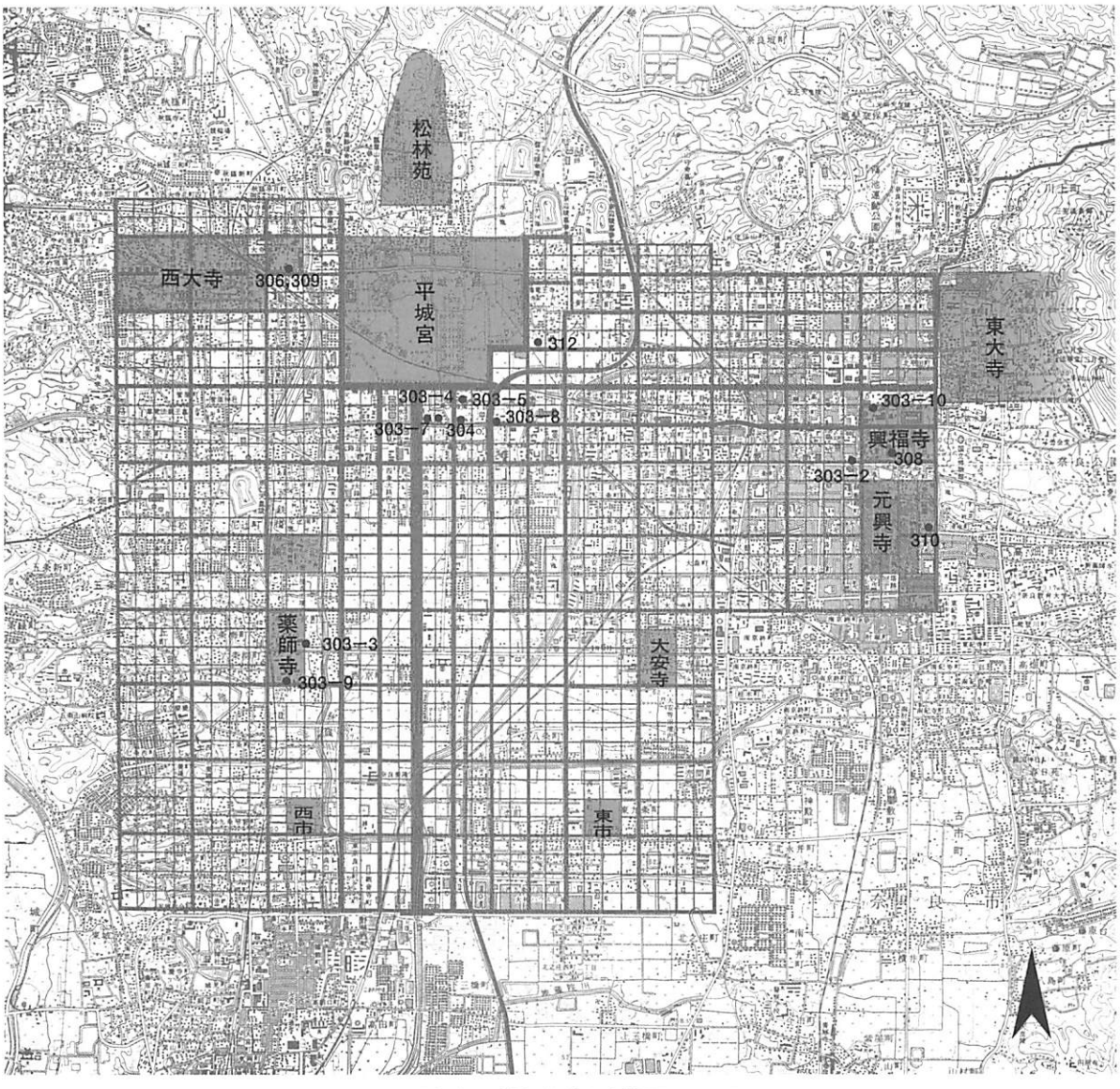


図31　1999年度　平城京内発掘調査位置図　1：50000

◆興福寺中金堂院回廊の調査 ―第308次

1．はじめに

本調査は、昨年度の中門跡（第297次）に引き続き、興福寺境内第１期整備事業による第２年次にあたる。発掘区は東西55m×南北19mの長方形平面に東西22m×南北20mを突出させたL字型をなし、中金堂と中門をむすぶ回廊の東北隅と、中金堂前庭部、さらには東僧房の南西端を含む面積約1,485m²について調査をおこなった(図32)。調査期間は1999年10月５日～2000年２月16日。なお、本調査の概要は、すでに『興福寺　第１期整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』（興福寺　2000）として報告しているので、ここでは事実記載を中心にその概要を述べたい。

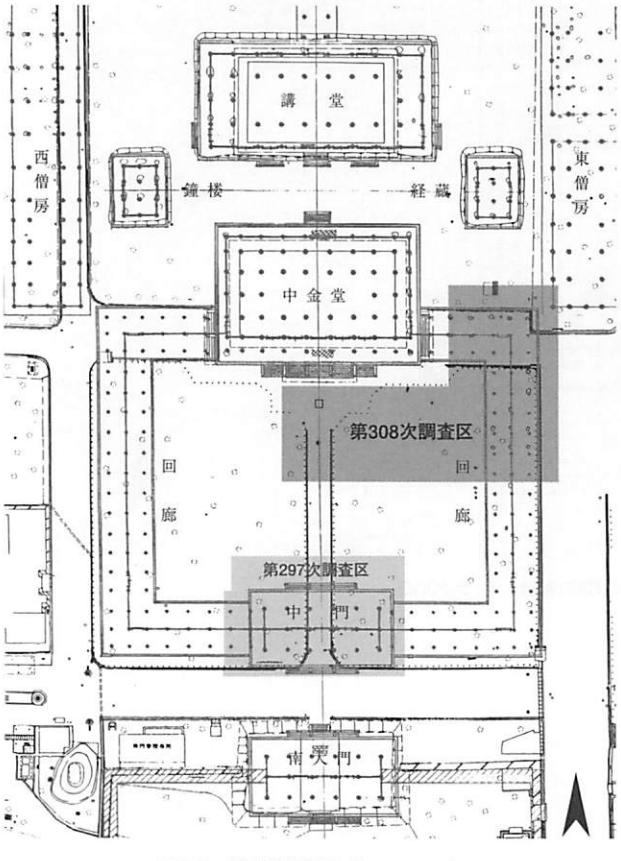


図32　調査区位置図（1：1500）

2．中金堂院の歴史と回廊の建築

山階寺を起源とする興福寺は、飛鳥の地に移って厩坂寺と号し、さらに和銅３年（710）の平城遷都によって、平城京左京三条七坊の地に建立された。平城京における興福寺の創建については明確でない。興福寺の名が歴史上はじめて現れるのは、『続日本紀』養老４年（720）10月17日条にみえる「始めて養民、造器および造興福寺仏殿の三司をおく」という記事だが、これを興福寺造営の端緒とは考えず、造営あるいはその計画が進んでいたときに、官寺として造営することが決まったことを示すものと理解する説が有力のようだ。中金堂と中門をむすぶ回廊で囲われた区画を中金堂院とよぶ。この一郭は永承元年（1046）の火災をはじめ、平安時代にこのほか３度（康平３年（1060）・永長元年（1096）・治承４年（1180））、鎌倉時代に２度（建治３年（1277）・嘉暦２年（1327））焼失し、そのたびごとに再建を重ねている。しかし、享保２年（1717）におきた７度目の火災の後は、回廊や中門は再建されなかった。

回廊もほぼ興福寺の創建当初頃に建立されたと考えられている。古記録や古絵図、地上での遺存礎石の観察などから、回廊は複廊で、その柱間を扉とした小門が各面二つずつ開くと考えられてきた。ところが、遺存礎石位置の測量成果を加えて興福寺の伽藍配置を復原した大岡實は、東西面回廊の桁行寸法が文献と整合しないのを、「後世柱間が変更された」ためと解釈しながらも、「将来の検討にまちたい」としていた。

ところで、東京国立博物館所蔵の『興福寺建築諸図』と一括された建築図面のなかに、回廊の平面図と梁行断面図がある。これは享保焼失前の実測図、つまり嘉暦２年の焼失後に再興された回廊を描いたものである。享保焼失後、回廊は再建されないのであるから、調査では少なくともこの図と一致する遺構の検出が期待された。

3．検出した主な遺構

中金堂院回廊

回廊付近は、中門東半下部で発見した谷地形が前庭部東北端方向にのび、北面回廊付近ではバラス混じりの地山が現れる。東面回廊基壇は、この谷を埋めた整地土上につくられており、版築埋土の状況から創建当初のものと解釈した。また当初版築の上層には、部分的に基壇改修と考えられる土層も確認できる。一方、北面回廊の基壇は地山削り出しとする。

礎石は基壇上に16石残り、他の17ヶ所では抜取穴を検出した。礎石および抜取穴の周囲には平面が約1.4～2.0mの方形を呈する据付穴があり、深皿状の掘り込み最下部に人頭大の根石を入れ、層状をなす地業を施しながら礎石を据えている。据付穴は大部分の箇所で1回しかなく、礎石・基壇ともにほぼ創建当初のまま使用してきたと考えてよい。礎石は径0.9～1.2mほどの自然石（三笠安山岩が多い）で、現状では円形の造り出しや出枘の加工を施した痕跡はみられない。礎石上面の標高は、東面回廊南端部で95.6m、北面回廊西端部で95.9mである。

SC7500　東面回廊。現地表下約25cmで遺構検出面である創建版築の上面に達する。東側の基壇外装・雨落溝は大部分が破壊されているが、西側にはよく残る。東面回廊は桁行7間分（隅部を含まず）を検出し、桁行3.77m（12.7尺；奈良尺。以下同）、梁行3.55m（12尺）の複廊である。北面回廊と交差する隅部分の柱間寸法はすべて12尺。棟通りには幅23～28cmほどの流紋岩質凝灰角レキ岩（二上山～ドンズルボー産。以下、凝灰岩Aと呼称）製地覆石を2列に並べており（SX7501）、間仕切り最下部を構成する地覆と地長押を受けるものと考えられる。一方、回廊基壇西側では基壇地覆石列SX7502と玉石組雨落溝SD7503、雨落溝外側の玉石敷きSX7504を検出した。SX7502は流紋岩質溶結凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産。以下、凝灰岩Bと呼称）製の切石で羽目石を載せる仕口などはみられない。SD7503は、SX7502を東の側石として溝底に河原石を2石分敷き、西の側石にやや大きめの玉石をならべた溝で、底をSX7502天端よりも約5cmほど低くする。SX7504はSD7503の西側に約90cm幅で玉石を4～5石分ならべた石敷きで、西端の石は面をそろえて見切りとしている。これらは南面回廊の調査成果とほぼ同じ

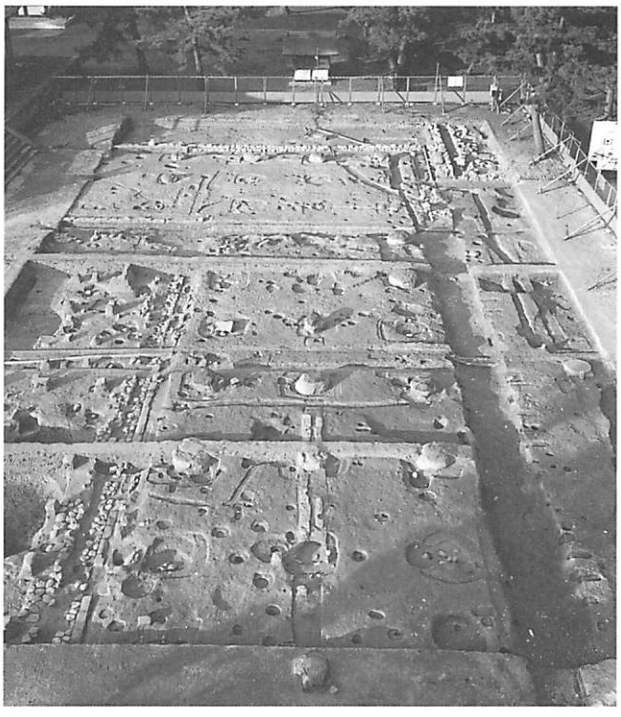


図33　中金堂院回廊（南から）

状況であり、断面の観察でも創建当初まで遡り得ず、古い時期の改修と考えられる。ただし、後述するように玉石敷きをはずして足場をたて、足場を撤去後、再び石を敷いた部分もあり、表面からは確認できない改修があるようだ。東面回廊東側でも部分的に凝灰岩B製の基壇地覆石列SX7506と玉石組雨落溝SD7507を検出した。溝幅は42～45cm。雨落溝外側には回廊内にみられたような玉石敷きはないが、溝とほぼ同時期の造作とみられるバラス敷きSX7508がある。以上から東面回廊の基壇の出は約1.8m（6.2尺）、軒の出は2.1m（7尺）に復原できる。

SC7510　北面回廊。現地表下約10cmで遺構検出面である地山に達する。標高の最も高いのは中金堂に近い西端部で約95.5m。南北両側の基壇外装は現代の排水溝で破壊されているが、北側には玉石組雨落溝SD7516が残る。北面回廊は桁行2間分（隅部を含まず）を検出し、柱間寸法は、桁行4.16m（14尺）、梁行3.55m（12尺）。一部で棟通り地覆石の残がいと考えられる凝灰岩A片群SX7511を検出した。北雨落溝SD7516は、南北両側石・底石とも人頭大の河原石でつくられ、溝幅は約45cm。東行して東面回廊の東雨落溝につながるが、さらに延長して東僧房の西雨落溝にも連絡している。西端部は近世の遺構と考えられる花崗岩石列（SX7517）が側石を破壊して並ぶ。

SD7516の据付溝には瓦片や凝灰岩A片を含み、創建当初はおそらく凝灰岩A製の雨落溝であろう。また、基壇南辺部には中世の遺構と考えられる角板状の凝灰岩B列SX7518があるが、位置的・高さ的にみて基壇外装や敷石とは考えにくい。

SS7505・7515　抜取穴に濃赤色の焼土を多量に含む足場。基壇上だけでなく雨落溝付近にもあり、玉石敷きSX7504の下からも検出した。SS7505は東面回廊に、SS7515は北面回廊にともなう足場である。

SX7520　東面回廊の基壇上にある小穴。土師器2枚が重ねられた状態で出土し、土師器の年代観から、嘉暦焼失後の地鎮遺構と考えられる。

また、回廊隅部にある斜行溝SD7525からは12世紀の土師器が出土した。この斜行溝の性格は不明だが、治承焼失後の基壇改修時における排水溝と考えておく。

中金堂前庭部

前庭部の旧地形は、中金堂院中軸線付近はほぼ平坦なものの、東面回廊に近づくにつれ徐々に地山が下がり、谷地形となる。遺構は中軸線付近においては地山直上の整地土面で検出し、そのほかは地山上または谷地形を埋めた整地土上で検出した。

SB7530～7536　仮設建物。SB7530は前庭部やや内側にある桁行9間以上×梁行2間の掘立柱南北棟建物。柱間寸法は桁行1.9m、梁行2.8m。柱穴から12世紀の土師器皿小片が出土した。SB7531～7533 は東面回廊に内接する位置に建つ桁行10間以上×梁行4間の南北棟建物。SB7531は掘立柱建物で、柱位置をほぼ同じくして掘立柱建物SB7532に建て替える。これらの柱穴からは12～13世紀の土師器皿が出土した。また、この2棟と柱位置を同じくする礎石建物SB7533がこの上層に建つ。SB7533の礎石据付掘形からは14世紀以降の瓦質土器が出土した。SB7531～7533 は、いずれも身舎の梁行が2間で東西2面に庇がつく。柱間寸法は桁行約2.8m、梁行約1.9m、庇の出約2.1m。またSB7531～7533と重複する位置に建つSB7534は、桁行9間以上×梁行4間（身舎梁行2間＋東西2面庇）の掘立柱南北棟建物。桁行2.0～2.7m、梁行2.1m。柱穴から14～15世紀の土師器皿が出土した。さらにこれらと重複する位置に建つSB7535は、桁行7間×梁行3間（身舎梁行2間＋西庇）の掘立柱南北棟建物で、東庇がつく可能性もある。柱間寸法は桁行・梁行とも約2.1mで、西庇の出が約1.7m。柱穴は小ぶりでSB7530～7535のうちでは、もっとも新しい建物である。SB7536は前庭部東端にある桁行6間以上×梁行2間の礎石建南北棟建物。桁行・梁行ともに柱間約1.95m。SB7536は明治以降の土坑SK7562よりも新しい。

SX7550　調査区北西部（中金堂南）にある玉石敷きの舗装。南端に見切りとなる石をならべており、これ以上南には続かない。石敷きの東西幅は不明なものの、現時点では中金堂基壇の前面だけに存在すると考えておく。断面観察の結果、創建当初につくられたものが部分的に改修をくり返しながら存続してきたようである。

SA7540　石敷きSX7550の約1m南に位置する柱間約1.5m（5尺）の掘立柱東西塀。石敷き東端以東には続かないため、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

図34　北面回廊と基壇上の遺構（東から）

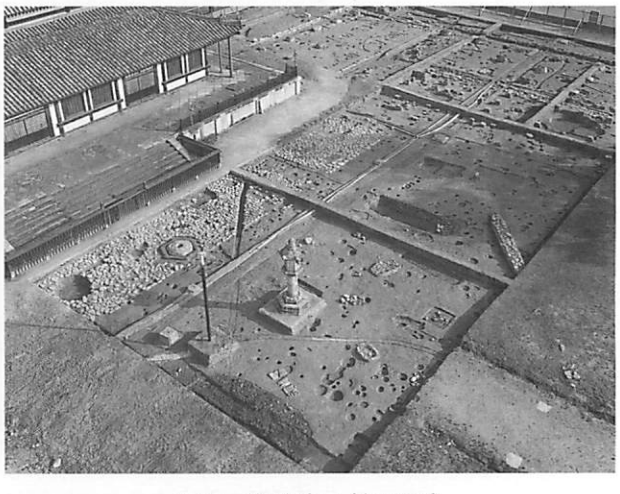


図35　前庭部全景（南西から）

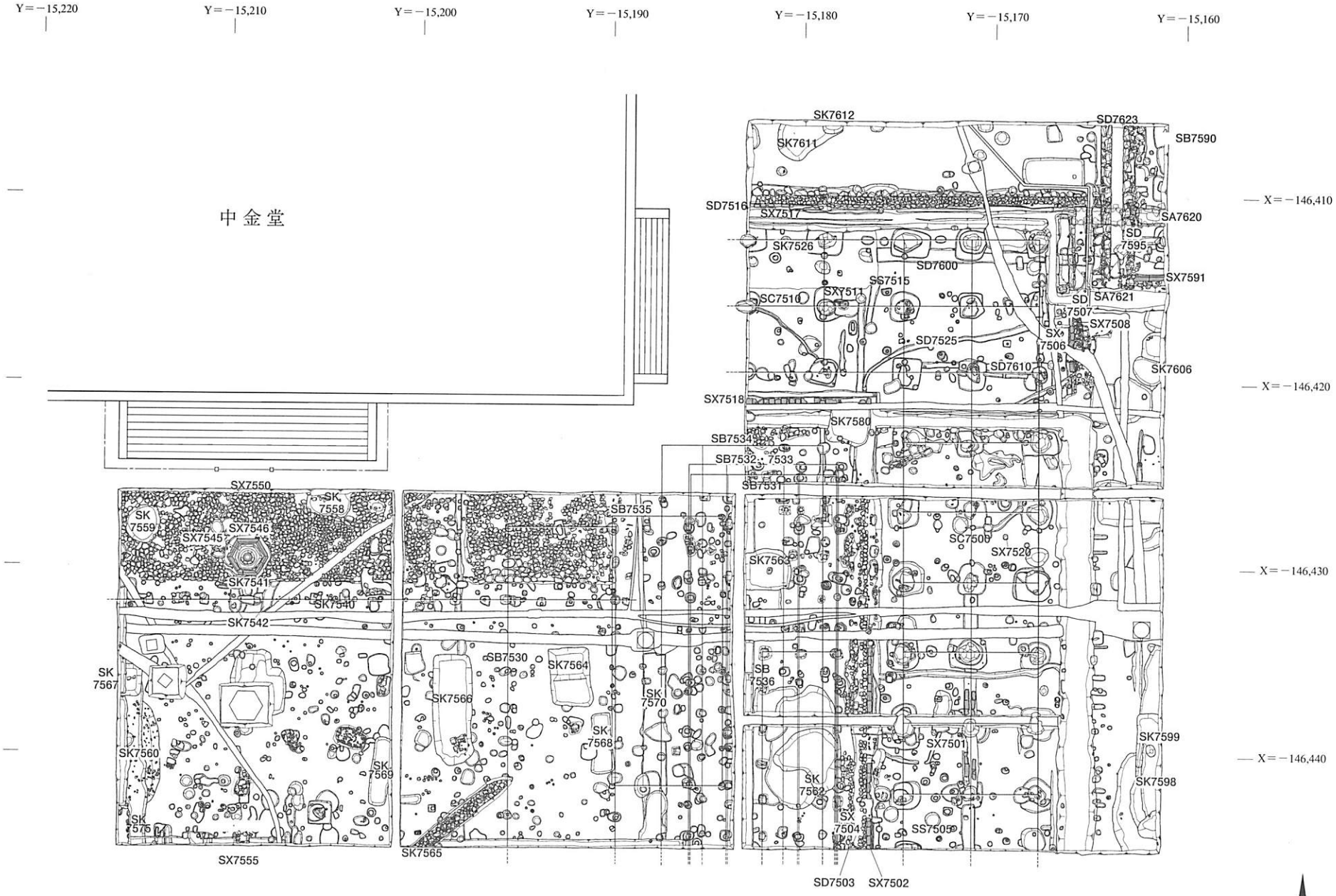


図36　第308次調査遺構平面図（1：300、中金堂基壇の位置は「興福寺境内現況図」（1995年作成）による）

SX7545　中金堂院の中軸線上、石敷きのなかにある花崗岩製の燈籠台石（図37）。径は約1.4m。磨滅しているものの、直径約95cm、八弁の蓮弁状繰形をもつ突出部があり、その中央には竿石をさす直径36cm、深さ50cmほどの円形の穴を穿つ。台石の周囲には、幅25cm、長さ1.0m、厚さ12cmほどの地覆石状に加工した流紋岩質凝灰岩（奈良市地獄谷周辺産）を六角形にならべている（SX7546）。断面観察の結果、台石は平安時代頃に据え替えられたもので、SX7546はそれより新しい造作であることが判明した。また、台石には蓮弁外に現状とはまったく関係のない直線的な段差が4箇所残存し、それをつなぐと八角形に復原できるので、もともとは八角形に組んだ縁石で台石を固めていたのかもしれない。

また調査区南端の中軸線上にも、近世頃につくられた小燈籠の基礎と考えられる拳大の石組みSX7555がある。

SK7560　調査区西端部にある焼土・炭片を多量に含む瓦溜土坑。創建期の軒瓦のほか緑釉水波文塼（口絵）が出土した。出土遺物の年代観から永承元年焼失後の塵芥処理用土坑と考えられる。このほか前庭部では、大土坑（SK7564・7566～7569）や斜行石組み（SX7565）などを検出したが、その多くは明治以後の遺構である。

その他

SD7600　北面回廊北側柱筋のやや南にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝（図34）。幅は約60～80cm、深さは部分的に異なり、深いところでは遺構検出面から30cmほど残る。埋土の状況から人工的に埋められた様相を呈する。断面観察の結果、回廊建立当初の礎石据付穴より古いことが判明した。西方では回廊基壇造成にともなう地山削平によって溝も削られている。

SD7610　北面回廊南側柱筋のやや北にあって地山を掘り込む素掘りの東西溝。幅は約25～40cmでごく浅く、東と西では削平されている。これも回廊の据付穴より古い。SD7600とこのSD7610の2条の東西溝は溝幅の違いこそあれ平行しており、心心距離は約5.94m（20尺）をはかる。

SB7590　東僧房。調査区東北隅で東僧房の礎石を2石検出した。北の礎石は当初位置を保つが、南の礎石は北面回廊北側柱筋とそろえるものの、近代ごろにほぼ同位置で据えなおされている。基壇は地山の削り出しで版築土は確認できない。基壇南側には、創建当初のものとみられる幅32cm、厚さ15cmの凝灰岩A製地覆石列SX7591がある。上面には羽目石ののる仕口を施す。

SA7620・7621　明治21年（1891）ごろに設けられた築地塀。基底部の大石と、瓦が充填された積み土を検出した。調査区東端から西へ約5.2mのびたあと、南に折れて約4.0mで切れる。昭和36年（1961）に取り壊されて基底部だけが残ったものである。

SD7623　東僧房礎石の西2.6mに位置する石組みの南北溝。享保焼失後の遺構で、東僧房とは共存しない。

SK7611　調査区北端、北面回廊SC7510の北方にある瓦廃棄土坑。出土瓦から、元慶2年（878）に焼失した僧房にともなう廃棄土坑の可能性が高い。

SK7606　東僧房の南にある大土坑。治承4年（1180）の火災による廃棄土坑と考えられる。（箱崎和久）

図38　東僧房付近の遺構（南西から）

図37　燈籠台石とその周辺遺構（西から）

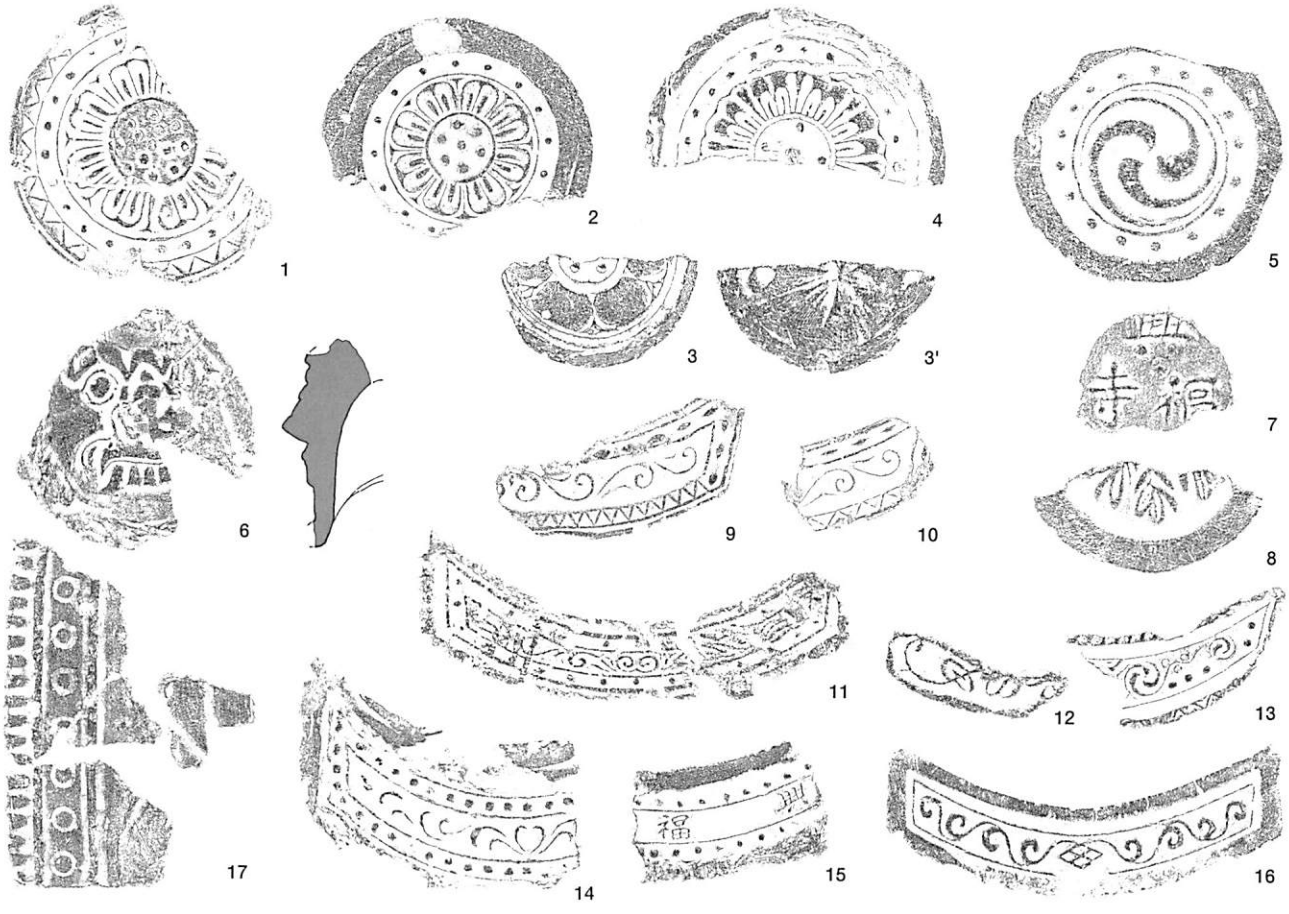


図39　第308次調査出土の軒瓦と鬼瓦　1：5

4．出土遺物

瓦塼類

本調査では多種多量の瓦塼類が出土した。軒丸瓦214点、軒平瓦362点、丸瓦約15000点、平瓦約17000点、鬼瓦3点、隅木蓋瓦1点、緑釉水波文塼24点などが出土し、創建期から江戸時代におよぶ（図39）。

軒丸瓦　創建期の興福寺式6301は34点出土し、うち6301Aが7点、6301D（1）が5点。創建期の瓦として久米寺式6271Aもある。このほか奈良時代の瓦に6235A、6201Aなどがある。2･3は平安中期の瓦。3には、瓦当裏面に布しぼり目を残す（3'）。出雲国分寺や平安宮内裏に類例があり、出雲産か。照合を要す。4は永承の火災以降～治承の兵火以前の瓦。5の三巴文軒丸瓦は14世紀代。6は鬼面文軒丸瓦（口絵）。鼻を高く表現する。他に類例が乏しく時期不明だが、平安時代のものか。7は寺名を表す中世の文字文瓦。瓦当面中央に菊花状の刻印を押す。外区･周縁が剥離。8は桐文軒丸瓦。五七の桐を飾る桃山期のもので、文様は2種ある。桐文軒丸瓦は6点出土し、うち3点に金箔を残す（口絵）。直径は約15cm。大和国での金箔瓦の出土ははじめて。

軒平瓦　興福寺式6671は38点出土し、うち6671A（9）が28点、6671E（10）が5点ある。11は平安前期の瓦。12は奈良市北小路遺跡出土品（『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅴ』）との同笵を確認。13は薬師寺304（『薬師寺発掘調査報告』）とは部位が異なるが同笵であろう。14は養和再建期のもの。以上は平安後期の瓦。15は寺名を表す文字文軒平瓦。16は四菱を中心飾りにもつ。ともに中世の瓦。

鬼瓦　17は鬼面文鬼瓦。鬼面の周縁に珠文帯と輻状文をめぐらす。厚さ約4cm。9世紀とされる平安宮内裏から出土した、周縁を三重にかざる鬼瓦（山本忠尚『鬼瓦』）の簡略化した表現とみられ、天徳4年（960）罹災後の四天王寺講堂再建時に使われたとされる一角鬼瓦（『四天王寺』）とも共通点があり、平安時代のものと推定しておく。

緑釉水波文塼　半肉彫りで水波文をあらわし、緑釉をかけた塼（口絵）。厚さ約1.5cm。全形は不明、隅は直角をなすもの以外に70度前後、110度前後のものを含む。火を受け釉の剥落が著しい。瓦溜SK7560から24点出土。出土状況から創建中金堂に使用されていたものとみられる。過去に東金堂から出土した緑釉水波文塼に比べ、厚さが半分ほどの薄い作りである。　（千田剛道）

金属製品・銭貨

金属製品　銅製品には、風鐸、飾金具、垂木先金具、歩瑶、鋲などがある。

風鐸は、中金堂前面の石敷きSX7550上の遺物包含層から破砕した状態で出土した。小片も含めて18点になる。全体の形状は不明であるが、「乳の間」とそれを区画する突線のありかたから、鐸身の一部と推定される。厚さは4.0㎜～5.5㎜で、幅３㎜、高さ２㎜の突線による１条の縦線と２条の横線により袈裟襷を構成する。区画された「乳の間」には縦３段以上の乳が配置される。乳は径8.5㎜、高さ８㎜の円筒形。裾部は、花弁状に大きく外反して広がるものと思われ、花弁の１単位は幅25㎝前後になる。裾端部は「く」の字に外方に屈折し、厚さ４㎜ほどの縁をつくる。出土位置からみて中金堂東南隅に懸けられていた可能性がある。

この他の銅製品として、厚さ2.2～3.0㎜の平板な飾金具片がある（図40）。蕨手状唐草文の主葉と子葉が相互に接する箇所の断片である。茎の幅９～11㎜。表面には文様を縁取る線彫がおこなわれ、透彫の側縁は、表面から裏面に開きぎみに落とす。遺物包含層出土。

このような金具の類例に、奈良県大官大寺出土飾金具、大安寺出土飾金具がある。大官大寺例は、1974年の第１次調査で金堂（当初、講堂に比定されていた）基壇の東北隅および東南隅から出土した。出土位置と点数から隅木端の飾金具と考えられている。縦約42㎝、横約33㎝。厚さ２㎜の銅板の片面に文様を線彫し、その空間を透かしたものである（『年報1975』）。本例を重ね合わせると、唐草の茎の幅はほぼ一致し、同様の構成を取り巻きの強さ、向きの共通する部分が４箇所ある。本例の方が銅板が厚いこと、唐草の巻きがわずかに緩く、子葉部分も大きいため、文様構成自体がわずかに大きくなる。

このほか鉄製品として、断片も含めると100点を超す多量の釘のほか、鏃、火打金などが出土した。

銭貨　表土からの出土が多く、寛永通宝20枚以上を含む近世以降のもの29枚が出土した。

その他　中金堂院の罹災を示す遺物として、火熱を受けて硬化した壁土片がSK7526などから出土した。上塗と中塗・下塗に相当する壁構造を確認できるものもある。木製品はわずかであるが、SK7560からは部材片が出土している。１辺が約９㎝の角材で、長さ23.5㎝。樹種はスギ。このほか、石製品に砥石がある。　（次山　淳）

土　器

本調査では、整理箱で約20箱ぶんの土器が出土した。出土土器には土師器、須恵器、二彩・緑釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、および陶磁器があり、年代は奈良時代～近代にわたる。ここでは、遺構から出土した土器の概略を記すこととする。

回廊では、北面回廊南側柱と東面回廊東側柱の、各１基の礎石据付穴からそれぞれ土師器皿が出土した。２基ともに礎石の据え替えがあり、埋土には焼土を含む。土器はいずれも14世紀のもので、嘉暦焼失後の復興にともなうものと考えられる。

東面回廊基壇上の地鎮遺構SX7520からは、14世紀の土師器皿が出土した。嘉暦焼失後の再建時に基壇上に埋納したものであろう。また、北面回廊基壇上の斜行溝SD7525からは、多数の土師器皿が出土した。12世紀代のもので、治承焼失後の再建時に比定できる。

東面回廊西雨落溝SD7503の凝灰岩製側石の抜取溝からは、14世紀後半以降の瓦質土器の風炉が出土した。嘉暦焼失後の復興時のものであろう。また、中金堂前庭部にある仮設建物の柱穴からも、土師器皿や瓦質土器が出土している。それらの年代は、SB7531・7532は12～13世紀頃、SB7534は14～15世紀、SB7530は12世紀頃、SB7533は14世紀以降である。　（玉田芳英）

図40　銅製飾金具片（１：２）および大官大寺出土隅木端金具復原図（１：６）アミ部分は対応位置

5．まとめ

回廊の形態を解明　中金堂院回廊は、ほぼ創建当初の形態をとどめていることが判明した。とくに、礎石の大部分は創建当初から使われており、基壇外装や雨落溝もほぼ当初位置を守って改修されてきている。なお、判明した中金堂院回廊北東部の規模は、東京国立博物館蔵『興福寺建築諸図』所収の回廊平面図（享保焼失以前の実測図）にのせる寸法とほぼ一致し、この平面図が中金堂院回廊の創建形態を表している可能性はきわめて大きい。

中金堂院前庭部の様相を解明　中金堂の南に石敷きの舗装を発見した。中金堂前だけを石敷きとする例はめずらしく、前庭部の使用方法や空間構成などについて、新たな資料を提供したといえる。また、前庭部で仮設建物を数棟を発見した。これらは、位置的・規模的にみても『春日社寺曼荼羅』（鎌倉時代：図41；個人蔵『古図にみる日本の建築』至文堂　1989より）に描かれた中軸線を挟んで対称の位置にある南北棟建物にきわめて類似する。このほか『造興福寺記』（永承元年（1046）火災後の復興記録）や『養和元年記』（治承４年（1180）火災後の復興記録）にみえる幄舎の記述、さらには享保14年『興福寺伽藍再建事始地曳并法会之記』所収の『興福寺伽藍地曳之図』（享保２年（1717）火災後の復興記録）にも同様の幄舎が描かれており、本調査で検出したこれらの建物も、このような儀式に用いる仮設の幄舎となる可能性が大きい。回廊内側では、上記の建物以外にも幄舎となるような掘立柱穴や礎石があり、復興の際は、ほぼ毎回同様な建物を建てて儀式をおこなっていたと推察される。なお『養和元年記』によれば、このような幄舎は竹柱で建てられ幔で覆われていた。このように、文献や絵画資料などから幄舎の存在は推定できたものの、発掘調査で確認した意義は大きいといえるだろう。

東僧房の一部を検出　部分的ながら、東僧房の礎石と基壇地覆石を検出した。このうち基壇地覆石は、いわゆる二上山産凝灰岩（遺構解説では凝灰岩Aとした）でつくられており、回廊部分ではみられなかった創建当初の基壇外装を残している。また、本調査によって東僧房付近の遺構も良好な遺存状況にあることが判明した。

金箔瓦の出土　出土遺物で最も注目すべきものは、大和国では初例、寺院跡からでも全国２例目となった金箔付き軒丸瓦であろう。文様から豊臣家との関係は疑いなく、『多聞院日記』の記載などから、秀吉が寄進した瓦とする見解もある。しかし、それを論証するには、金箔瓦研究のなかでこの軒丸瓦の位置づけを明確にすることが先決であり、その作業は別の機会に譲りたい。

図41　『春日社寺曼荼羅』（興福寺部分）

回廊造営以前の溝を発見　回廊造営以前の平行する２条の東西溝を発見した。位置的な検討から、この溝は平城京三条条間南小路の南北両側溝に相当する可能性がある。これは外京の条坊復原だけでなく、興福寺の創建年代にもかかわる非常に重要な発見である。興福寺の創建には藤原不比等が関与し、諸記録では平城京遷都当初とするものの、元興寺や薬師寺・大安寺の例からみて和銅末～養老頃と理解されている。一方、溝の心心間距離5.94mは小尺の20尺とみてよく、和銅６年（713）２月の度量衡改正以後に造られたと考えられる。すると、回廊の造営ひいては興福寺の創建がそれ以降であると理解せざるを得ない。このため、養老４年（720）８月の不比等没後、10月におかれた「造興福寺仏殿司」が興福寺造営の端緒とも考えられるが、すると今度は、不比等がどの程度興福寺造営に関与したのかが問題となってくる。今後の議論の展開を期待したい。　（箱崎）

◆興福寺園地・宝掌院の調査
―第303-2次・第303-10次

1.興福寺園地の調査

はじめに

本調査地は、現・三条通りと小西通りの交差点から北に85m入った小西通り東側に位置し、東西に長い敷地である。左京三条六坊十二・十三坪にあたる。十三～十六坪の4坪は、奈良時代には興福寺西門外の旧境内地西辺で、興福寺の菓園・園地が置かれていたとされる。調査地内には東六坊坊間東小路や中近世の町屋遺構などが想定できた。1998年の第293-6次調査では当調査地の南方約12mの地点を調査し、小穴・土坑・井戸・溝など中世の遺構を検出している。今回は店舗新築に伴う調査で、第293-6次調査と同様な遺構の存在を想定し、東西43m、南北1.7m、約73m²の調査区を設定した。調査期間は1999年4月19日から4月29日。

検出遺構

調査地は西下がりの緩斜面をなす。現地表の標高は当端で81.75m、西端で80.45mである。基本層序は上から最近の置き土、近代の攪乱層、土器片の多い包含層があり、現地表下0.85～1.3mで地山に達する。地山は東で高く(80.65m)、2.5%勾配で西に下がる緩斜面をなす。地山は西端から7mまでが青灰粘土混砂質土、それ以東ではその上に乗るバラス混黄灰粘質土である。遺構は遺物包含層を除去した地山面で検出し、中世以降の柱穴・土坑・井戸が多い。以下、主要なもののみ記述する。

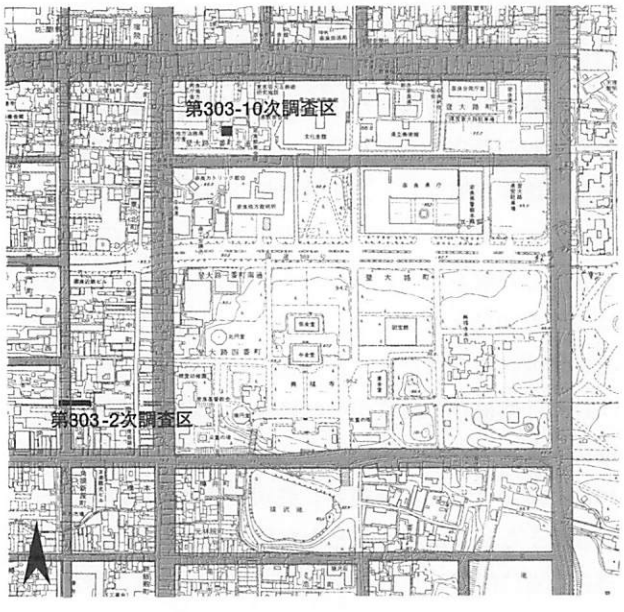


図42　調査区位置図　1：10000

SD7705　調査区西端から東へ6mの地点を肩とする、西に下がる落ちである。第293−6次調査地でも同様な斜面を検出しているが、遺構番号を与えていない。当調査地のSD7705の肩は南で東に振れるが、その延長線上に第293−6次調査区の傾斜の肩があることから、両者は一連の遺構で、大規模な溝となる可能性が強い。幅は6m以上、深さ60cmである。下半に灰黒粘土、上半に暗灰粘質土が堆積する。なお第293−6次調査区ではSD7705の底で、幅1.5m以上、深さ35cmの溝SD7450を検出したが、当調査区には及んでいない。SD7450からは14～15世紀の遺物が出土しており、SD7705はそれ以降である。

SD7706　SD7705に流れ込む東西溝で、SD7705の東斜面に掘り込んである。調査区南壁沿いに長さ3.2m分検出し、南肩は調査区外に出る。幅は35cm以上、深さ15cm。

SA7707・7708　小柱穴が並ぶ。建物の可能性はあるが、塀として処理する。SA7707は柱穴径30cmで柱間2m、SA7708はと柱穴径20cmで柱間1.1mと小規模である。中世以降の遺構。他にも小柱穴多数があるがまとまらない。

出土遺物

中近世の土器が6箱、平安時代の軒丸瓦2点、鎌倉時代の軒平瓦1点が出土した。

まとめ

奈良時代の遺構、とくに東六坊坊間東小路に関わる遺構は今回も検出できなかった。

既知の東四坊大路心座標（X＝−146,865.00、Y＝−16,457.20）を用い、当地周辺における条坊の振れを0°

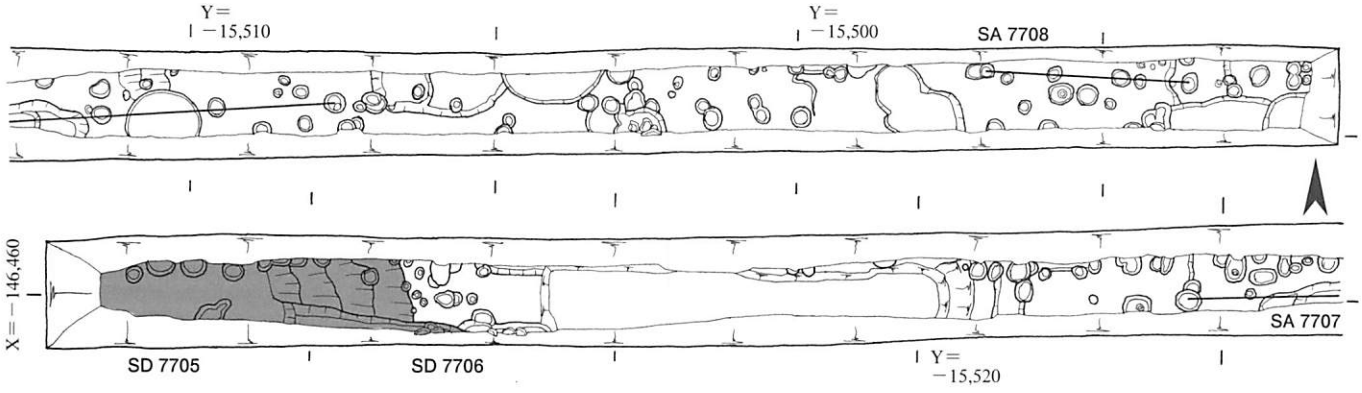


図43　第303-2次調査遺構平面図　1：500

09′ 11″と仮定して、当調査地における坊間東小路の心を求めると、X＝−146,460.00、Y＝−15,527.48（①）となり、調査区西端から東へ6.9mの位置となる。路幅を側溝心々で20尺とすれば、東側溝位置には遺構が無く、西側溝位置はSD7705の東斜面下端に当たる。第293−6次調査の報告では、ほぼこれと同じ計算を行い、SD7450が古代の西側溝を踏襲した中世の溝である可能性を指摘しつつも、小西通りが遺存地割に由来するなら、SD7450が東側溝の後裔となる可能性も指摘した。残念ながら当調査でも新たな知見は得られなかったが、別の数値を用いた計算を試みた。

東大寺転害門前東七坊大路心座標（X＝−145,480.20、Y＝−14,872.96）を用い、条坊の振れを0° 09′ 11″とすれば、東小路心のY＝−15,535.22（②）となり、調査区西端から85cm、条坊の振れを0° 06′ 43″とすれば、東小路心のY＝−15,535.92（③）となり、調査区西端から155cmの位置となる。いずれの場合も、東側溝がSD7705の底の位置に来る。東大寺転害門前を起点にすれば、条坊の振れを0° 20′ という外京域では過大な数値を用いても、東小路心のY＝−15,532.71（④）となり、①より5.23mも西に寄るのである。付近の遺存地割のあり方からすれば、①よりも②③の方が妥当、すなわち小西通りを東六坊坊間東小路の後裔と見た方が良い。もちろん近辺の今後の調査で検証する必要があるのは言うまでもない。なお、条坊関係のデータは『興福寺　第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』を参照した。　（岩永省三）

2．興福寺宝掌院跡の調査

はじめに

本調査地は興福寺旧境内北西隅の左京三条七坊一坪にあたる。台地の端に位置し、西側は比高3m余りの崖となる。1708年（宝永5）の「興福寺伽藍春日社境内絵図」によると、近世には興福寺塔頭宝掌院の敷地で、今回は同絵図に描かれた宝掌院本堂の裏手に相当する部分の東西6.5m、南北4.5mの約29m²を調査した。

検出遺構と出土遺物

基本層序は表土、暗褐土、茶褐色粘質土を経て、現地表面から40〜60cmで堅い礫混じり橙褐色粘質土の地山に達する。遺構は基本的に地山面（標高88.3〜88.4m）で検出した。調査期間は2000年2月14日から2月24日。

SE7770は北西隅で検出した直径約2.1mの素掘りの井戸。遺構面から2.5m余り掘り下げたが、崩落の危険のため完掘は断念した。井戸の周囲には直径は30cm程度、深さ30〜40cmの小穴が点在するがまとまらない。石列SX7760は包含層上で検出したもので、近世以降の庭に伴う施設か。古代に関わる遺構はない。

出土した瓦塼類には軒丸瓦5点（中世巴3点・近世巴1点・型式不明1点）、軒平瓦2点（近世）の他、丸瓦21点5.1kg、平瓦98点16.6kg、塼1点0.9kgがある。土器は中近世のかわらけが遺物整理箱2箱分、また北宋の1023年初鋳の天聖元宝1点が出土した。ほとんどは遺物包含層からの出土である。東に隣接する清浄院の井戸からは荒神祓に関わる墨書土器が多量に出土している（奈良県立橿原考古学研究所『奈良市興福寺清浄院跡発掘調査概報』1991年）が、今回は完掘できなかったこともあり、SE7770に顕著な遺物はない。　（渡辺晃宏）

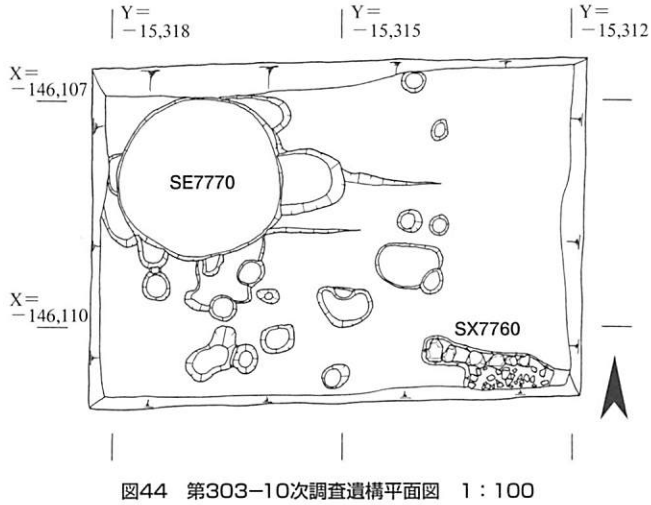


図44　第303−10次調査遺構平面図　1：100

◆旧大乗院庭園の調査 ―第310次

1．はじめに

(財)日本ナショナルトラストによる大乗院庭園整備のための事前調査である。大乗院庭園の調査は昨年度までに園池南岸から東岸、北岸へと展開し、遺構を保存した上で、護岸工事や近代の盛土の撤去工事、植栽工事などを順次行なっている。今年度は入江や岬を含む園池西岸中央部周辺の調査である(図45)。

大乗院庭園については、森蘊氏をはじめとする研究の蓄積があり、文献や絵画、そして現地踏査をふまえた復元案が提示されている。それによれば、当該調査地区は平安時代以降明治時代まで大乗院の中心建物群が存在した場所の東側と考えられる。庭園の全景を描いた、江戸時代の成立とされる「大乗院四季真景図」(以下、真景図と略)には、変化に富んだ「小池」が描かれ、その実態の把握が整備復元事業においても重要であった。

また、尋尊の著した『大乗院寺社雑事記』文明十七年四月一日の条には、池中の北中島の南西部分に「上古の井戸」が存在したことが記載されており、今回の調査区がこの位置に近いことから、井戸の確認も課題としてあげられた。

これらの条件を考慮した結果、調査区は入江を挟む北側の岬部分(以下、北区と呼称)と南側の岬部分(以下、岬区と呼称)、および小池西側の平坦部分(以下、南区と呼称)を中心に設定した。また、園池の排水をおこなった結果、南の岬の東側で円形の落ち込みの存在が認められたことから、井戸の痕跡と考え、周囲を土嚢で囲み、調査を行なうこととした(以下、池中央区と呼称)。なお、発掘調査の途中で小池の池岸の確認と改変の状況を探るために北区と南区の間にそれぞれ拡張部を設けた(図46)。

合計の調査面積は約600m²で、調査期間は2000年1月7日から3月24日である。

2．検出遺構

北区

SX7660　地山削り出しの基盤の上に明灰白砂を盛り築成した岬。この砂層の中から土師器皿が大量に出土した。これらは完形かそれに近いものが多く、また重なり合った状態で出土するものもあり、岬構築の盛土時に廃棄されたものと考えられる。

SX7665　東大池に面した池岸。石を斜面に沿って乱雑に据えている。盛土と割石による1974年の整備土の下より検出した。

SX7666　SX7665の東側に続く石敷の池底。基盤層である大阪層群に起源を持つと考えられる径約2～5㎝の礫を青灰砂質土の地山に叩き込む方法で施工されている。これに伴う遺物は見られず、施工の時期は不明である。この石敷は調査区内一面に広がっており、範囲の確認など今後の調査が必要である。

SX7661　SX7660の中央部にある南北方向に並ぶ石組。楕円形に近い形状の石を主に東西方向に長軸を揃え配されている。SX7660の築成土、明灰白砂による整地に先行すると考えられる。一部に大きな石を抜き取った痕跡があり、ある段階で破壊されている。これを園路と理解する意見もあるが、かなりの凹凸があることから、その可能性は低い。むしろ、岬の最も高い位置に存在することから庭園の景観を構成する何らかの施設の基礎であったと考えたい。

SX7662　岬の整地状況を確認する目的で調査区北側を掘り下げたところ、明灰白砂の下より検出した石敷。使用されている石材は石組SX7661と共通するが、一回り小型の石が用いられており、検出面の高さにも差が見られる。一連のものである可能性が高いが、石組周辺部分の個所が削平されて残存していないため確実ではない。

SG7650　入江の北岸で埋まった状態で検出した池。室

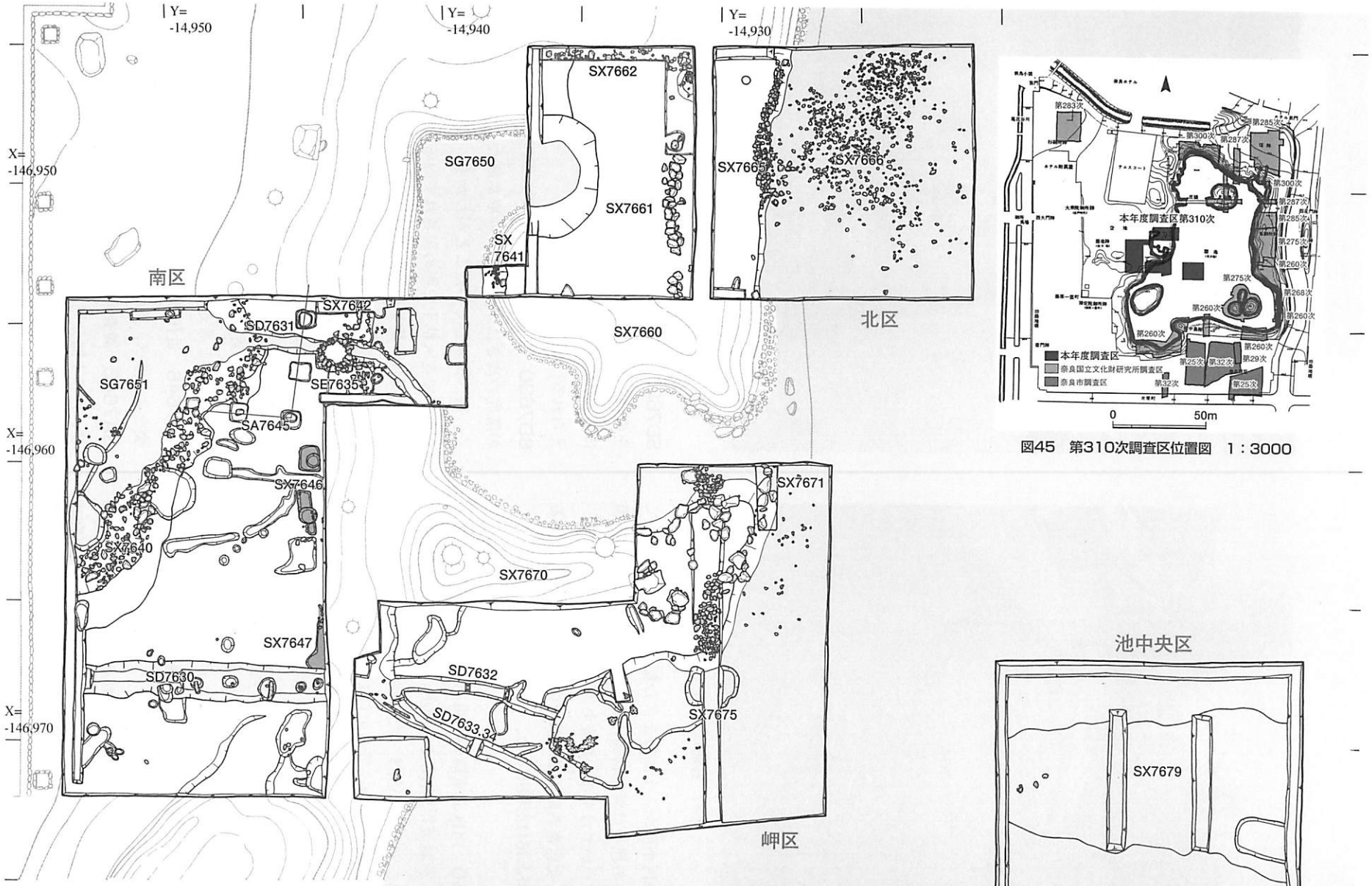


図45　第310次調査区位置図　1：3000

図46　第310次調査遺構平面図　1：200

図47　石組SX7661（北から）

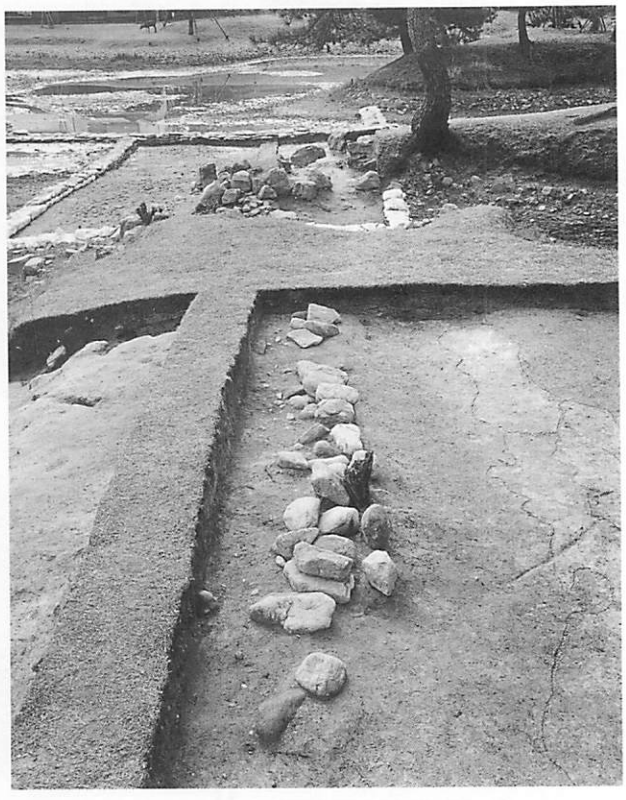


図48　西小池SG7651（北から）

町時代の西小池か。土師器を含む粘質土で埋め戻されている。この埋土は岬の構築土の可能性もあり、池の規模や時期については今後の調査での検討が必要である。

また、北区南西隅の拡張部ではSG7650の東岸にあたる石組護岸SX7641を検出した。

南区

SG7650　南区北東隅の拡張部では現状の岸より２ｍ程西で、石組護岸SX7642を検出。対岸のSX7641とは約５ｍ離れ、SG7641が狭まったことがわかる。

SG7651　「真景図」等の史料より森蘊氏が復原推定した近世の西小池。東岸部分を検出した。石を用いた護岸SX7640は幅２ｍ前後で北東より南西方向に蛇行しながら続いている。この護岸は構築時に地山を削り出した後、粘質土による裏込めを施し、その上に石を組んでいる。岸際が特に深く掘り下げてあるのが特徴的である。構築の年代については確定できない。護岸石の間から寛永通宝が出土した。

SE7635　径0.8m、深さ0.8mの石組の井戸。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、西小池護岸SX7642に近接することや、近世の西小池護岸SX7640にとりつく東西溝SX7631に破壊されていることから近世の改変以前に溯る可能性がある。

SD7631　南区北端で検出された素掘りの東西溝。SE7635を破壊して掘られ、西小池に通じる。溝の底は池の底とほぼ同じ高さであり、両側の池を結ぶ水路であったと考えられる。

SD7630　断面逆台形、素掘りの東西溝。南区西端部での溝底の高さは東大池からの取水部と比べると15㎝程低く、西へ排水していたことがわかる。ある時期に半ばの深さまで青灰粘土で埋め戻されている。新しい溝の埋土には近現代の建築廃材等が多量に含まれ、現代の整地がおこなわれた段階で廃絶して埋め戻されたと考えられる。新しい時期の溝底には掘形をもつ杭が残り、護岸か橋の一部になると思われる。溝内からは混入したと思われる木簡が出土したが、文字の判読はできなかった。

SX7647　近代の建物の基礎。出土状況から壁に煉瓦を用いた建物と考えられる。

SX7646　近代の便所跡。壁以上の部分は残存しないが、甕を２基並べ、周囲を漆喰状の物質で固めている。

SA7645　調査区北東隅で検出した。北から２間南へ伸び、西に１間分屈曲する塀。近代の便所の目隠し塀であろう。

岬区

SD7633・7634　素掘りの東西溝で、南区東西溝SD7630

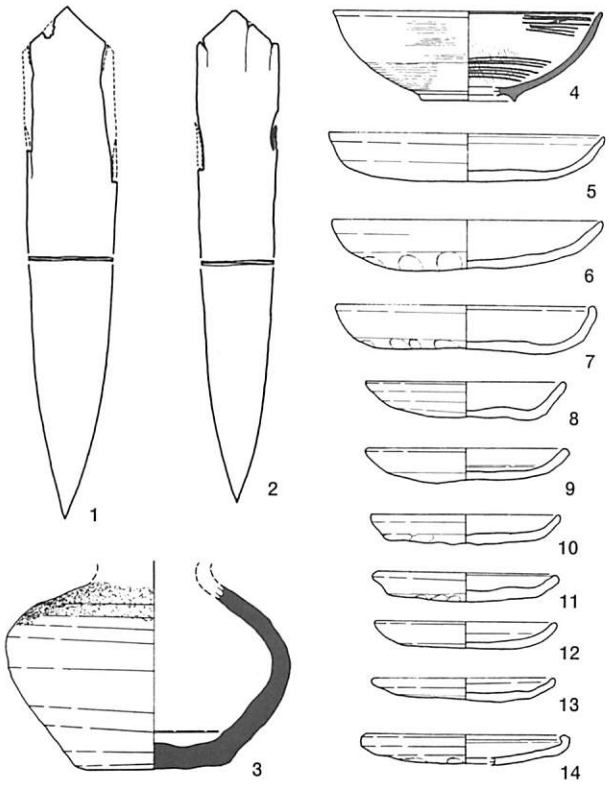


図49　第310次調査 出土遺物　1：4

の延長部。池との取りつき部分では旧溝SD7634と、新溝SD7633の2時期がある。旧溝はやや東南方向に屈曲する。その後、陶製土管を暗渠として用いたSD7632に改修している。最終的には暗渠の両端を木の蓋で閉塞している。

SX7670　地山削り出しの基盤の上に北区と近似する明灰白砂を積んで築成した岬。先端部東側では布掘の堀形を掘削して南北方向に直線的な石組SX7671がある。「真景図」にみえる橋の痕跡は確認できていない。周辺の大ぶりな石の大半は池の浚渫土の上にあり、昭和の整備の際に据えたものである。汀線付近の冠水する個所には樹木の株が遺存する。

SE7675　岬先端部南側で検出した径約1.5mの井戸。井戸枠は遺存していない。発掘が進むにつれ崩落が激しくなったため十分な調査ができなかったが、内部から斎串、須恵器壺が出土した。位置から考えても東大池の形成以前に使用されていたものである可能性が高い。

池中央区

SX7679　幅が5mをこえる浅い溝。発掘調査のため水を抜いたところ、池底に直径8m前後のゆるやかな円形の落ち込みに、周辺の白色砂の底と異なる青灰色・暗褐色の粘土が堆積していた。井戸である可能性を念頭に調査したが、自然流路であることがわかった。

表8　第310次調査出土瓦塼類集計表
6BGN-B·C

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
中世巴（道具）		1	重弧文		1
中世巴		4	6732	Fa	1
近世巴		11	平安		3
近代巴		1	中世		4
小型菊丸		3	近世		13
型式不明		1	近代		7
			現代		1
			軒桟瓦		6
軒丸瓦計		21	軒平瓦計		36

	丸瓦	平瓦	塼	道具瓦他	
重量	42.2kg	239.2kg	1.0kg	鬚斗瓦	1
点数	225	1,484	1	隅木蓋	1
				鬼瓦	2
				刻印平	1
				道具瓦	3

3．出土遺物

各調査区から多量の遺物が出土した。ほとんどは近現代の整地に伴う遺物であり、陶磁器類や煉瓦等の建築資材が多い。ここでは庭園に関連する資料として井戸SE7675出土遺物と岬SX7660出土土器の概要について述べる。

井戸SE7675出土遺物（1～3）　斎串が2点出土した（1・2）。上部を圭頭に削ぎ、下部先端を尖らせた板の側面に切り込みをいれたものである。井戸の底近くの砂層から出土。

須恵器長頸壺（3）は小型のもので、口縁部は打ち欠かれて現存しない。肩部には灰白色の自然釉がかかる。

岬SX7660出土土器（4～14）　岬を構築している明灰白砂中より瓦器と、多量の土師器が出土した。瓦器（4）は断面逆三角形の高台をもつ。土師器は橙赤色を呈する個体がほとんどで、赤みをおびた白色を呈するものも存在する。器壁は厚手で口縁部はナデにより調整されている。他には口縁部を内に強く屈曲させる形態のものも存在する（14）。瓦器・土師器の年代から岬の形成は13世紀頃とすることができる。　（金田明大）

瓦塼類　出土した瓦塼類は表8の通り。中・近世の瓦が大半を占め、次いで、近代の瓦も多く出土した。古代の軒瓦は非常に少ないが、注目されるものとして、北区青灰土より四重弧文軒平瓦が出土した。顎は貼り付け段顎で、顎面に2条の凹線がある。白鳳時代のものと思われ、

図50　大乗院四季真景図（森家蔵）

これまで大乗院で出土した瓦の中で最も古い。この地に大乗院が移転する以前の元興寺禅定院に関連するものか。なお、元興寺極楽坊所蔵品中にも四重弧文軒平瓦がある。

また、「BIZEN日INBE」のスタンプがある近代の煉瓦が北区からまとまって出土した。これらは岡山県備前市伊部地区の生産品である。（清野孝之）

4．成果についての検討

「大乗院四季真景図」との比較　真景図は大乗院庭園の景観を描写した森家蔵、柳生家蔵、奈良ホテル蔵などの若干内容を異にする絵画の総称として用いられている。これらは大乗院第15世である隆温によるものと伝えられているが、製作経緯や新旧関係には不明な点も多い。ここでは森家蔵の真景図（図50）と比較検討してみよう。

今回の調査区周辺の陸地、景石、構造物を抜き出して調査成果との対応図を作成した（図51）。これをもとに比較を行ってみたい。

地形測量と現地の詳細な観察にもとづく森蘊氏の復元案では、東西溝SD7630の存在は認識されていなかった。しかし、今回の調査成果を踏まえて真景図を検討すると、石の板橋がかかった水路が該当部分に存在しており、これをSD7630と考えると近世には西小池、東大池とこの溝に画された島が存在したことがわかる。

また、石組SX7661にあたる位置には大型の石が配された築山が存在したことがわかり、石組はその一部を構成するものであった可能性が高い。

拡張区の調査によってそれほど変化なく遺存していると思われた西小池の入江部分は、実際には現在の幅より約1.5倍の幅を持つ広いものであったことがわかる。現地においてもこの成果をもとに見直したところ、不自然に岸が張り出している部分やえぐれている部分が存在し、近代以降に改変がおこなわれたことがわかる。真景図でもこの部分をやや広めに描いており、詳細に実際の景観を観察していたことがうかがえる。

このように真景図に描かれた景観と今回の調査成果は一致するところが多い。今後、真景図と調査成果の比較対照によって遺構の位置付けと資料批判を相補的におこなう必要があるだろう。

SD7630の変遷　上述したように東西溝SD7630は近世には存在していたと考えられるが、ある段階において途中まで埋め戻されている。どちらの溝も東から西へ流下する。しかし開削当初の溝底の高さは近世に拡張された

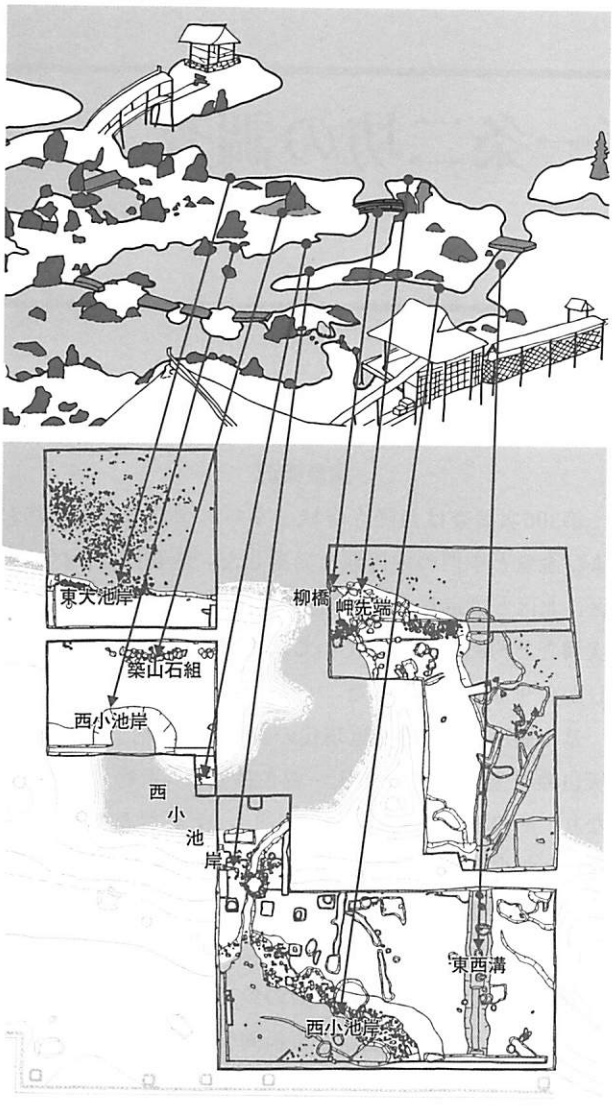


図51　真景図と調査区の対照

西小池の底よりもかなり低く、明らかに池からの排水を意図したものといえる。これを真景図にみられる両池をつなぐ水路として考えるには無理がありそうだ。埋戻し後の溝底の高さは西小池の底に近く、西小池の拡張にあわせて改修された結果が真景図の状況であろう。

真景図を検討すると、池の水は西小池の北西から流れ出し、大乗院西側を流れる尾花谷川へと排水されている。しかし、西小池拡張以前の排水路は未確認であった。今回の調査により、SD7630が当初東大池の排水路であった可能性が指摘できる。

その後、西小池の南西方向への拡張と中心建物群の北西への移動といった大幅な刷新によって排水路が当初の機能を喪失し、一部が庭園を構成する要素として庭園に取り込まれたと考えたい。

5．まとめ

大乗院の中心部分は多くの研究業績が蓄積されてきたが、発掘調査による所見を新たに検討材料として加えることができたことは大きな成果であった。今後、この成果を庭園研究や大乗院庭園の整備に大いに活用を図っていく必要がある。近代以降、大乗院庭園の近景部分は大きく改変されており、その実態は発掘調査によって明らかにしていく必要がある。東大池西側の調査は継続しておこなわれる予定であり、更なる研究の進展が期待できるものと思われる。　（金田）

平　城　専（こらむ）欄　①

◆平城宮造営尺長について

奈良時代の尺度に関しては、大宝令大尺、小尺の理解をめぐっての議論があるが、それはさておくことにして、その尺度の実長について整理しておきたい。宮本長二郎氏によれば、平城宮朱雀門等の宮城諸門、大垣の造営尺は0.2945m～0.2958mであり、「第一次内裏（推定）」における奈良末期の遺構の造営尺は0.2990m～0.3021mの現尺に近い値を得て、全般的には8世紀初期の9寸7分台から、8世紀末期の9寸9分台まで年代を追って尺が伸びる傾向にあるという。

私は、かつて、平城京条坊について検討した際に、宮西面大垣の玉手門と佐伯門の南北心々間距離から得た1尺＝0.2961mを基準尺長として念頭においた。その後、格段に進捗した平城宮の調査成果の中から、造営計画の基本的な骨格となるような大区画施設の遺構を対象にして尺長を算出すると、朱雀門～第一次大極殿院南門：0.2962m。壬生門～第二次大極殿院南門：0.2963m。内裏区画第Ⅰ期の南北長：0.2953m。同東西長：0.2952m。第二次大極殿院の下層における（下層）朝堂院区画の東西長：0.2950m。第二次大極殿院の下層南北長：0.2959mとなる。

こうしてみると、平城宮造営当初での1尺は、0.2950mから0.2963mの間にあることがわかる。8世紀の中で尺長が長くなるという通説に対しては別に検証の機会をもちたいが、たとえば第二次大極殿院の第Ⅱ期（740年代後半）での区画東西長からは0.2957m。平城遷都直後の造営である内裏Ⅲ期の区画南北長からは0.2952m、同東西長0.2947mという尺長が得られる。これらのデータによる 限り、8世紀中頃にあっては、尺長はむしろ短い傾向を示しているといえる。　（井上和人）

◆西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査
―第306次・第309次

1．はじめに

この調査は奈良市都市計画道路建設にともない、奈良市西大寺東町において実施したものである。

調査地は平城京右京一条二坊十五坪にあたり、奈良時代後半には西隆寺が造営された場所である。調査は金堂の南から、中門、南門にかけての地を２次に分けて行なった。第306次調査は、金堂から中門にかけての650m²、第309次調査は、中門から南門にかけての406m²を対象に実施し、総面積は1056m²である（図52）。

調査の結果、西隆寺関係では金堂正面の灯籠遺構を見出し、寺廃絶後に営まれた井戸や掘立柱建物などを検出した。下層からは、西二坊坊間西小路とその両側溝、井戸などの西隆寺創建以前の宅地関係の遺構、そして斜行溝などの平城京以前の遺構も検出した。出土遺物には石製六角塔など興味深いものがある。

図52　調査区位置図　1：4000

2．第306次調査

調査概況

第306次調査は西隆寺寺域のうち、金堂基壇の一部および金堂と中門の中間地を発掘した。調査区は南区、中区、北区と設定したが（全体で650m²）、北区・中区で第３次調査と約85m²重複している。調査期間は1999年７月１日から９月30日であった。

基本層序は、上から近現代の盛土、黒灰粘土（旧耕土）、灰白砂質土（床土）、黄灰・褐色砂質土（遺物包含層）となり、その下の褐灰砂質土（整地土）上面および灰青茶細砂・灰褐白粗砂（地山）上面で、平城京や西隆寺期の遺構を検出した。遺構面の標高は71.5～71.65m。遺構面は北東から南西にゆるやかに下る。

遺構は、おもに平城京以前の斜行溝状遺構10条、平城京期の西二坊坊間西小路と東西両側溝、東西溝５条、井戸１基、西隆寺期の灯籠据付穴と東西瓦敷、西隆寺廃絶後の瓦土坑などを検出した（図53）。金堂基壇は削平されてまったく残っていなかった。他に建物などの遺構としてはまとまらない小穴・小土坑も多数検出した。なお今回、中近世以降の耕作溝は図示、解説を省略した。

検出遺構

平城京前の遺構

SD741～SD749・SD754　国土方眼の約45度方向にはしる斜行溝群。中区・南区の地山（灰青茶細砂・灰褐白粗砂）上面で、北東から南西および北西から南東へ下る溝をそれぞれ５条ずつ検出した。前者と後者はほぼ直行する。幅は25～35㎝、深さ５～15㎝で、SD741のみ幅が約１mとなる。SF105上でも検出したが、SD095やSD110には切られることから、奈良時代前の遺構と考えられる。埋土は黒茶粘砂で遺物は全く含まないため、水田耕作にともなう溝もしくは水田の区画を示す畦と推測する。ちなみに溝心心距離は2.0～2.5mである。

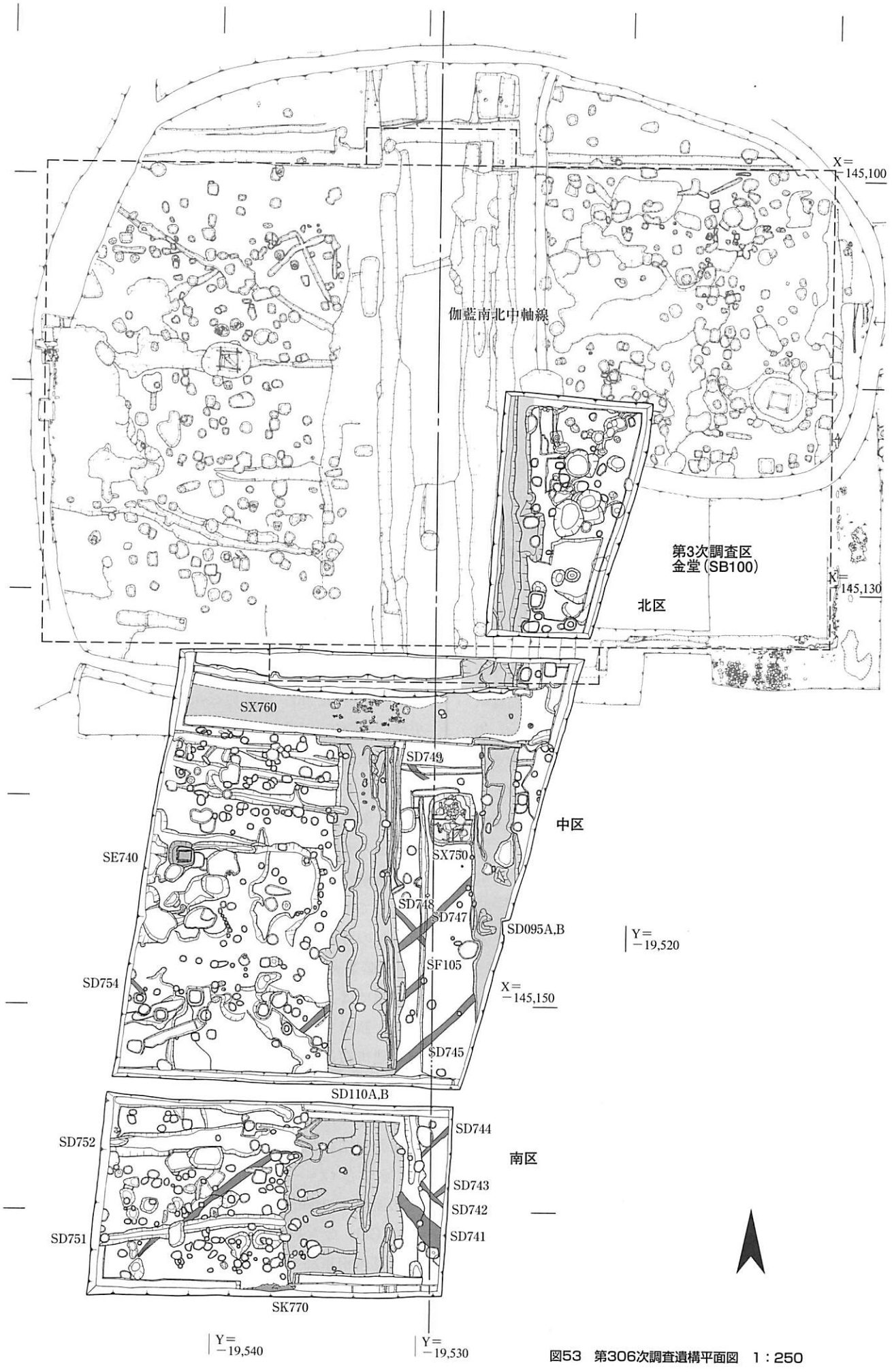


図53　第306次調査遺構平面図　1：250

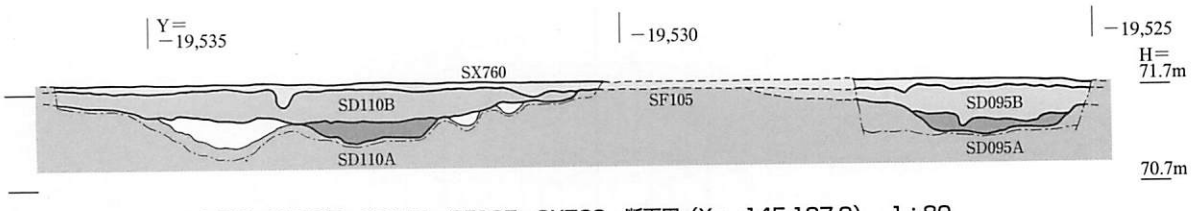


図54　SD095・SD110・SF105・SX760　断面図（X=−145,127.0）　1：80

平城京（西隆寺建立前）の遺構

SD095A,B　西二坊坊間西小路東側溝（図54）。第3次調査の重複部分を含む南北約28m分で検出した。第3次同様、2時期に分かれたが、SD095A,Bとも素掘り溝で南に流れる。下層のSD095Aは幅が約1.6m、深さが10〜20cmで、埋土は茶色系粘土と灰白砂質土がシルト状に混ざる。上層のSD095Bは幅約2.3m、深さ10〜35cm、埋土は黄灰〜暗灰色の砂質土で広めに改修されていた。

SD110A,B　西二坊坊間西小路西側溝。SD110A,BもSD095同様、南に下る素掘り溝で、南北約27m分検出した。下層のSD110Aは幅1.6〜2.0m、深さ15〜25cm、埋土は暗青灰色粘質土と灰色砂がシルト状に混ざる。溝底上面で土器片が多く出土した。上層のSD110Bは幅3〜4m、深さ10〜35cm、埋土は黄灰色系の砂質土。西に広く改作されていたが、特に南区では西の東西溝SD751・SD752が流れ込み、幅約6.5mと東西に広くあふれた様子が観察できた。

SF105　右京一条二坊内の西二坊坊間西小路。第3次調査検出の南延長部で南北約27m分検出した。路面は灰橙粗砂・黄灰粘砂の地山上面で、路面幅は3.2〜3.5m。道路心はX=−145,127.0でおよそY=−19,529.3だが、伽藍南北中軸線のふれN 0° 19′ 50″ W（「北で西に0° 19′ 50″ ふれる」：奈良国立文化財研究所学報第五十二冊『西隆寺発掘調査報告書』1993、以下『報告書』と略す）に沿う。下層のSD095AとSD110Aの心々距離はおよそ6.55m（1尺=0.295mで22尺）で第3次調査とほぼ同じだった。

図55　SX760（西から）

SE740　中区中央西端の地山（灰色粗砂）上面で検出した井戸。掘形は上部が約2.5m四方の摺鉢状、下部が約2m四方で、東西約1.2m×南北約1.4m、深さ約2mの縦板の井戸枠を用いている。底には拳大の礫が敷き詰めてあった。仕様は、まず四隅に幅細の縦板を斜め45度に刺し、次に東西に縦約1.8m、横80〜120cm、厚さ3〜4cmの一枚板をはめて安定させる。続いて南北に縦約1.5m、横20〜30cm、厚さ3〜4cmの板材を数枚ずつはめていき、最後に幅4〜5cmの横材で押さえたとみられる。東西の枠板は一部にほぞ穴があり、厚さからすると床板などの転用材かもしれない。埋土は遺物を多く含む灰色〜暗灰色の粘砂である。遺物では、枠内南東隅の最上層埋土（暗灰色粘砂）で、小型海獣葡萄鏡が出土した。これはおそらく井戸を埋める際の儀式で用いられたものであろう。

西隆寺期の遺構

SX750　金堂正面のSF105路面上で検出した灯籠の据付穴。東西約2.2m、南北約2.5mの隅丸方形で、深さは中央部分で約55cmを測る（図56）。灯籠の基壇は抜かれていたが、基壇の下に敷く根石を検出した。路面を浅い摺鉢状に掘り下げ、裏込土（遺物を多く含む暗茶灰砂質粘土）を敷き拳大状の石を据え、上にほぼ上端を揃えて直径35〜50cmの大型の根石を4石据える。根石は大体花崗岩だが、南東の1石は竜山石切石を斜め45度に割り、割面を上にして据えられていた。この割石は金堂基壇にともなう石材の可能性がある。また南半部の断割で、根石下の地山（暗茶灰粘土）直上に小石の抜取痕跡がみつかり、断面観察では、暗茶灰砂質粘土の下に遺物を少量含む暗灰粘土が観察できた。以上のことから、今回検出した根石は創建当初とは考えにくく、少なくとも1回は据付穴の位置をほとんど動かさずに、根石を取り替えて基壇を据え直した可能性が高いと推測する。

またSX750の心はおよそX=−145,130.85、Y=−19,528.57で、金堂心（X=−145,110.80、Y=−19,529.05：『報告書』）との距離は20.06m（1尺=0.296mとすると67.8尺）となる。

SX760　金堂基壇正面の瓦敷（図55）。第3次調査でも金堂基壇南東部で一部確認したが、今回は第3次の畦で残存した部分にあたり、周囲の遺構面より20cmほど高い面（標高約71.8m）で検出した。幅1.4〜1.9m、西で北にふれながら東西に約16mのびる。SF105やSD095、SD110の

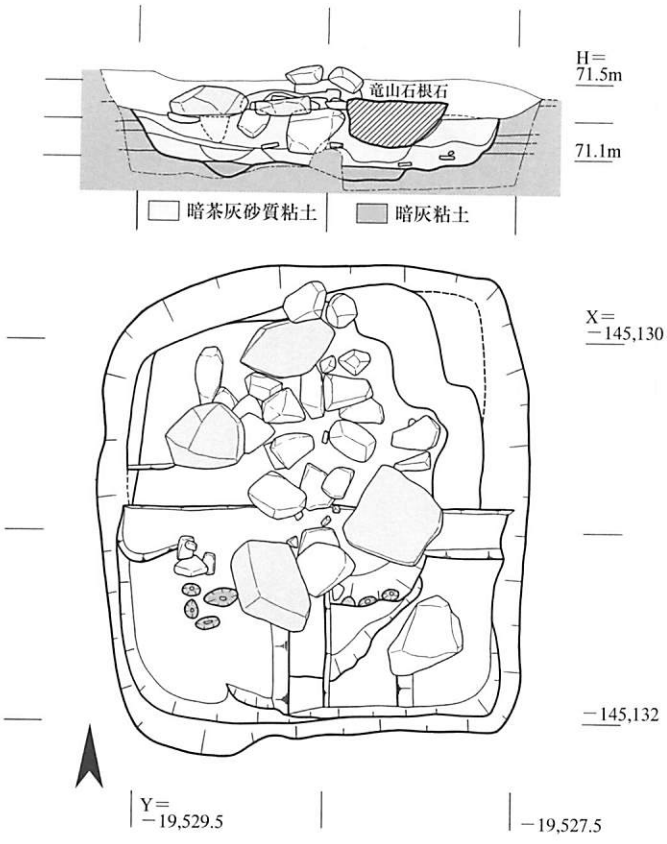


図56　SX750平面図（下）・断面図（上：X=−145,130.9）1：40

直上に灰白～橙褐シルトをベースとして小礫（東半で直径4～5㎝、西半で直径2～3㎝）を敷き、その上に10～15㎝角四方の使用済みの割瓦を、凸面を上にして敷き詰める。敷いた瓦に一部含まれていた軒瓦は西隆寺創建時の6235C、6775Aなどであった。また瓦敷の北辺は金堂南面階段の南辺推定部にあたることから、金堂基壇が存続する時期に敷いた舗装面と考えられる。

西隆寺廃絶後の遺構

SK770　西隆寺廃絶後に瓦を廃棄した土坑群の一つ。南区南壁にかかる幅3m以上の大土坑で、調査区外南に続く。金堂南にあたる中区・南区の遺物包含層の灰褐砂質土上面で検出した。土器片はあまり含まれず、多量の瓦塼類が投げ込まれていた。

考察

ここでは、SX750について考察する。SX750の心と金堂心のふれはN 1° 22′ 17″ Wで、伽藍南北中軸線のふれN 0° 19′ 50″ Wよりも大きい。すなわちSX750が中軸線よりも約36㎝（1.2尺）東にあることがわかった。このずれが施工誤差か他の理由かは現段階では推定できなかった。また、金堂との距離67.8尺に対し、中門との距離は約89尺で、両者の関係性も見いだせなかった。

古代の灯籠遺構は、山田寺、奥山久米寺、興福寺などでみつかっている。SX750と西隆寺伽藍に関する上述の問題点については、他の遺構例と比較検討した上、本報告で詳論したい。

（蓮沼麻衣子）

3．第309次調査

調査概況

調査は調査区を東西2区に分けておこない、東側を東区、西側を西区と呼ぶ。なお調査期間は1999年10月20日～12月28日である。

調査区の基本的な土層は東区、西区とも、上から、現代の盛土、水田耕土、床土、茶褐土、暗茶褐土（遺物包含層）とつづく。その下は遺跡のベースをなす土層で、東区は茶褐色粘土層、西区は黄色粘土層または灰色粗砂層であり、主要な遺構はこれらの土層の上面で検出した。遺構検出面は現地表下約1.4mで、標高71.2m前後である。

検出遺構

検出遺構は平城京造営以前の遺構、西隆寺建立前の平城京の遺構、西隆寺廃絶後の遺構とに分かれる。東区北端は中門の、南端は南門のそれぞれ推定位置にあたるが、いずれも後世の削平により、基壇はもとより、基壇の掘込地業、雨落溝など、建物の位置や規模を直接示す遺構は残っていなかった。したがって、西隆寺に関する遺構は寺の廃絶以後に限られる。

平城京前の遺構

SD800・801　東区南端で検出した斜行溝。幅約0.3m、深さ0.1～0.2m。溝の方向は国土方眼に対して北で西に約50度振れる。埋土は堅くしまった暗褐色粘質土で、ごく少量の土器細片を含む。

SD810・811　西区で検出した2本の斜行溝。SD811は、幅0.4m、深さ0.2mで、国土方眼に対して北で西に約40度振れる。SD810は幅0.2～0.4m、深さ0.2m、国土方眼に対して北で東に約40度振れる。両溝の堆積土は暗褐色砂質土で、SD810には須恵器小片を含む。

SD812・813　西区の東西溝。SD812は、幅0.4m、深さ5cm。埋土はこげ茶色砂質土で、土師器小片を含む。SD813は幅0.35m、深さ16cm、溝の方位は方眼東に対して南に約10度振れる。埋土は暗褐色砂質土。

以上の溝は、水田に関係する遺構の可能性がある。

平城京（西隆寺建立前）の遺構

SF105　西二坊坊間西小路。東区で南北35m分を確認した。道路幅員に関しては、東区南端で得た、東側溝SD095西肩から西側溝SD110下層東肩までの距離（幅員）約4.2mという数値がある。この場合の道路心の座標位置

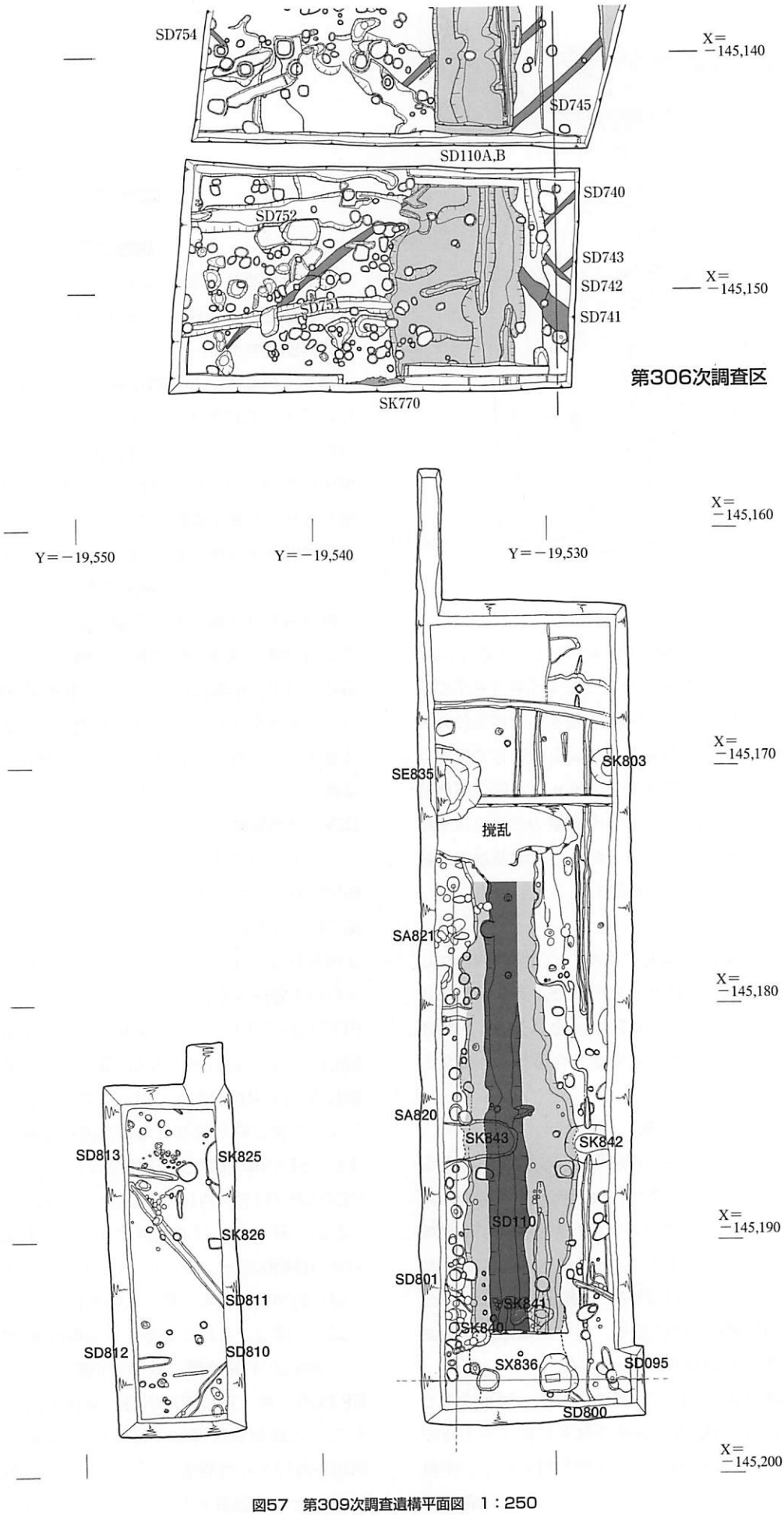


図57　第309次調査遺構平面図　1：250

は、Y＝−19,529.0となる。ただし、今回検出したSD095西肩が、掘削当初の位置をとどめているかは不明であり、参考にとどまる。路面舗装の痕跡はない。

SD095　SF105の東側溝。東区南端で、南北溝西肩のごく一部を検出した。

SD110　SF105の西側溝。上下2層に大別される。下層溝（SD110A）は、幅約1.5m、深さは0.5m前後。ほぼ側溝本来の規模を示すものであろう。灰色砂層が堆積する。上層溝SD110Bの埋土は褐色ないし暗褐色砂質土である。SD110Aは、方眼方位に対して北でやや西に振れる。

SA820・821　掘立柱南北塀。SA820はSD105の西肩から約1.5mの位置にあり、東区の南端から北へ8間分を確認。柱間は、1.5〜2.4mと一定しない。SA821は、その北の南北塀。3間分確認。柱間は南から2.0、2.7m。ともにその位置からみて十五坪の東端を画する塀であろう。

SK825　西区北部で検出した土坑。南北2.6m、東西0.4m、さらに調査区の東外にひろがる。深さは0.5mまで確認したが、崩壊の危険のため、底の確認を断念した。埋土は暗褐色砂質土で炭化物と多量の土器が出土した。

SK826　SK825の南にある小土坑。南北0.5m、東西0.6m、深さ0.1mあり、ごく少量の土器が出土した。SK825・826は十五坪内の塵芥処理用の土坑であろう。

西隆寺廃絶後の遺構

SK840〜843　東区南半部で検出した瓦を廃棄した土坑群。多量の瓦片が投棄されていた。位置からみて南門または南面築地所用の瓦を廃棄したものであろう。

SE835　東区北部で検出した井戸。掘形は一辺約3.2mの不整方形、深さ約1.7mある。抜取穴出土の井戸枠残材から、縦板組の構造であることがわかる。抜取穴からはほかに土器、瓦、曲物などが出土した。

SX836　東区南端の2箇所の大型の掘立柱穴。東側の柱穴は一辺約1.6mの不整な方形を呈す。深さは0.7mあり、底に木製礎板をおく。西側の柱穴は掘形一辺が約0.9mの不整方形を呈し、深さ0.6m。両柱穴の間隔（心々）は約2.7m（9尺）である。東側柱穴の柱抜取穴からは凝灰岩切石片や、玉石が投棄された状態で見つかり、位置からみて南門基壇外装材であった可能性が高い。東側柱穴の東約2.5mに柱筋をそろえる柱穴があり、SX836を2柱からなる門状の施設と考え、柱穴はそれに取り付く塀と推定しておく。

出土遺物

出土遺物には、瓦廃棄土坑出土の大量の瓦塼類、西二坊坊間西小路西側溝SD110出土の多量の土器類に加えて、石製六角小塔など注目すべきものがある。

瓦塼類　第306次調査、第309次調査ともに大量の瓦が出土した。大半が瓦廃棄土坑からの出土である。軒瓦は西隆寺創建時の軒瓦編年第Ⅳ期に属する軒丸瓦6235C、軒平瓦6761Aが最も多い。

第306次調査では、第309次調査と対比すると、軒丸瓦6236Fや、軒平瓦6764Aも目立つ。軒瓦編年第Ⅴ期の6133N、あるいは平安時代までくだるかとおもわれる6125Aなども少量出土している。平瓦に「理」「目」「大」などの刻印をもつものがある。

西隆寺創建以前の瓦として、6284Ea、6314B、6664C、6719Aなどが SD110ほかから少量出土している。

表9　第306・309次調査　出土瓦塼集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6012	Ab	1	6641	C	1
6125	A	2	6647	B	1
6133	N	1	6663	Cb	2
6225	C	1	6664	C	1
	E	1		I	1
	?	1	6668	A	5
6235	C	18	6681	A	1
	I	6	6691	A	2
	?	8	6710	A	1
6236	F	9	6719	A	1
	?	1	6721	C	1
6273	B	1		E	1
6282	?	1		?	2
6284	Ea	1	6739	A	2
6314	B	1	6761	A	28
6348	A	1	6764	A	14
型式不明		41	6775	A	8
			型式不明		22
軒丸瓦計		95	軒平瓦計		93

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	1,071.7kg	3,596.0kg	13.2kg	104.9kg	鬼瓦	1
点数	9,474	32,819	28	50	面戸瓦	5
					熨斗瓦	13
					隅切平瓦	3
					刻印平瓦「理」「目」「大」「丁」	8

土器類　第306次調査・第309次調査合わせて整理箱116杯の土器が出土した。特に西二坊坊間西小路SD110の土器は、奈良時代中頃の良好な資料であり、須恵器に多彩な壺類がめだつ。土器類にはほかに、墨書土器、刻書土器、土馬、土錘、獣脚硯、中世の青磁などがある。

（千田剛道）

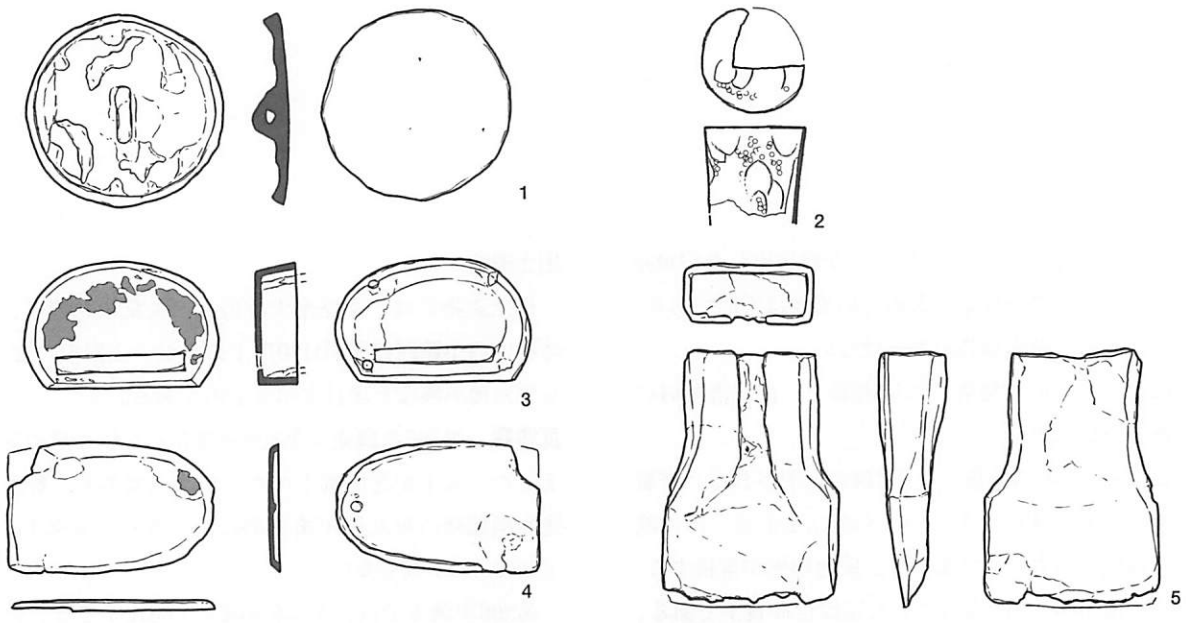


図58　第306・309次調査出土金属製品　2：3

金属製品・銭貨　遺物包含層および遺構内から、多量の金属製品が出土している。銅製品に経軸頭金具、海獣葡萄鏡、銙帯金具などがあり、鉄製品には、鉄斧、多量の釘などがある（図58）。

海獣葡萄鏡は、小型海獣葡萄鏡の内区のみを独立させたもので、径3.7～3.8cm。わずかに楕円になる（1）。鈕の周囲に四禽獣を配し葡萄唐草がそれを取り巻くが、文様は不鮮明である。井戸SE740の最上層から単独で出土した。このような内区のみの海獣葡萄鏡は、平城京右京二条三坊三坪、藤原宮西方官衙南地区、坂田寺東面回廊東側溝、橿原市四条大田中遺跡、石川県寺家遺跡などからの出土が知られている。

経軸金具は頂部径19㎜の円筒形で、現存高20㎜。厚さ1㎜の銅板に鍍金をおこなったものである（2）。頂部上面および側面には、線彫りにより花文を表現した後に魚々子をその周囲と中房部分に打つ。魚々子は、径1㎜弱で正円ではなく半円になるものが多く、重複も目立ち不揃いである。遺物包含層出土。金銅製の経軸頭の出土例には、平城宮内裏東方東大溝SD2700出土の頂部片、法隆寺東院地域出土の木彫如意輪観音坐像容器に転用されていたものなどがある。

銙帯金具は、丸鞆表金具（3）および蛇尾表金具（4）がある。いずれも表面にわずかではあるが漆が遺存する。3、4ともに西二坊坊間西小路西側溝SD110出土。

鉄斧は、有袋斧でわずかに肩をつくる（5）。長さ4.9cm、刃部幅3.5cm。袋部の横断面形は方形を呈し、左右の折り返しは、合わせ目が「ハ」字状に開く。

銭貨は、和同開珎1点がある。

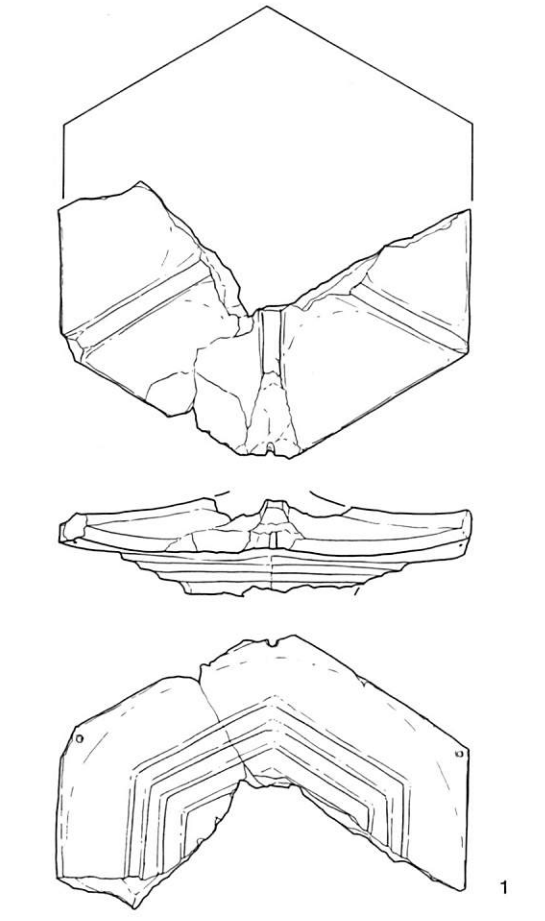
石製品・その他　石製品では、特殊なものとして、六角小塔の屋蓋および基座がある（図59）。いずれも遺物包含層からの出土であるが、それぞれに近接した範囲から出土し、屋蓋は2点の破片が接合関係にある。

屋蓋（1）は、1辺が約6.1cmの六角形で、1/2を欠失する。石材は花崗岩で雲母片を多量に含む。上面には降棟を、下面には4段に垂木先を表現する。降棟先端の内側には、径1.2㎜、深さ約4.5㎜の小孔がそれぞれ一孔ずつ穿たれている。破断面で観察するかぎり孔径は一定で、中心に向かってわずかに傾斜する。おそらく風鐸あるいは瓔珞状のものが装着されていたのであろう。

基座（2）は、平面が1辺7.9cmの正六角形、厚さ1.9cmの板石で、約1/2を欠失する。石材全体の風化が著しいため判別が困難であるが、花崗岩系統の石材を用いている可能性がある。上下の面で状態が著しく異なり、丁寧に研磨されている面を上面、研磨が認められず荒い状態の面を下面とする。側面は上面と同様である。下面には一定方向の線条痕がみられる。中心からわずかにずれた位置に径5㎜ほどの貫通孔がある。後述する正倉院三彩塔の基座を参考にすると、心柱を支えるための孔であろう。

このような六角小塔の遺品には、石製品に正倉院南倉白石塔残欠、陶製品に同三彩塔（磁塔）、平城宮馬寮東方地区出土黄釉屋蓋がある。白石塔残欠は、基壇と最上層の屋蓋を残すのみで他は失われているが、三彩塔の第7層屋蓋および基壇と同形同大であるであることが指摘されている。正倉院三彩塔の基座は、1辺7.7cm、長径15.3cm、短径13.4cm、厚さ1.7cmとされ（楢崎彰一「三彩塔」『国華』982号　1975）、西隆寺出土の石製基座とほぼ同形同大であることが注意される。

この他に、砥石が11点出土している。また、鉱滓、鞴の羽口など、鋳造あるいは鍛冶に関連する遺物が多量に出土している。　（次山　淳）



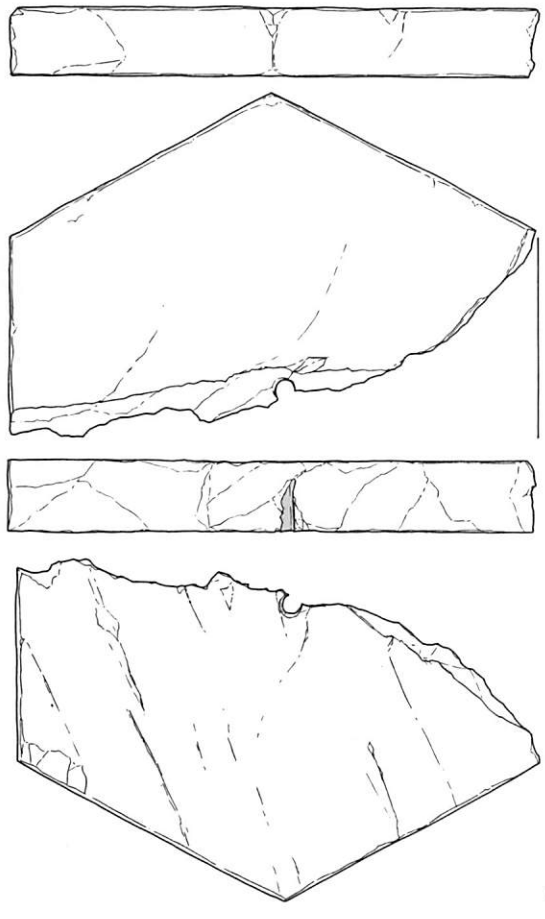


図59　第306次調査出土石製六角小塔　1：2

まとめ

第306次調査の成果としては、まず西二坊坊間西小路と東西両側溝を検出したことが挙げられよう。第３次調査成果と総合して、側溝心心距離が22尺で、道路心がおよそN 0° 19′ 50″ Wふれることを確認した。

しかし特記すべきは、西隆寺期の灯籠据付穴SX750と瓦敷SX760を検出したことである。SX750は、元禄11年（1698）の『西大寺絵図』にある西隆寺の中で、弥陀金堂と楼門の間に描かれた灯籠が実在したことを裏付けた。これは考察で述べたように、西隆寺伽藍復原においても重要なデータを提供したと言えよう。一方SX760は、第３次調査で金堂基壇南東隅に一部見つけていた舗装面が、基壇土の残存する時期に金堂正面全体に広がることを暗示する遺構で意義深い。

遺物では、SE740から出土した小型海獣葡萄鏡、中近世の耕作溝を検出した遺物包含層から出土した石製六角小塔の屋蓋と台座、および経軸頭金具などが注目できる。石製六角小塔や経軸頭金具は、おそらく西隆寺廃絶後に、使用後の小遺物を整地土に混ぜて廃棄したものであろう。

第309次調査の結果、中門、南門の遺構については、後世の著しい削平により、直接的に建物位置をしめす痕跡は失われていたことが判明した。ただ、瓦廃棄土坑の存在、基壇外装材の残片の出土などにより、それぞれの想定位置に中門、南門が存在したことは明らかである。

大規模な瓦廃棄土坑SK842・843の位置が築地ラインより12mほど内側（北側）に入ったところにあることからみると、南門は、例えば興福寺南大門のように、築地を内側に屈折させた所にひらく形であった可能性もあろう。

つぎに特筆されるのは、寺の廃絶後、水田化までの間に限定できる遺構の存在である。寺の跡地に、井戸といくつかの掘立柱建物からなり、南面を塀と門で区画した一角を構成している。おそらく、寺廃絶後も一条条間路が存続していたことをも示唆しよう。

この遺構の性格を的確に指摘する材料は乏しい。しかし、中世に、この一帯は水田化し、西大寺の領有となっていることから、ひとつの可能性としては、さかのぼって西大寺との関わりを推測させるものがある。予定している本報告に際して検討を進めたい。

（蓮沼・千田）

◆法華寺阿弥陀浄土院の調査 ―第312次

1．調査区の概況

平城京左京二条二坊十坪は法華寺寺域の南西隅にあたり、天平宝字五（761）年に光明皇太后の一周忌の斎会が行われたと『続日本紀』にみえる阿弥陀浄土院の推定地である。坪中央やや西よりに立石があり、早くから園池の存在が想定されてきたが、坪の北半部で行われた既調査（第80次：1972年度、第183−21次：1987年度、第282−6次：1997年度）では、建物跡等を検出したものの、池に関わる遺構を確認していない。このほか、第281次調査（1997年度）では、坪南東隅に、法華寺寺域南辺中央の門を検出している。

今回の調査は推定阿弥陀浄土院遺跡の範囲確認を目的とし、坪南半のほぼ中央に細長い３本の調査区を設定した（図60）。ここでは、南北に長い調査区を東区、東西に長い調査区のうち北側を北西区、南側を南西区とよぶ。遺構検出面は標高60.70ｍ前後。調査面積は計355m²で、調査期間は2000年２月28日から４月25日である。

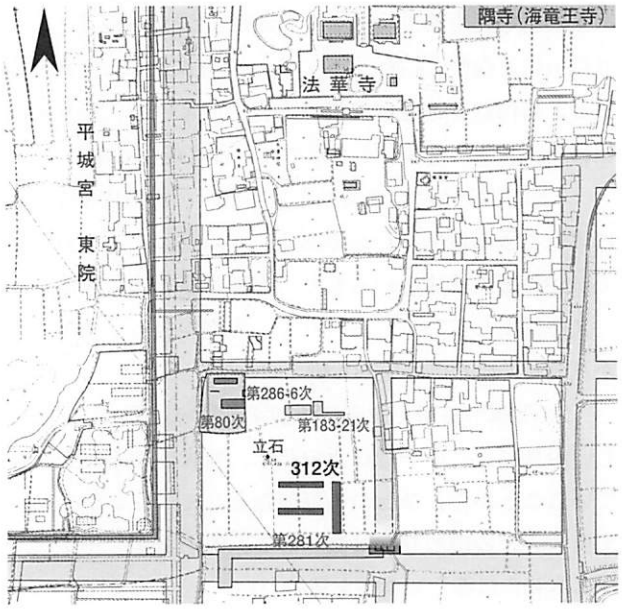


図60　調査区位置図　１：5000

2．検出遺構

調査の結果、阿弥陀浄土院に伴うと推定される奈良時代の園池跡等を検出した（図61）。以下、順に説明する。

奈良時代の遺構

SG7700　調査区全体に広がる園池遺構（口絵）。東岸、南東岸の一部を検出したが、その他の岸は調査区外にのびる。池の最大長は45m以上。池岸には、長径60〜85㎝程度の護岸石を並べ、灰白色砂混青灰白色粘土を裏込めとする。護岸石が抜けている部分も、この裏込め土により池汀線をほぼ復原できる。護岸石は、立った状態のものはなく、すべて横置き、あるいは立石（景石）とおぼしき石は倒れた状態で遺存していた。池岸は複雑に出入りし、東区のやや北寄りで、池岸に挟まれて西にのびる岬がある。池底には、径30〜50㎝程度の石を、平坦面を上向きに揃えて一面に敷く。池底の石敷がない部分には礫混暗灰色砂を検出した。

SK7694　池岸に並ぶ小土坑群。その多くは、位置や状況から、護岸石を抜き取った痕跡と見られる。その他に、立石（景石）を倒し込んだために生じた空隙とみられるものがある。こうした状況から、池の汀線に沿って、景石をところどころに立ち上げた石組みの護岸が連続していたものと考えられる。

SX7695　SG7700にある中島。南西区中央で東岸と西岸を確認した。幅12.5m以上。黒色砂質土をベースとする。

SX7681　SX7695の南岸にある入江状の遺構（図61−4）。池護岸石の裏込めと同質の土を、池に向かってなだらかに下がるように敷く。外縁沿いには、長円形に縁石の抜取穴が並び、その内側を舟底状に浅く窪ませる。平城京左京三条二坊六坪（宮跡庭園）の園池SG1504で検出した舟入り状の施設SX1468に類似したものか。

SD7682　調査区東方からSG7700南東岸へ流れ込む、幅約1.2ｍの東西溝。

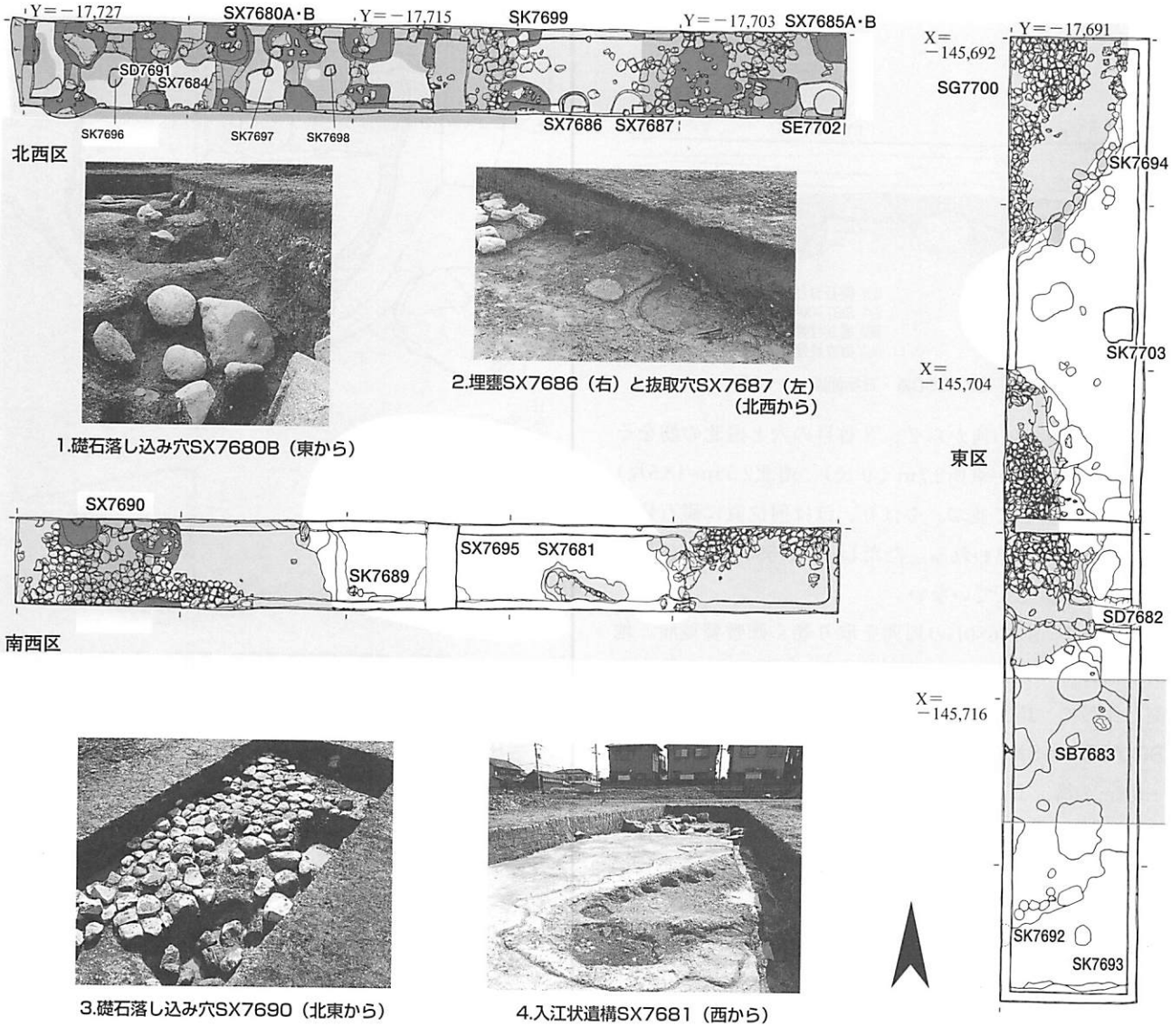


図61　第312次調査遺構平面図（1：200）と主な遺構

SX7680A・B　北西区西半でまとまって検出した礎石落し込み穴群（SX7680B）と、その下層の掘立柱柱穴群（SX7680A）。調査区の北、南辺に沿って、東西方向８基、南北方向２基の計16基の穴が２列に相対して並ぶ。北東隅の１基は下層柱穴のみ確認した。

SX7680Bの穴の大きさは１辺1.5～２m程度で、埋土中の石は、礎石（径１～1.5m程度）だけでなく、根石状のものもある。とりわけ、出枘が付く礎石と、長円形の礎石が注目される（図61－1）。

これらの礎石落し込み穴は、東西方向が約2.7m（９尺）のほぼ等間隔、南北方向の間隔も約2.55m（8.5尺）でそろうことから、本来の礎石据付穴とほぼ同じ位置で掘られたものとみられる。したがって、この位置に礎石建物が存在した可能性が高い。礎石落とし込み穴の周囲には池底の石敷が存在せず、礫敷整地層SX7684（後述）が取り巻く。穴の埋土中より中世の土器、瓦が出土した。

SX7680Aは、北側の列の東西両隅と、南側の列の下層で確認した。これ以外の場所ではSX7680Bにより完全に壊された可能性がある。ほぼ同じ場所で、掘立柱建物から礎石建物へ建て替えられたとみてよかろう。

SX7680Aの掘形と抜取穴は奈良時代の地山面から切り込み、池底の堆積土によって覆われ、SX7680Bは、この池底の堆積土の上面から掘り込まれている（図62）。

SX7685A・B　SX7680A・Bから東へ約3.3m離れて検出した礎石落し込み穴群（SX7685B）と、下層の掘立柱柱穴群（SX7685A）。東西方向に３～４基、南北方向２基の穴が相対して並ぶが、北側の東から２番目には穴が確認されず、西端の２基は下層のみ確認した。また、北西区東半のほぼ中央には幅2.6mの大きな穴が１基あり、ここへ周囲の礎石をまとめて落し込んだものと思われる。これ以外の穴はSX7680A・Bとほぼ柱筋をそろえて検出されているが、穴の間隔は若干狭く、約2.4m（８尺）程度である。しかし両者の状況は基本的に類似しており、SX7685A・Bは、SX7680A・Bと同様、この場所に築かれていた建物跡の可能性が高く、やはり掘立柱建物から礎石建物に建て替えたものと思われる。

SX7690　南西区西端付近で検出した礎石落し込み穴群（図61－3）。SX7680Bの南列から南へ約15.5mの位置に

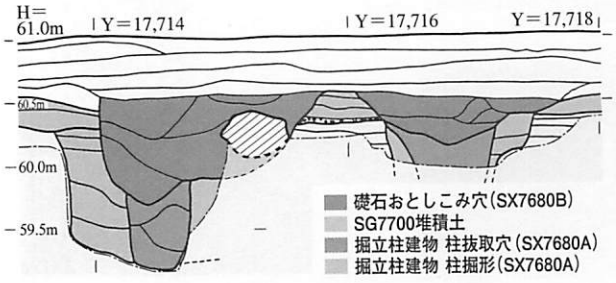


図62　SX7680A・B断面図　1：60

あり、SX7680Bの西から2、3番目の穴と南北の筋をそろえて4基の穴が東西2.7m（9尺）、南北2.55m（8.5尺）の間隔で相対して並ぶ。やはり、ほぼ同位置に礎石建物があった痕跡と思われる。ただし、SX7690の下層には掘立柱柱穴を確認していない。

SX7684　SX7680Bの周囲を取り巻く礫敷整地層。地山上面に薄く残存する。他所に存在する池底の石敷の標高と比べて、15cm前後低い。

SD7691　SX7680Bの穴を東西、南北につなぐ幅約0.6～0.8mの溝。5条検出した。埋土はSX7680Bと共通しており、根石状の石も投棄されているのでSX7680Bに関連する遺構とみられるが、礎石建物の束柱に関わる遺構の可能性もある。

SK7696・7697・7698　SX7680Bの相対して並ぶ礎石落し込み穴列のほぼ中央で、東西に筋をそろえて並ぶ小穴。位置からみれば、SX7680A・Bに伴う床束あるいは足場穴の可能性もあるが、SK7696とSK7697の間が1基抜けるうえ、やや浅いことから3基の小土坑と判断した。

SB7683　SG7700南東岸の陸地部分から東に延びる東西棟掘立柱建物。桁行2間以上、梁間2間。身舎の西妻部分が調査区西端にかかる。妻側の中央の柱穴には柱根が残存する。柱間寸法は9尺（約2.7m）等間。

SK7692・7693　SB7683の南側で、西妻柱筋の延長上（SK7692）と、その東隣の柱筋の延長上（SK7693）にある土坑。SB7683の南庇となる可能性もあるが、穴そのものは非常に小さい。庇だとすれば、出は12尺（約3.6m）となる。

SK7689　中島SX7695の西岸に位置する小土坑。

SK7699　SX7680Aの北東隅の柱穴を切る小土坑。埋土中におびただしい量の檜皮が詰まっていた。

SX7686　北西区東半の調査区南端で検出した埋甕遺構（図61−2・図63）。地山を掘りこんで須恵器の大甕を埋めたもので、下半部のみ残存。調査区内にかかるのは北半分のみ。甕の径は約1.0mで据え付け掘形の径は約1.2m。土層の層序関係からみて、池と併存したものと見られる。

SK7687　SX7686の0.8m東側に並んで検出されたほぼ

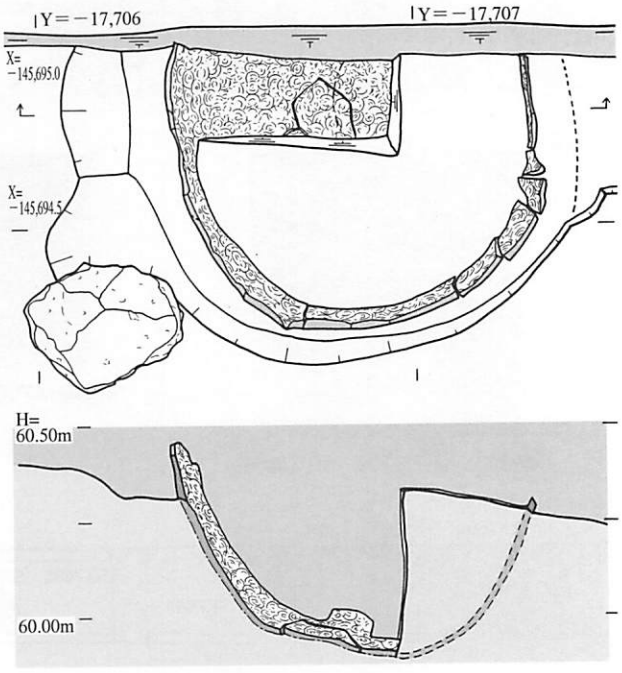


図63　埋甕SX7686平面図・断面図　1：20

同大の土坑。埋甕の抜取穴とも考えられる。

中・近世、近代の遺構

SX7701　北西区西半で検出した、奈良時代～中世の瓦、礫を多く含む整地層。奈良時代の遺構の上層に位置する。第281次調査で検出したSX7119と状況が類似する。

SE7702　北西区東南隅で検出した井戸。SX7685の穴の1つを壊して造られている。割竹を輪状に組んで井戸枠とする。埋土中より近代の陶磁器が出土した。

SK7703　東区北半で検出した土坑。埋土中より近代の陶磁器が出土した。

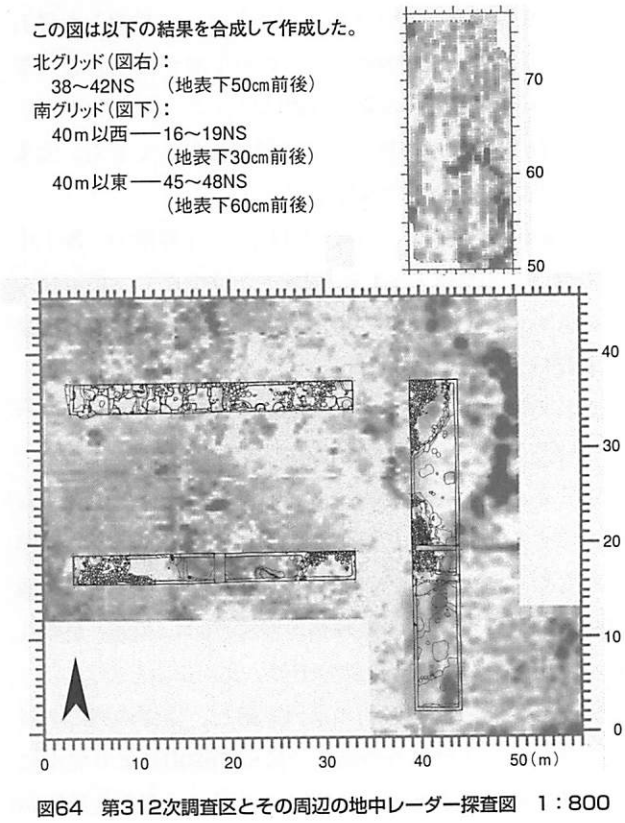


図64　第312次調査区とその周辺の地中レーダー探査図　1：800

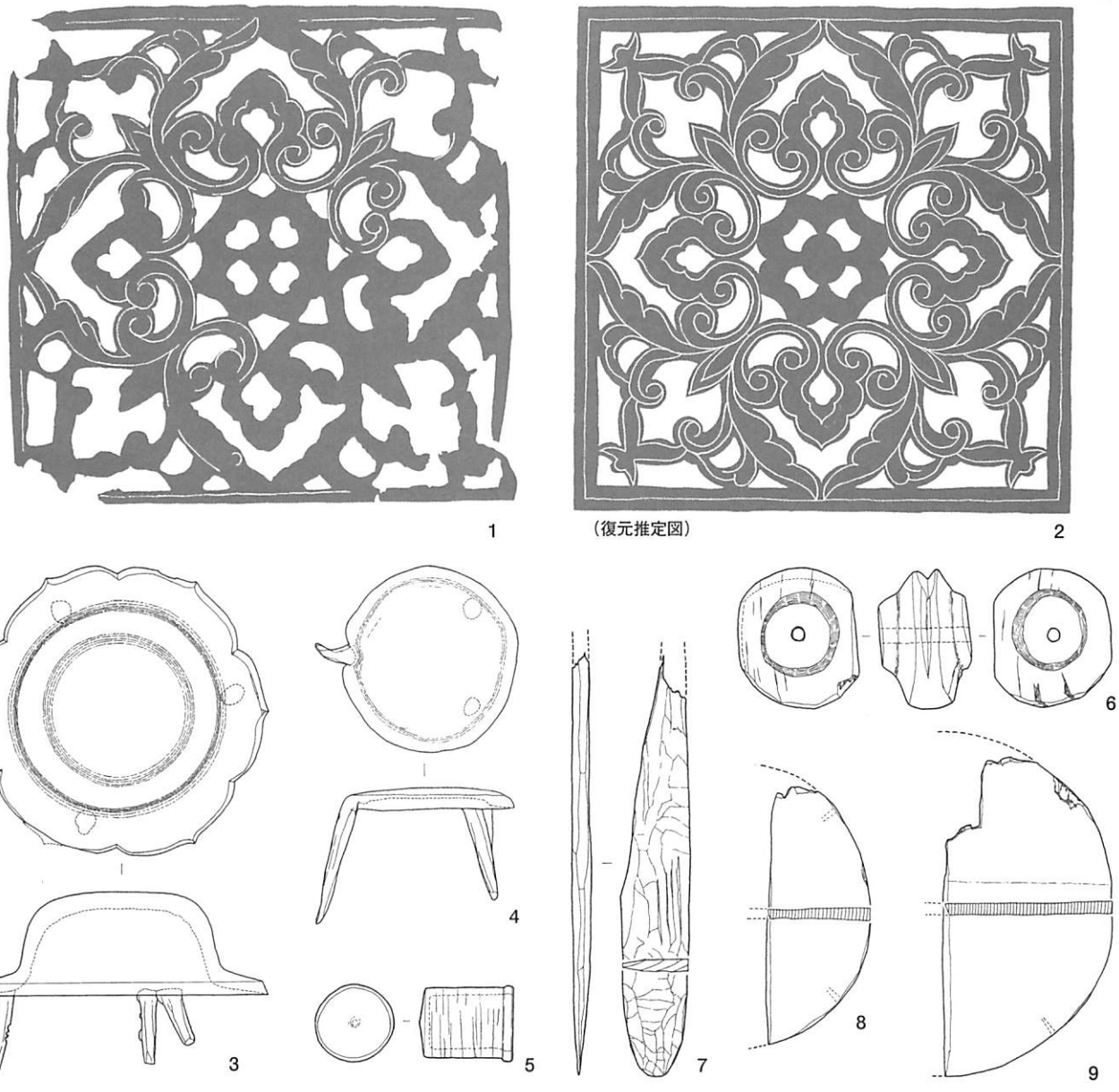


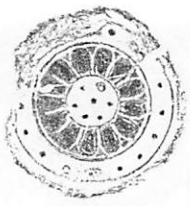
図65　第312次調査出土金属・木製品　1・2は2：3、3～5は1：2、6～9は1：3

なお、発掘調査終了後、調査地およびその周辺で地中レーダー探査をおこなった。その結果、池岸の北東辺、中島の北辺、岬の先端の位置を示す反応があった（図64）。さらに、弱い反応ながら、SX7680Bがさらに北側と西側に延びる可能性のあることも判明した。また、東区のすぐ東側に、今回確認した池岸より低い位置で、もう1条の石列の反応が認められた。これは石組みの池岸とみられることから、この池岸を東岸とする下層の池があることを示唆し、非常に注目される。　（清野孝之）

3．出土遺物

金属製品　図65の1～5は、いずれも池SG7700の池底の石敷直上から出土した金銅製品。1は垂木先飾り金具。11.2cm×11.0cmの、ほぼ正方形を呈する。厚さは0.6mm。縁取りの内側に対葉花文を左右、上下対称形に配置し、透し彫りの文様の輪郭線を毛彫りで表現している。表面の一部に鍍金が残るが、概して遺存状態は良くなく、文様部分の一部は欠失し、毛彫りの大半は錆化のために確認しがたい。2は1をもとに推定復元した図。3は釘隠し金具で、座金の平面形は六花形をとる。直径8.9cm、高さ3.0cmで、裏面に最長2.5cmの脚釘が3ヶ所に付く。鋳造であり、裏面は鋳放しであるが、おもて面は丹念に研磨が施される。4も釘隠し金具。直径5.4cm、高さ0.6cmの鋳造品で、裏面に最長3.5cmの脚釘が3ヶ所に付く。5は直径2.2cm、高さ2.8cmの軸頭金具。鋳造品で、内外面に回旋状の削り調整の痕跡が残る。内径からすると、装着した軸の

1.（緑釉）水波文塼



2.軒丸瓦6138M型式（1：6）

図66　第312次調査出土瓦塼

直径は1.5cmほどとなる。なお、同じ石敷直上から萬年通寶（760年初鋳）が1点出土している。

木製品　図示した木製品は、いずれも池SG7700の堆積土最下層から出土したもの。6は滑車状製品。未製品であれば、墨壺の糸車のような用途も考えられる。7は細身の杓子。8、9は曲物底板。その他に少数の籌木（ちゅうぎ）がある。注目すべきことに、池堆積土最下層から、おびただしい量の建材削り屑が出土した。池発掘範囲のほぼ全域に及んでおり、ほとんどが手斧、やりがんなで加工された材の残片であり、わずかに部材状の残欠もある。また北西区中央付近の土坑SK7699を中心とした狭い範囲から大量の檜皮片も出土した。一端を切り取った長さ60cmほどの細いものから微細な切片にいたるまで、まとまった形で投棄されていた。（井上和人）

瓦塼類　池SG7700とSX7701中から、多量の瓦塼類が出土した（表10）。軒丸瓦6138A・F～J型式、軒平瓦6767A・B型式、6768A～D型式は阿弥陀浄土院所用とされてきたが、今回もまとまって出土した。軒丸瓦6138M型式（図66－2）は新型式。単弁蓮華文で外区は素文縁、弁数13、中房蓮子1＋6、瓦当径14.9cm。平城京左京一条三坊二・三坪間の一条条間路から同笵品が1点出土。

他に、施釉瓦4点、（緑釉）水波文塼1点、刻印瓦9点が出土した。施釉瓦の内、1点は平瓦凹面に墨書があり、「施米　賀」と読める（図67）。同じ面に緑釉がわずかに遺る。残存長8.0cm、厚さ1.5cm。他の3点はいずれも二彩瓦である。（緑釉）水波文塼（図66－1）は残存長7.9cm、厚さ4.0cmの小片で、側面に逃げをとって、線刻で文様を表現しており、平城京左京一条三坊十五・十六坪や、伝法華寺出土（東京国立博物館蔵）の緑釉水波文塼に類似する。本例は、肉眼では釉を確認できないが、非破壊分析の結果、緑釉の成分が表面に遺存していた。刻印瓦には、初出土の「一」や、「三」、「四」（目？）、「七」、「八」のほか「二」、「五」かと思われる刻印を押す。（清野）

木簡　木簡は南西区東端の池SG7700の堆積土から1点、北西区の埋甕SX7686の埋土から削屑6点、計7点出土した。「参河国遠江国」というように国名を列記したものと

表10　第312次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦						軒平瓦					
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数
6131	A	1	6285	?	2	6663	C	4	6725	A	2
6137	C	2	6308	A	1		?	1	6751	A	3
6138	A	5	6311	?	1	6664	F	1	6767	A	10
	B	5		A	1		?	1		B	5
	F	17	6313	Aa	1	6667	A	6	6768	A	3
	G	11		G	2	6685	B	1		B	4
	H	27	6320	Ab	1	6691	A	1		C	14
	J	1	7283	A	3	6713	A	1		D	1
	M	1	鎌倉		26	6714	A	1		?	1
	?	19	中世巴		1	6716	A	1	平安		1
6225	A	1	近世巴		1	6719	A	1	鎌倉		15
	?	1	型式不明		8		C	3	中世		1
6282	?	1					Ga	1	近世		1
6284	B	1					H	1	現代		3
	Ec	1					J	1	型式不明		7
6285	A	3					?	1			
軒丸瓦計					145	軒平瓦計					98

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他			
重量	334.9kg	863.3kg	14.6kg	0.7kg	鬼瓦	1	熨斗瓦	1
点数	1,670	4,458	8	2	水波文塼	1	箆書平瓦	1
					施釉瓦	4	刻印瓦	9

考えられ、荷札木簡ではなく帳簿様の木簡の断簡か。同じ場所からは、上部左右に二対の切り込みがある封緘状木製品も出土している。SX7686出土の削屑のうち1点は「言」と読めるが、旁がある可能性がある。（渡辺晃宏）

土器　池SG7700を中心に整理箱5箱分出土している。その内注目される2点について報告をおこないたい。

図68－1は、須恵器杯Aの底部外面に被り物をつけた男性像を描いた墨画土器である。床土より出土。図68－2は、奈良二彩の壺の胴部と考えられる。外面は緑釉と透明釉がかけられている。透明釉の一部にやや赤みがかった部分があり、三彩の可能性も考えられる。蛍光X線分析をおこなった結果、鉄の比率は他の部分より多いものの、呈色材として用いられたものかは特定できなかった。内面はロクロメがみられる。池SG7700出土。（金田明大）

4．検出遺構の解釈と課題

SX7680B、SX7685B、SX7690の構造　礎石落し込み穴群SX7680B、SX7685B、SX7690は、土層の層序関係から、いずれも池と併存し、その中に建てられていた礎石建物跡と考えられる。SX7685B、SX7690の周囲には、礎石落し込み穴の部分をのぞく全面に池底の石敷を舗設するのに対し、SX7680Bだけは、東端の1間分を除き、池底の石敷が全くみられず、礫を敷いて整地する（SX7684）。加えて、SX7680Bの埋土から長さ1.5m程度の大きな礎石や、出枘の付く礎石が出土していることを考え合わせると、他の2者とは異なる大型の建物と推定される。SX7685B、SX7690もSX7680Bと柱筋、柱間がそろうので、これと一連のものとみられる。但し、本格的な礎石建物というよりも橋か廊などの付属施設の可能性が高いと思われる。また、SX7680Bの床下部分に位置するSD7691、SK7696～

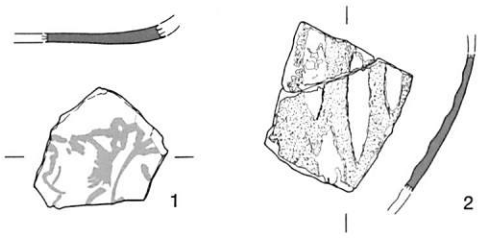


図68　第312次調査出土土器　1：4

を考える上で非常に重要である。

下層掘立柱建物の柱穴は、掘形、抜取穴ともに池底の堆積土に覆われることから、池より新しくならないことは明らかである。しかし、両者が併存したか否かはいずれとも判断しがたい。建物を建て替える際に、地盤安定のための地業として、いったん池底の堆積土を除去した可能性も捨てきれないからである。従って、これも現時点では不明としておき、今後の調査にゆだねたい。

5．調査成果とその意義

今回の調査では、いくつかの注目すべき知見が得られた。以下に列挙しておく

①阿弥陀浄土院の中心部分に園池の存在を確認したこと。従来から園池の存在は想定されてきたが、実際にその遺構を確認したのは今回が初めてである。

②阿弥陀浄土院下層遺構の存在を確認したこと。礎石建物の直下において掘立柱建物跡を検出したことは、これが池と併存したか否か現時点では不明であるものの、この地の阿弥陀浄土院以前の様相を考える上で重要な材料となる。下層遺構については、造営当初の阿弥陀浄土院とみることも不可能ではないが、阿弥陀浄土院の前身遺構である可能性も十分にあるだろう。

一方、法華寺には、光明皇后に関わる写経事業を行った外嶋院などの施設があったことが知られている。嶋とは園池のことであり、今回検出した下層遺構を阿弥陀浄土院の前身遺構とし、これに園池が伴っていたとすると、その有力な候補となりえる。光明皇太后の一周忌斎会に間に合わせるべく、1年という短期間で建立されたことが事実であるならば、その前身施設を利用した蓋然性は極めて高いといえる。

③阿弥陀浄土院園池を奈良時代にさかのぼる浄土庭園と見なせること。今回検出した阿弥陀浄土院園池は、浄土信仰に基づいて造られていることは明らかであり、建物と庭園が一体となって表現されることから、平安時代後期以降に急増する浄土庭園の先駆けとなる遺構として位置付けることができよう。　（清野）

第三一二次調査出土木簡

法華寺阿弥陀浄土院園池ＳＧ七七〇〇

□河国　遠江□　［国カ］

(99)・19・5　081

図67　第312次調査出土墨書瓦「施米賀」

7698は水中に建つ特殊な礎石建物の床を支持するための地業痕跡であったとも解釈し得よう。

SG7700下層の解釈　地中レーダー探査の結果、池SG7700が上下2層に分かれる可能性がでてきた。一方、発掘調査の結果では、池底の石敷が現存しない部分から礫混暗灰色砂が検出されており、下層の池に関連する可能性をもつものとして注目される。つまり、礫混暗灰砂を礫敷の池底整地層とみることもできるわけである。

まず、石敷を上層、礫敷を下層の池底とみた場合、下層の礫敷を全面改修して石敷とし、上層の石敷が抜けてしまった部分から下層の礫敷が見えている（全面改修案）、または、下層を一部改修し、礫敷を利用しつつ、部分的に石敷を追加し、両者を併用した（部分改修案）と考えることができよう。

ところでSX7680Bの周囲には礫敷整地層SX7684が存在する。これは礎石建物の床下部分の地業とも解釈できるが、これも同様に下層の池底と考えることもできる。上層の石敷を造る際、建物の床下になる石敷を省略したものと推定できよう。

つぎに、下層が存在しないとみた場合、礫敷と石敷に時期差はなく、単なる工程差と解して、両者を併用した（工程差案）ものと考えることができる。また、礫混暗灰砂は池底の施設ではなく、単なる自然堆積と考えることも可能である。

池底に石敷を部分的に施す例は東院園池下層SG8500Aにみられ、部分改修案や工程差案のように、池底に異なる2つの仕様を併用するとしても不自然ではない。しかし、いずれの案も、石敷の下層を精査していないため決定的な証拠を欠き、現時点では不明とせざるを得ない。

SG7700と下層掘立柱建物との関係　SX7680A、SX7685Aは、礎石建物の下層に存在する掘立柱建物跡であるが、これらと池SG7700が併存したか否かは、下層遺構の性格

◆平城京左京三条二坊二坪（長屋王邸）の調査―第303-8次

1．はじめに

調査地は、奈良市二条大路南1丁目、平城京左京三条二坊二坪の西南隅に当たる。二坪を含め、一・二・七・八坪の四つの坪は、奈良時代前半には、長屋王邸ついで光明皇后の宮であったと考えられている。本調査地はちょうど長屋王邸の西内郭南半部に当たり、長屋王の子女やその母たる長屋王の妻妾が居住していた「西宮」と呼ばれる空間とみられ、重要な遺構の検出が予想された。今回、店舗建築に伴う事前調査として、東西14m、南北10m、面積140m²の発掘区を設け、1999年12月8日から27日まで調査を行った。

2．検出遺構

調査区の層序は、近年の盛土、耕土、黒褐粘質土（遺物包含層）を経て地山である青灰粘土層となり、この面で検出を行った。検出面の標高は59.80m前後である。池1基、溝1条、小穴2基などを検出した。

SG7750　奈良時代前半の曲池。今回はその東北部を検出した。池の汀線は調査区東端中央からやや弧を描きながら西北西に向かい、調査区北西端で北西方に潜る。池の斜面は汀線に沿う形で、幅0.6～1.5mの帯状に径4～7㎝程度の礫を敷きつめた洲浜敷護岸となっている。洲浜斜面部の勾配は一様でないが18%前後。池の水深は池の一部を検出しただけであり不明だが、残る洲浜の中程に水面を想定すれば（W.L.=59.9m）、調査区南端で約20㎝である。池底は粘土質の地山で、礫敷は確認しなかった。景石についてはあったかどうか不明である。

池の規模は検出した範囲で、東西14m以上、南北10m以上。全体像は不明だが、調査区の東約11mで実施した第291次調査（1997年度）では池を確認していないことから、池の汀線は調査区外の東でほどなく南折するものと推測できる。北西端の汀線の行方は近隣調査例がなく不明であるが、池が本調査区の北・西さらに南に延びるも

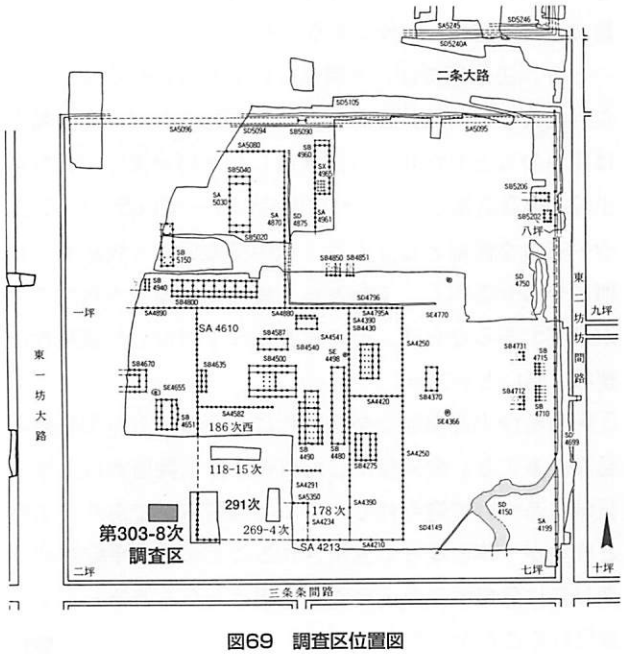


図69　調査区位置図

図70　SG7750（北西から）

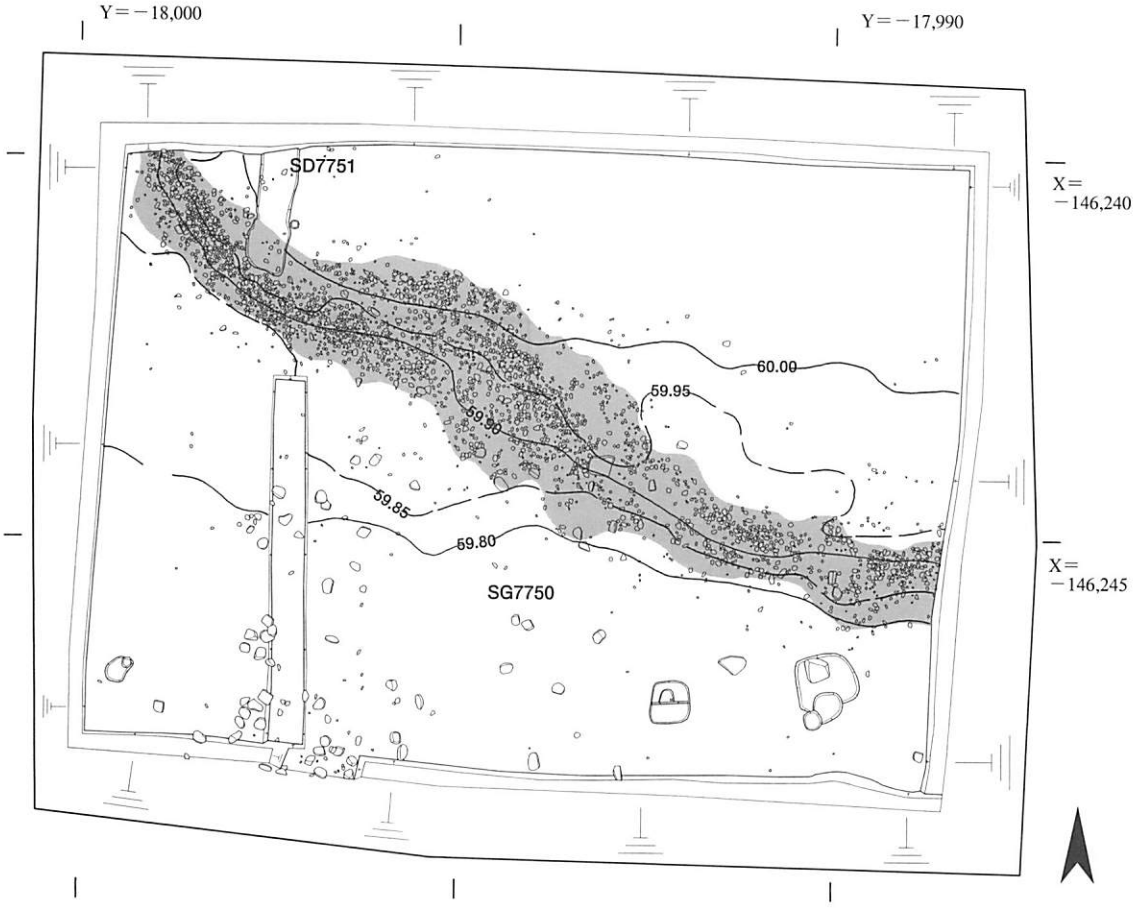


図71　第303－8次調査遺構平面図（色付け部分は洲浜敷）1：100

のであったと想定することもできよう。池への導水経路は不明だが、北西方の東一坊大路東側溝からなされたのかもしれない。

池が平城遷都当初に遡るか否かは分からないが、池埋土には編年Ⅲ期の土器が多く含まれていることから（Ⅲ古段階も含む）、池の造営は長屋王邸の時期に遡るものであり、土器Ⅲの段階、すなわち皇后宮の時期以降に池が廃絶したものと推測される。

SD7751　調査区西北で検出した南北溝。SG7750の洲浜敷を切っており、池廃絶後の遺構である。

なお今回は奈良時代後半代の顕著な遺構を確認できず、後半期の様相については不明。

3．出土遺物

池の洲浜敷上面及び池埋土から土器・瓦塼類が出土した。土器は須恵器が多く、その年代は平城宮土器編年Ⅲ期が中心である。墨書土器は3点出土し、うち1点は「酒」、1点は「□［造ヵ］」と記す。軒瓦は7点出土した。6272A・6284C型式（Ⅰ－1期。長屋王邸期）が各1点、6135B・6719A（Ⅱ－2期。皇后宮期）がそれぞれ3点・1点、6282Bbが1点である。丸瓦が13.8kg119点、平瓦が56.7kg398点、塼が7.5kg5点出土した。

4．まとめ

一・二・七・八坪の四町域において洲浜敷きの曲池を検出したのは今回が初めてである。四町内における園池遺構としては、長屋王邸時代の七坪東南部の蛇行溝SD4150が知られるだけであったから、今回の発見により、長屋王邸での複数の園池の存在を考慮する必要が出てきたことになる。『懐風藻』には、田中朝臣浄足が長屋王邸で「西園」の園池を詠じた漢詩がみえ、従来これを邸宅東南のSD4150に比定することもあったが、「西宮」に位置するSG7750こそよりふさわしいと言えよう。この比定が妥当か否かは今措いておくにしても、ともあれ、調査例が少なく不明な点が多い二坪の様相を窺う上で、SG7750の発見は貴重である。ただ、調査面積が小さく、SG7750を含む園池の全体規模やその意義づけについては、周辺調査の成果をまって論じたい。　（山下信一郎）

◆平城京左京三条一坊十坪の調査
―第304次

1．はじめに

この調査は、店舗新築にともなう事前調査で、奈良県教育委員会の依頼を受け実施した。調査地は平城宮の南面東門である壬生門から230mほど南に位置し、平城京の条坊復原では左京三条一坊十坪にあたる。これまで十坪内は、第230次調査、第234−10次調査（ともに『概報1992』）および奈良市教育委員会の第219次調査（『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　平成２年度』）により発掘がおこなわれているが、いずれも小規模であり、十坪の性格を決定づけるまでにはいたっていない。そこで、十坪西半部の様相をあきらかにするため、条坊計画上の南北中心軸（三条条間北小路心と三条条間路心の中軸）を含むかたちで調査区を設定した。調査は1999年４月28日～７月９日にわたっておこない、面積は約900m²である。

調査区の基本的な層序は、上から耕土、床土、遺物包含層である明茶灰色砂質土、黄灰色ないし褐灰色粘質土、暗灰色微砂の順である。遺構は、基本的に遺物包含層の直下で検出している。後世の耕作などによる削平によって、南半部はすこし低くなっている。そのため、遺構検出面の標高は北半で61.9m、南半で61.8mである。

2．検出遺構

奈良時代の遺構は、掘立柱建物２棟、掘立柱塀２条、井戸２基、溝２条、土坑１基、溝状遺構などがある。他には弥生時代後期の溝（SD7477･7478）を検出している。

SB7470　調査区北半にある桁行５間×梁間２間、南北に庇をもつ東西棟掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間、庇の出ともに８尺。柱根は残存しないが、断割調査により確認した柱痕跡の径は約９寸である。切り合い関係から後述のSE7475･7479より古い。

SA7483　SB7470の16尺東に位置する柱間３間の掘立柱南北塀。柱間寸法は両端間が11尺、中央間のみ12尺と広く取る。扉口であろう。この扉口の心とSB7470の南北心が一致することから、建物に付随する施設と考えられる。

SE7475　調査区北端にある東西3.8m×南北3.2mの井戸。井戸枠等は抜き取られていて遺存せず、掘形も抜取穴によって破壊されていてはっきりしない。

SE7479　SB7470の西妻柱掘形を壊して掘られた井戸。直径１mと小さいが、深さは遺構検出面から1.3mである。

SB7480　調査区南半にある桁行10間×梁間２間、柱間10尺等間の東西棟掘立柱建物。柱はすべて抜き取られてい

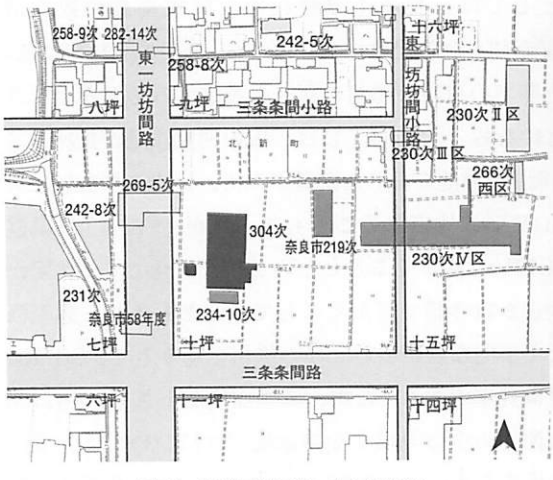


図72　調査区位置図　１：4000

図73　SB7480北東隅柱の礎板

図74　SX7481･7482（北西から）

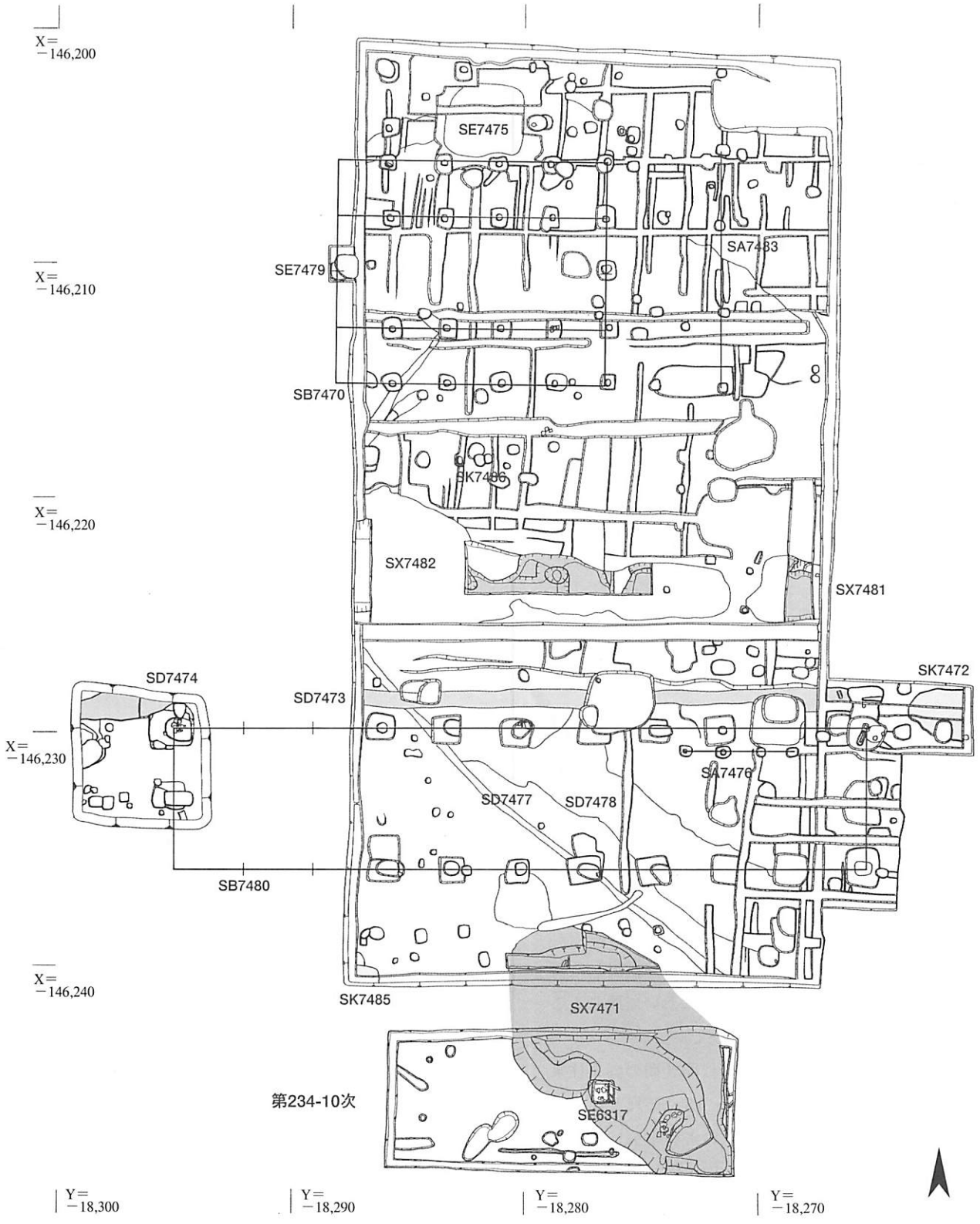


図75　第304次調査遺構平面図　1：250

て残存しないが、ほとんどの柱穴で棒状（一辺10cm、長さ60～100cm）の礎板が遺存、四隅では十字に組まれていた（図73）。礎板の方向に法則性はなく、上面の標高も61.10～61.40mとばらつきがある。

SD7473　調査区南半にある素掘りの東西溝。幅70cm、深さは遺構検出面より30cmである。その位置からSB7480の北雨落溝と考えられる。

SD7474　拡張区北端にある幅70cm、素掘りの東西溝。SB7480との位置関係からSD7473につながるものと考えられる。

SK7472　SD7473の東延長線上にある土坑。東西３m以上、南北2.2mの楕円形を呈し、深さは25cmである。

SX7481・7482　調査区中央にある溝状遺構。その位置から十坪を南北に区画する溝の可能性もある。両者間およびSX7482内には陸橋が存在するので、厳密な区画施設ではなく、南北の行き来は可能であったと思われる。

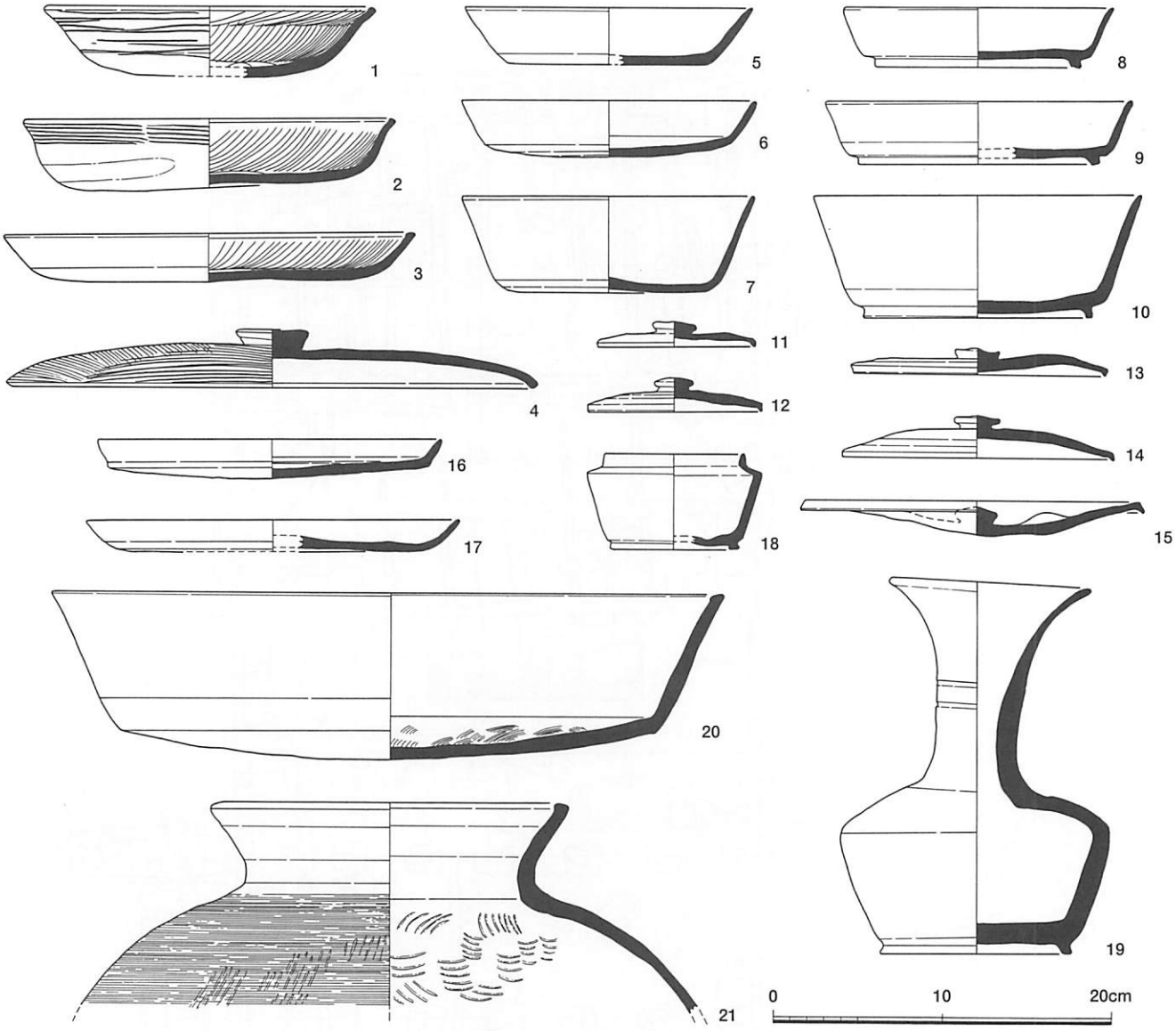


図76　SD7473出土土器　1：4

SX7471　南に近接する第234−10次調査で検出した斜行流路SD6316の北延長部分。本調査区において閉じることが判明。深さは遺構検出面から80cmである。

SA7476　SD7473のすぐ南にある柱間３間の掘立柱東西塀。柱間寸法は不規則で東から４・5.5・5.5尺となる。

SK7485・7486　調査区南西隅および中央にある土坑。奈良時代の土器・瓦片が出土している。

３．出土遺物

木製品・金属製品・石製品　SB7480の柱穴に遺存していた礎板以外に、SX7482やSK7472から棒状の木製品が、遺物包含層から鉄鏃、砥石などが出土している。

瓦塼類　出土した瓦は表11の通りである。調査面積の割に軒瓦の出土数は５点と少なく、その時期はⅡ期後半からⅢ期前半である。ところで、SB7480北東隅柱抜取穴から隅切平瓦が１点出土、寄棟造あるいは入母屋造建物の存在を示唆している。（西山和宏）

土器・土製品　瓦塼類を除く土器・土製品の出土量は、コンテナ35箱分である。中・近世の陶磁器類と平城京に先行する弥生時代後期の土器、古墳時代後期の須恵器が若干含まれるものの、出土土器のほとんどは奈良時代前半期の土師器、須恵器である。奈良時代前半期の土器が出土した主な遺構には、SX7471、SK7472、SD7473、SE7475、SB7480の柱抜取跡、SX7481、SX7482、SK7485などがあるが、ここでは、比較的出土量の多い東西溝SD7473出土土器を図示した（図76）。ここからは、

表11　第304次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6135	A	1	6721	Hc	1
	Bc	1			
	?	1			
6174	A	1			
型式不明		1			
軒丸瓦計		5			

	丸瓦	平瓦	塼	道具瓦他
重量	140.2kg	354.0kg	12.5kg	隅切平　1
点数	1,160	3,085	13	

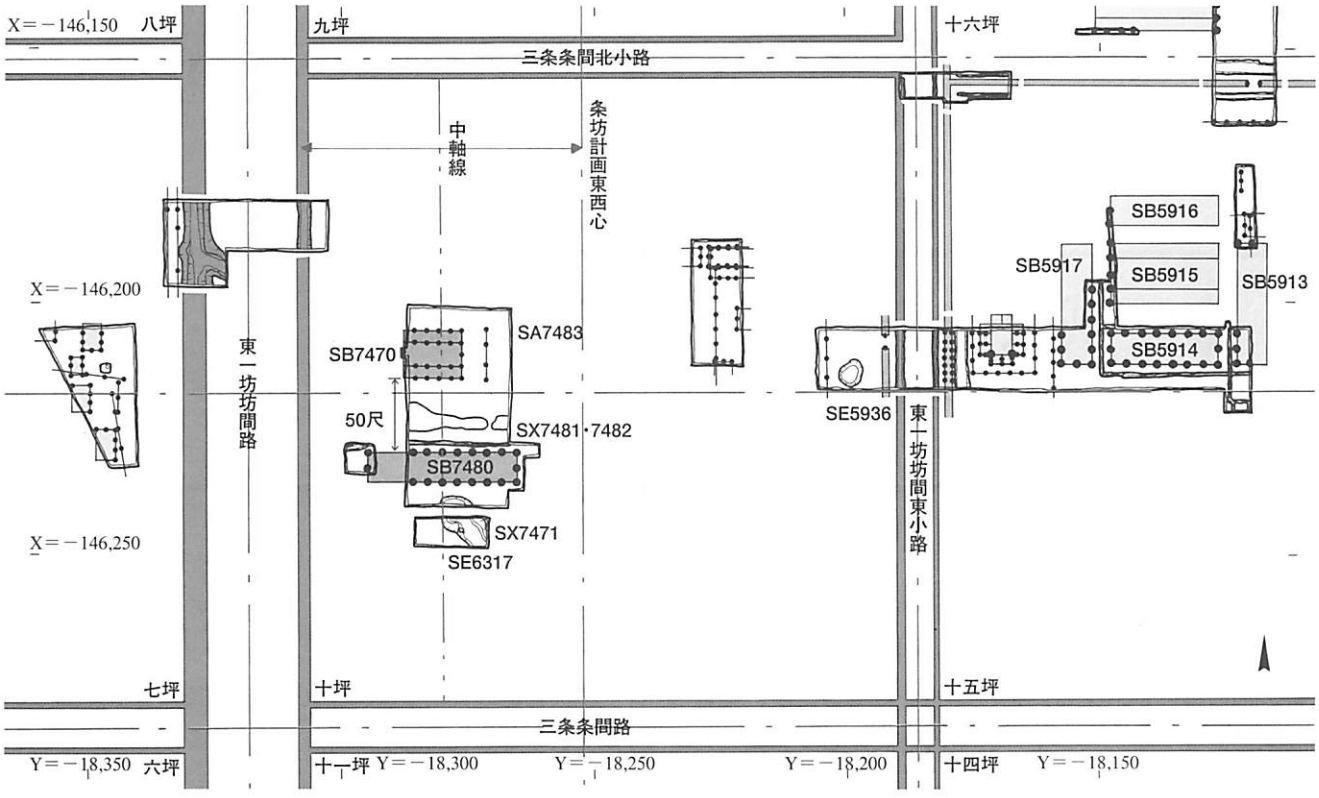


図77　平城京左京三条一坊十坪　遺構配置図　1：1500

土師器26点、須恵器64点の計90点が出土した。須恵器の出土比率が高いことと、須恵器には多様な器種を含むことが特徴としてあげられる。土師器には杯A（1・2）、杯B、杯B蓋、皿A（3）、皿B蓋（4）、小型甑、韓竈、甕A・Bがある。須恵器には杯A（5～6）、杯B（8～10）、杯B蓋（11～15）、皿A（16・17）、高杯、壺E（18）、壺K（19）、鉢A、鉢F、壺A、壺A蓋、同蓋、平瓶、盤A（20）、甕A（21）、甕Bなどがある。これらの土器は、一部平城Ⅱを含むものの、大半は平城Ⅲ古の範疇に納まる。この他に、土坑SK7486からは底部外面に墨書（文字不明）した須恵器杯B、掘立柱建物SB7480の柱抜取跡からは底部外面に焼成後「大丸」と針書きした須恵器杯A、包含層からは2個体分の蹄脚円面硯が出土している。

（川越俊一）

4．まとめ

平城京左京三条一坊は、大学寮に推定されている七坪や「内□〔匠ヵ〕寮」と記された木簡が出土している十五・十六坪のように、官衙的性格の強い場所であったことが指摘されている。これに対し十坪では、東端のSE5936（第230次）から「□枝宅車二両」の木簡が出土、個人の邸宅であった可能性を示す。一方、西半部のSE6317（第234-10次）からは池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土、十坪が平安京において神泉苑にあたることを考慮にいれれば、池をそなえた施設の存在も想定できる。

残念ながら、本調査では十坪の性格を決定するには至っていない。しかし、西半部の様相があきらかとなり、興味深い遺構の配置など貴重な事例を追加したといえる。

桁行総長100尺のSB7480は、十坪における条坊計画上の東西心と東一坊坊間路東側溝心の中軸線上にたっている。坪全体ではなく、西側半分を意識した建物配置である。SB7470とSB7480の建物の東西心は一致しないが、SB7470に付随する施設であるSA7483を含めた東西心とほぼ一致する。さらに、SB7470とSB7480の間隔はちょうど50尺となる。以上から、SB7480とSB7470、SA7483は同時併存の可能性が強く、出土遺物から少なくとも奈良時代前半には存在していたと考えられる。また、SX7471については第234-10次調査で平城Ⅲの段階まで機能していたと報告、本調査区においてもそれを裏付けた。さらに、坪を南北に区画するSX7481・7482も同様のことがいえる。

以上から、SB7470・7480、SA7483、SD7473・7474、SX7471・7481・7482は奈良時代前半期において併存していたと考える。しかし、奈良時代後半期になると前代とは土地利用形態が異なり、小規模な建物配置もしくは空閑地であった可能性が高いといえる。

今回判明した西半部における建物配置から十坪を東西に二分する区画施設の存在が想定される。これまでの調査から東半部の状況が西半部と少々異なった様相を示すことも、その傍証となる。しかし、この施設が宅地内の区画なのか、坪を二つに区画するものかは現段階では判断できない。東と西で出土した木簡が示す十坪の性格については今後の調査に期待したい。

（西山）

◆平城京左京三条一坊七坪の調査
―第303-4次

1．はじめに

調査地は、奈良市二条大路南３丁目183に所在し、北新大池の南に位置する。休耕地となっていたが、集合住宅を新築する計画があり、事前調査として発掘調査をおこなった。調査区は建物建設部分を中心に南北36m、東西12mの範囲で設定し、面積は432m²である。調査期間は1999年７月12日から８月13日。

調査地は、平城京左京三条一坊七坪の中央部西よりにあたる。同坪では、これまで奈良市教育委員会が１カ所、奈文研が６カ所の調査をおこなっており（奈良市第38次調査、平城宮第231次、第234−16次、第242−8次、第258−2次、第258−5次、第269−5次）、今回の調査地は、第258−2次の西、第258−5次の北に位置する（図78）。

2．基本層序

本調査区の基本的な層序は、現地表から畑の耕作土である黒色土、床土である橙灰褐色砂質粘土、遺物包含層である灰褐砂質土、地山である黄灰白色シルト質粘土となる。

橙灰褐色砂質粘土は、標高63.0m前後に層厚10㎝程で調査区全体に認められるが、北半では灰褐砂質土がみられず、直下で黄灰白色シルト質粘土となる。本調査中、柱穴掘形の平面が最も大きいSB7717においても、確認した深さが35〜40㎝前後であり、旧地表面を含め、地山自体が一定の削平を受けたものと推定される。

また、地山である黄灰白色シルト質粘土層には、下層の水性堆積物である灰褐色砂層の隆起が部分的に認められた。この傾向は特に調査区西辺、および東辺南半において顕著である。

3．検出遺構

床土上面で、大小の南北耕作溝を検出した。埋土中からは近世から奈良時代にかけての遺物が出土している。

図78　調査区位置図　（1：2000）

図79　調査区全景（北より）

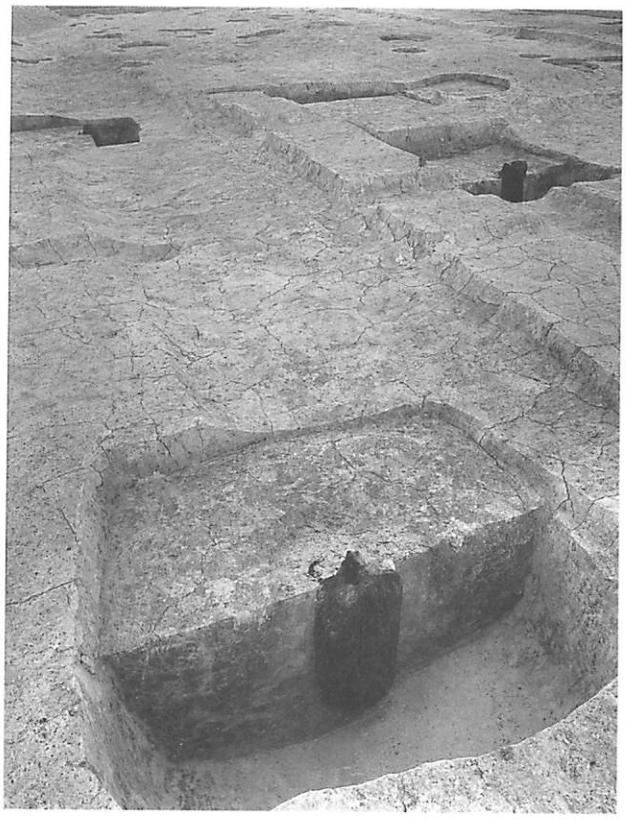


図81　SB7717検出状況（南西より）

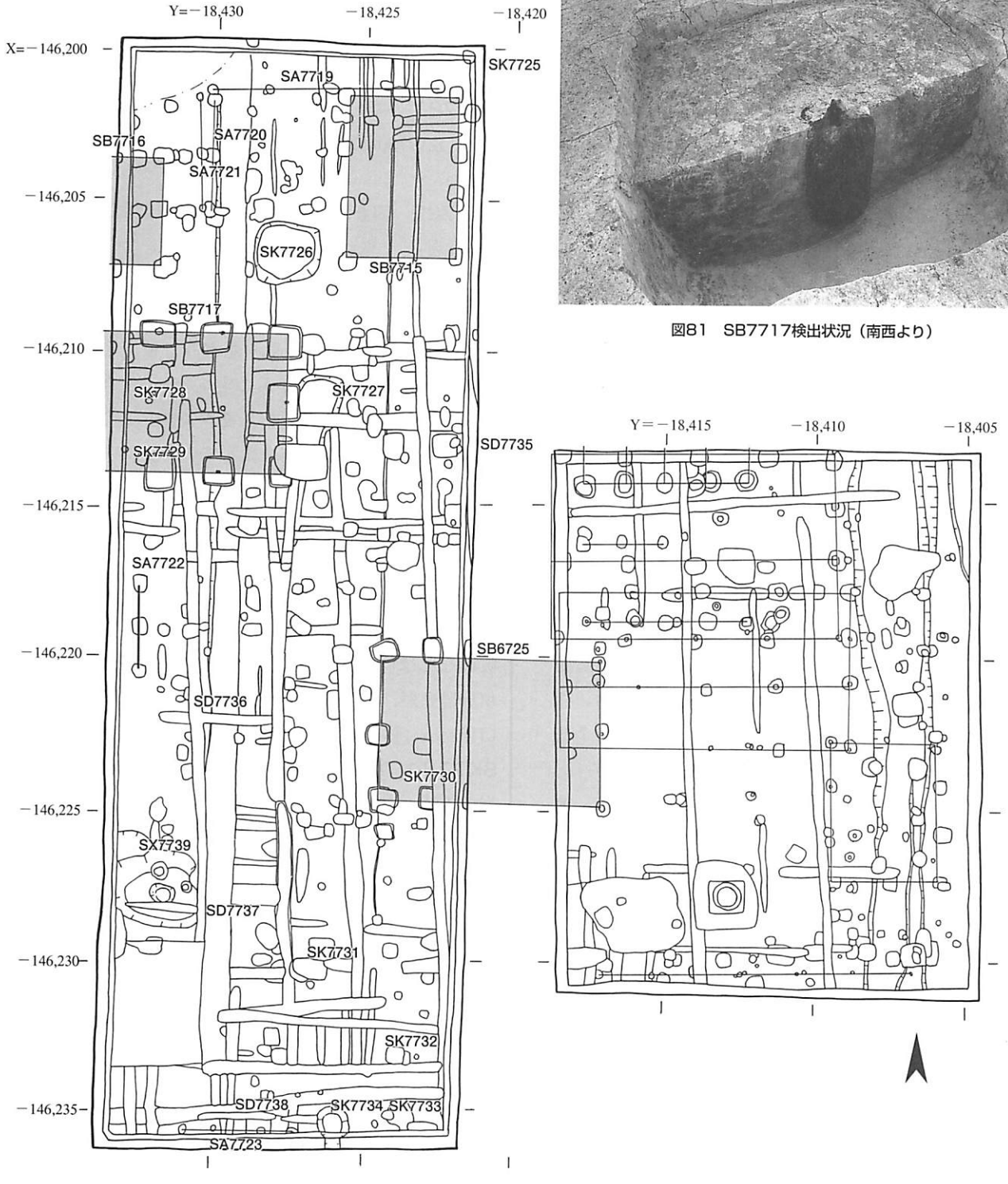


図80　第303−4次（西）・258−2次（東）遺構平面図（1：200）

図82　SK7732須恵器甕出土状況（北より）

床土掘削後、遺物包含層上面、および地山面において、掘立柱建物４棟、塀５条、および土坑、溝を検出した。この他にもまとまりを把握できない大小の柱穴がある。

包含層下において検出した遺構は、遺物のありかたなどから、おおむね奈良時代あるいはそれ以前のものと考えられるが、明確に時期を押さえられるものは乏しい。以下に主な遺構について記述する。

SB7715　調査区北東端で検出した東西3.6m南北5.3m、梁行２間（柱間６尺：以下同じ）桁行３間（６尺）の南北棟掘立柱建物。柱穴に柱痕跡は認められず、埋土全体に土器片の投棄がみられることから、柱穴はいずれも抜き取り穴であり、柱はすべて抜き取られている。

SB7716　調査区北西端で検出した南北２間（６尺）東西２間以上（６尺）の掘立柱建物。調査区西壁に柱穴がかかり、東西方向の１間分を確認した。東西棟になる可能性がある。

SB7717　調査区中央やや北よりで検出した梁行２間（7.5尺）桁行３間以上（７尺）の東西棟掘立柱建物。柱穴は１辺1.2m前後の方形の掘形をもつ。確認した７基のうち３基に柱根が遺存していた（図81）。これらは、いずれも堀形の中央ではなく、偏った位置にある。前述のように、遺構検出面から堀形底面までの深さは30～45cm前後であった。東妻中央の柱掘形は、奈良時代の遺物を含む土坑SK7727に切られる。また、東から３列目の柱筋に位置する土坑SK7728は、柱穴掘形埋土と同じ暗灰色の粘質土を埋土とするが規模が小さく断面が皿状を呈する浅いものである。

SB6725　調査区中央やや南より東端で検出した梁行２間（８尺）の東西棟掘立柱建物である。本調査区では桁行２間分（５尺）を確認した。この建物は、東に隣接する第258－2次調査で検出した東西棟建物SB08の西半部分に相当すると考えられ、その結果、SB6725は、南北4.8m東西7.4m、梁行２間（８尺）桁行５間（５尺）の東西棟建物であることが確定した。なお、建物内に位置するSK7730は、柱穴と同様の埋土をもち浅い皿状の断面形をもつ。

SA7719　調査区の北端、SB7715の北妻の外側に沿って検出した柱間６尺４間分の東西塀。

SA7720　調査区西北で検出した柱間6.5尺２間分の南北塀。

SA7721　調査区西北で検出した柱間6.5尺２間分の南北塀。SA7720とほぼ同じ位置にあるが、SA7720よりも新しい。

SA7722　調査区中央西側で検出した柱間５尺２間分の南北塀。

SA7723　調査区南端で検出した東西柱列。３間分確認したが、中央がやや広い。柱穴の形状は杭列状である。

SK7727　調査区中央やや北寄りで検出した南北2.2m、東西1.5mの浅い不整形の土坑である。埋土上層の橙褐土には砕片化した土器片を含んでいたが、下層には無遺物の灰褐砂質土が堆積していた。SB7717の妻柱の堀形を切る。

SK7729　１辺50cmの略方形の土坑。土坑内に平瓦が多量に廃棄されていた。

SK7732　調査区南西隅で検出した径0.8mのすり鉢状の土坑。上層には砕片化した土器を含み、下層からは、破砕してはいるものの１個体に復元することのできる須恵器甕が、口縁部を下にした状態で出土した（図82）。口径24cm、体部最大径41cmをはかる。

SK7734　調査区の南端で検出した径１m程のすり鉢形の土坑。南端は調査区外へとのびる。埋土は焼土・炭を含む赤褐色土で、多量の須恵器、土師器、瓦片が出土した。これらに伴って土馬の破片も出土した。塵芥処理用の土坑であろう。土器は平城宮土器Ⅳ・Ⅴ段階のもの。

SD7736・7737・7738　いずれも奈良時代のものと考えられる幅30cm前後の東西溝である。SD7737は、SX7741の下面で検出し、SD7738はSK7734に切られる。これらの溝は、溝の間隔・位置関係から、第231次で検出した坪内道路SF5777の南北側溝に対応する可能性がある。

SX7741　調査区南西部で検出した径2.6mの不整形の浅いくぼみである。埋土中に土器片を含む。土器は平城宮土器Ⅲ段階のもの。

4．出土遺物

遺物は、奈良時代のものを中心として、床土上面で検出した耕作溝、柱穴、溝、土坑などの各遺構、および遺物包含層中より出土した。

土器・土製品は、奈良時代の土師器、須恵器を中心にコンテナ16箱分が出土した。SK7734からは土馬が出土している。本調査区の南に位置する第258－5次調査では、土坑中より完形にちかい2点の土馬が、また坪東端の第242－8次調査では、21点の土馬片が出土している。瓦は小片が多いが、軒丸瓦3点、鬼瓦などが出土した（表12参照）。

金属製品には、鉄製品、銅製品があり、鉄釘、飾り金具などが出土している。鋳造関係遺物として、鞴の羽口片、炉壁片、鉱滓が出土している。石製品では、砥石が出土した。

5．まとめ

今回の調査では、南北に細長い調査区の性格上、規模の判明した建物は、SB7715、およびSB6725の2棟にすぎないが、調査対象地である左京三条一坊七坪において従来の調査で指摘された、①小規模な建物が多い、②建て替えが少ない、③建物の密度が低い、というありかたは、本調査区においても認められた。

表12　第303－4次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6348	A	1			
6233	?	1			
型式不明		1			
軒丸瓦計		3	軒平瓦計		0

	丸瓦	平瓦	塼	凝灰岩	道具瓦他	
重量	12.3kg	54.8kg	2.5kg	0.3kg	鬼瓦	1
点数	178	968	3	2		

遺構の帰属時期については必ずしも明確な材料が得られてはいないが、判明したものについては平城宮土器Ⅲ段階以降のものであり、このことも従来の調査成果とおおむね一致する。

左京三条一坊七坪は、上述のような遺構のありかたから、貴族の邸宅ではなく、京内の官衙的施設が所在したものと推定され、平安京における位置関係、あるいは奈良時代前半の遺構が希薄であることなどを根拠に、大学寮に比定されている。今回の調査では、このことを積極的に裏づける材料は得られなかった。

本坪は、平城京内でも調査の蓄積された地域であることから、従来の調査成果全体を踏まえた坪内の利用あるいは性格についての検討が必要であろう。　（次山　淳）

平　城　専（こらむ）欄　②

◆おっ、お代官様、水上池は庭園遺構で御座候

水上池は平城宮北東部に面する東西約370m、南北約370mの台形状の池で、東岸が東院東辺延長部にほぼ一致し、南岸が平城宮北辺に合うことなどから平城宮造営時に造成されたものと考えられている。平城宮の北部には松林宮を含む広大な松林苑があるが、水上池北岸の出嶋には瓦の散布がみられることから水上池も松林苑に含まれるとされている。

この傍証となる弘化4年（1847）の水上池に関する古文書『水上池中島九ッ取払につき御願案』が天理大学附属図書館に保管されている。これによれば、河内の江田の豊次郎なる人物が水上池近傍の村々の庄屋から水上池を漁場として利用する権利を得、網場に用いるための長さ30間の出島を池の東岸、北岸、西岸の3ヶ所にそれぞれ設ける計画をし、その工事の許可を庄屋らが郡山藩の代官に願い出ていた。ところが着工後、水を抜いてみると、北岸に長さ20間、東岸に6間の出嶋の遺構と考えられる「下地出嶋」が見つかった。そこで庄屋らは北岸の出嶋は合わせて50間とし、これ以外の9ヶ所の「古嶋」（出嶋や中嶋）を取り払う約束を豊次郎とし、その追認を代官に願ったのであった。

この文書が示す通り、弘化4年まで水上池には出嶋や中嶋が多数存在し、禁苑の趣を色濃く残していたのである。因みに、北浦定政の『平城宮大内裏跡坪割之図』の完成は5年後の嘉永5年（1852）であり、庭園遺構に関する記述はみられない。

現在の水上池は南西部が釣堀となり出嶋遺構1ヶ所が北岸に残るのみであるが、天皇陵として保存される古墳群とともに歴史的風土特別保存地区に指定され風致が良好に維持されている。春日山に月が昇れば大宮人の遊ぶ船を思い浮かべたくもなる環境である。松林苑の風致の保全は貴重な遺構・遺物の保存と同様に平城宮を理解する上でも重要な課題である。

年報Ⅰ連載予定だった「遺跡の履歴」は諸般の事情でコラムになりました。詳しくは別稿で。

（内田和伸）

◆平城京左京三条一坊九坪の調査
―第303-5次

はじめに　住宅建設に伴う発掘調査。トレンチの場所は平城宮壬生門から東南方向へ約100mの位置にあり、東西に長い８ｍ×２ｍの発掘区を設定した。

検出遺構　土層は、上から厚さ20cm程の耕作土、厚さ20cm程の暗黄灰色土の床土があり、その下に厚さ10cm程の黄灰色土・灰褐粘質土の遺物包含層がある。

検出遺構は溝一条で、発掘区南半部で奈良時代の東西溝SD7745の北肩を検出した。溝幅はトレンチ南まで70cmあり、溝の南肩はトレンチ外にのびる。溝の深さは約40cmで、上層が灰褐粘質土、下層が白色砂質土の堆積があり、下層から奈良時代後半の土師器・須恵器が出土している。

調査地は、平城京左京三条一坊九坪の東西・南北ともほぼ中央に近い部分にあるが、今回検出した東西溝SD7745は九坪の南北をほぼ二分する位置にある。ただ、九坪内の東端中央部分の調査（第242−9次）では、東西溝を検出していないので、SD7745が坪の西端から東端まで連続するものであるかどうかは、今後の発掘調査によって確認する必要がある。　（山崎　信二）

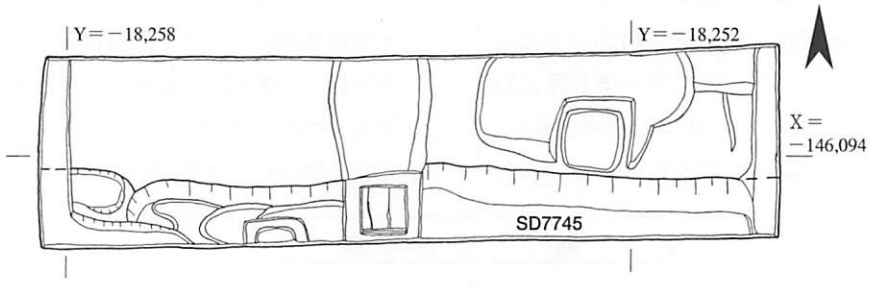
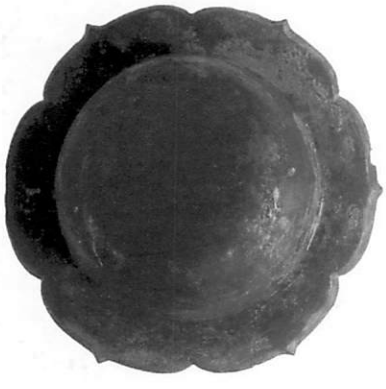


図83　第303−5次調査遺構図　1：80

表13　1999年度　その他の調査一覧

調査次数	地　区	概　要
303-1	北面大垣	南北５m、東西４m、20㎡の調査区を設定。奈良時代の遺構はなく、近世および近現代の土坑２基を検出。近世の土師器、近現代の陶磁器が出土。
303-3	薬師寺東門推定地	電線埋設による事前調査で、調査区は南北2.3m、東西0.4m。平城京西二坊坊間路と六条条間路との交差点付近にあたり、薬師寺東門もくしは東面築地の基壇東側石と考えられる幅約21cmの花崗岩製南北石列を検出した。その下層からは、近世の竹製上水道のジョイント部分にあたる木材が２点出土した。
303-6	北面大垣	南北4.5m、東西２m、９㎡の調査区を設定。表土直下で地山。現代の攪乱あり。
303-7	左京三条一坊二坪	南北３m、東西３mの調査区を南北２ヶ所に設定。北区北端で宅地内の区画溝の可能性のある東西溝の南肩を検出。他に小柱穴もあるが、遺構としてはまとまらない。土器瓦少量出土。
303-9	薬師寺境内	ライトアップ用の照明設置に伴う調査。薬師寺回廊の外周部分の東・西・南東・南西側に、1.6m四方の調査区を４カ所設定（計10㎡）。現地表下1.5mまで掘り下げ、各所で整地層を確認した。土器１箱分、軒瓦７点を含む、瓦18袋分が出土。
303-11	宮内、内裏北方遺跡	南北５m、東西２m、10㎡の調査区を設定。市庭古墳の周濠位置にあたっており、地表下35cm以下は平城宮造営時に周濠を埋め立てた整地土層が深さ１m以上に及んでいる。
303-12	宮内、西面北門北東部	南北２m、東西４m、８㎡の調査区を設定。奈良時代の小穴１基、近世以降の土坑1基。奈良時代の土器・瓦が出土。



奈良国立文化財研究所
〒630-8577　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630-8577, JAPAN